

令和 6 年 度

業 務 年 報

令和 7 年 3 月

鳥取県園芸試験場

目 次

I	試験研究課題一覧	3
II	試験研究成果	20
III	研究業績一覧	68
IV	総務報告	71
V	令和6年半旬別気象表	75

I 試 験 研 究 課 題 一 覧

研 究 課 題 名	掲 載 ペ ー ジ	予 算 区 分	研 究 期 間	分 類
《果 樹 関 係》				
1. 病害虫発生予察調査事業 (1) 果樹主要病害虫の発生予察調査	20	国補	S26～	環境研究室
2. 新農薬適用試験 (1) 果樹主要病害虫に対する新農薬の実用化試験	20	受託	H10～	環境研究室
3. 園芸産地の今と未来を見据えた病害虫の防除対策 (1) ナシ黒星病多発園における防除対策 ア 摘果期の発病果叢における潜在的な感染量 イ 梨なびアプリの鳥取県における利用（年次比較、参考試験） ウ 梨なびアプリの鳥取県における利用（春季比較） エ 早春におけるナシの発育ステージ別感受性 オ 摘果期に生じた病斑の形態 カ 開花前における各種殺菌剤のナシ黒星病に対する予防効果 キ 有機銅水和剤の葉における残効（自然感染条件下） ク 有機銅水和剤の果実における防除効果及び残効（自然感染条件下） ケ 有機銅水和剤の果実における防除効果及び残効（接種条件下） コ ‘新甘泉’果実における感受性変化の発生要因 (ア) クチクラ層の観察 (イ) 果実上での挙動 (ウ) 病斑の形態（接種） (エ) 病斑の形態（自然発生） (2) ナシ炭疽病多発園における防除対策 ア キャプタンを有効成分とする薬剤を用いた体系の防除効果 (3) みどりの食料システム戦略に係る農薬低減技術の確立	20	単県	R5～R9	環境研究室

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
ア 成分数およびリスク値の異なる薬剤の防除効果 イ 自動草刈りロボットを用いた落葉破碎による黒星病の胞子飛散抑制 (4) カキの害虫対策 ア 灰色かび病に対する各種殺菌剤の防除効果 (5) ダニ類の防除対策 ア ハダニ類に対する防除効果-アシノナピル水和剤と有機銅剤の近接散布- (6) カメムシ類の防除対策 ア スマート害虫モニタリングシステムを活用した予察調査の検証				
4. 鳥取県オリジナル品種等の多収安定生産技術の確立 (1) ‘新甘泉’の収穫適期の拡大 ア 袋の種類による検討 イ エテホン液剤の散布 ウ サンテ®黒の被覆による熟期促進効果の検討 (2) ‘甘太’の収穫期予測 (3) スマートフレッシュを用いた‘新甘泉’の日持ち性向上	23	単県	R6~R10	果樹研究室
5. ナシ栽培の革新的な省力化技術の確立 (1) ジョイント栽培の高品質・安定多収栽培技術の確立 ア ‘新甘泉’のジョイント栽培における超早期多収栽培技術の開発 イ ‘新甘泉’の腋花芽の利用が収量・果実品質に及ぼす影響(着果2年目) ウ 夜間のFR光照射による補光が‘おさゴールド’苗木の伸長に及ぼす影響 エ 摘心が‘新甘泉’における同一側枝上の芽に及ぼす影響 オ ヒオモン水溶剤による‘新甘泉’の新梢伸長抑制効果の検討 カ ‘おさゴールド’JV仕立てにおける主枝高および側枝	23	単県	R6~R10	果樹研究室

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
<p>仰角の違いが樹体生育に及ぼす影響</p> <p>キ ‘おさゴールド’ ジョイント仕立て樹における新梢管理方法の違いが果実品質に及ぼす影響</p> <p>ク 二十世紀系品種の袋かけ省略化に向けた果面保護剤の検討</p> <p>ケ ジョイントV字トレリスの生産性および作業性の検討</p> <p>(ア) ‘甘太’ 及び ‘王秋’ (短果枝花芽の維持が「容易」な品種) の検討</p> <p>(イ) ‘新甘泉’ (短果枝花芽の維持が「困難」な品種) の検討</p> <p>コ 樹体ジョイント仕立て ‘甘太’ 及び ‘王秋’ の適正着果量の検討</p> <p>サ 樹体ジョイント仕立て ‘新甘泉’ 及び ‘甘太’ の着果位置の違いが果実品質に及ぼす影響</p> <p>シ ジョイント仕立て ‘新甘泉’ における全量有機質肥料施肥体系の実証 (場内)</p> <p>ス ジョイント仕立て ‘新甘泉’ における全量有機質肥料施肥体系の実証 (現地園)</p> <p>セ ‘王秋’ ジョイント仕立て樹の効率的な土壌改良方法の検討</p> <p>ソ 除草剤の散布が除草作業の省力化及び ‘おさゴールド’ の1年生苗木の生育に及ぼす影響</p>				
<p>6. 気候変動に負けない高品質果実生産技術の確立</p> <p>(1) 温暖化の影響評価と対応技術の開発</p> <p>ア ‘新甘泉’ の日焼け果軽減対策</p> <p>(ア) 新梢誘引による検討</p> <p>(イ) 日焼け防止資材 (サンテ、チタン袋、褐色一重袋) の効果検討</p> <p>(ウ) 日焼け防止資材 (バラカ、みかんまもるテープ) の効果検討</p> <p>(エ) サンテ®白の使用可能回数の検討 (使用回数3回目)</p>	26	単県	R6~R10	果樹研究室

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
<p>イ 台風等による潮害が翌年の‘新甘泉’の花芽生育に及ぼす影響</p> <p>ウ 中間台品種の違いが‘夏さやか’‘新甘泉’‘王秋’の枝幹病害の発生に及ぼす影響</p> <p>エ 元肥および夏肥の有無が樹体生育及び果実品質に及ぼす影響（18年目）</p> <p>オ 化学肥料の2割低減試験</p> <p>カ ネパール由来ナシ系統の受粉樹適性調査 （ア）満開日、花芽着生及び花粉量の調査 （イ）各温度帯における花粉発芽性の調査 （ウ）県内主要品種に対する親和性の調査 （エ）低温環境下における県内主要品種に対する親和性の調査 （オ）人工受粉した県内主要品種の果実品質の調査 （カ）花粉の保管方法が発芽能に及ぼす影響</p> <p>キ ‘輝太郎’に対する凍霜害軽減資材（フロストバスター）の効果確認</p> <p>ク ‘輝太郎’および‘西条’の日焼け果軽減対策の検討</p> <p>ケ 鳥取県におけるカンキツ類栽培試験</p> <p>(2) 果樹の生態調査</p> <p>ア 開花期及び果実品質調査</p> <p>イ ‘長十郎’の花芽着生量に関する調査</p> <p>ウ ナシの新梢発育に関する調査</p> <p>エ ナシの花芽生育調査</p> <p>オ 作況調査</p> <p>カ カキ品種特性調査</p> <p>キ カキ園土壌のアレロパシー活性の実態把握</p>				
<p>7. 「輝太郎」を核としたカキ産地力強化に向けた栽培技術の確立</p> <p>(1) ‘輝太郎’早期成園化・早期収量確保技術の確立</p> <p>ア ジョイントV字トレリスによる‘輝太郎’の早期成園化・省力化試験</p> <p>イ ‘輝太郎’JV仕立てにおける側枝更新用の新梢発生</p>	30	単県	R6～R10	果樹研究室

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
<p>促進技術の検討</p> <p>ウ ポット育苗2年苗利用による‘輝太郎’の早期樹冠拡大試験</p> <p>エ 土壌保水材処理が‘輝太郎’苗木の生育に与える影響</p> <p>オ 接ぎ木テープの食い込みが‘輝太郎’の生育に及ぼす影響</p> <p>(2) ‘輝太郎’果実品質向上のための技術開発</p> <p>ア アブシシン酸液剤による‘輝太郎’の熟期促進の検討</p> <p>(ア) 着色前散布</p> <p>(イ) 着色後散布</p> <p>イ 樹上散水による‘輝太郎’の熟期促進の検討</p> <p>ウ 果実袋による‘輝太郎’の外観品質向上の検討</p> <p>(3) 既存品種の生産安定</p> <p>ア ‘花御所’のへたすき果軽減対策試験(現地ほ場)</p> <p>(ア) 着果管理の早晚が‘花御所’の果実品質に及ぼす影響</p>				
<p>8. 新技術を活用した他産地に打ち勝つブドウ栽培技術の確立</p> <p>(1) ‘シャインマスカット’に続く次世代品種の検討</p> <p>ア ‘マスカサーティーン’等の特性確認(3年生以上)</p> <p>イ ‘富士の輝’等の特性確認(3年生以下)</p> <p>(2) 基幹品種の高品質化</p> <p>ア ‘ピオーネ’の反射マルチによる着色向上</p> <p>イ ‘ピオーネ’のアブサップによる着色向上</p> <p>ウ ‘シャインマスカット’のMA包装による鮮度保持試験</p> <p>エ ブドウハウス栽培の前進化(予備試験)</p>	31	単県	R4~R8	砂丘農研セ
<p>9. 市場競争力のある鳥取オンリーワン園芸新品種の育成</p> <p>(1) 極早生および高品質ナシの育成</p>	32	単県	R6~R10	果樹研究室 砂丘農研セ

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
ア 交雑種作出 イ 定植前選抜 ウ 未選抜系統の果実調査 エ 選抜候補系統の果実特性調査 (2) ナシ新品種、新系統の評価試験 ア 場内試験 イ 現地栽培試験 ウ ‘鳥園L’の黒星病感受性検定 エ ‘ゆつみ’の機械化樹形への適応性評価 オ 短果枝着生性の育種選抜に利用可能なDNAマーカーの開発 カ スマートフレッシュを用いた‘鳥園L’の日持ち性向上 (3) 早生および輸出に適したカキ新品種の育成 ア 交雑種作出 (4) 交雑育種によるカキ新品種の育成 ア 未選抜系統の果実調査				
《野菜・花き・特産関係》				
10. 病害虫発生予察調査事業 (1) 野菜主要病害虫の発生予察調査 (2) 病害虫発生状況と防除対策の情報提供 (3) 病害虫の診断依頼	34	国補	S26～	環境研究室
11. 新農薬適用試験 (1) 野菜主要病害虫に対する新農薬の実用化試験	34	受託	H10～	環境研究室
12. 園芸産地の今と未来を見据えた病害虫防除対策 (1) ブロッコリーの病害虫防除対策 ア ブロッコリーの病害虫対策 (ア) ブロッコリー黒すす病に対する薬剤の防除効果(初夏) (イ) ブロッコリー黒すす病に対する耐病性の品種間差(2023年秋冬)	34	単県	R5～R9	環境研究室

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
<ul style="list-style-type: none"> (ウ) ブロッコリー黒すす病に対する薬剤の防除効果 (秋冬) (エ) ブロッコリー黒すす病に対する散布量および散布間隔による防除効果 (秋冬) (オ) 越年どり作型のブロッコリーべと病に対する品種間差の確認 (2022年、2023年) (カ) 越年どり作型のブロッコリーべと病に対する防除体系の検討 (2022年、2023年) (キ) ブロッコリーのシロイチモジヨトウに対する新規薬剤の防除効果 イ ドローンを活用した防除方法の検討 <ul style="list-style-type: none"> (ア) ドローンを活用したブロッコリーの防除方法の検討 (初夏：コナガ) (イ) ドローンを活用したブロッコリーの防除方法の検討 (秋冬：黒すす病) ウ スマート農業技術を活用した予察調査方法の検討 <ul style="list-style-type: none"> (ア) IoT カメラを利用した予察調査の検証 (ハスモンヨトウ) (2) ラッキョウの病害虫防除対策 <ul style="list-style-type: none"> ア ラッキョウの病害虫対策 <ul style="list-style-type: none"> (ア) ネダニ類に対する物理的防除による殺虫効果の検討 (予備試験) イ ドローンを活用した防除方法の検討 <ul style="list-style-type: none"> (ア) ドローンを活用した防除方法の検討 (ラッキョウさび病) (3) ナス科作物の病害虫防除対策 <ul style="list-style-type: none"> ア ミニトマトの病害虫対策 <ul style="list-style-type: none"> (ア) ミニトマトにおける常温煙霧法の防除効果 (ミカンキイロアザミウマ) (4) ナガイモ腐敗症状への対策 <ul style="list-style-type: none"> ア ナガイモの病害虫対策 <ul style="list-style-type: none"> (ア) ダゾメット粒剤冬季無被覆処理および定植時粒剤処理による褐変症発生への影響 (2年目) (イ) 処理時期の異なるダゾメット剤無被覆処理による芋 				

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
<p>品質への影響（1年目）</p> <p>(5) ネギ病害虫防除対策</p> <p>ア ネギの病害虫対策</p> <p>(ア) ネギ萎凋病に対する定植前処理による防除効果（育苗方式の違い、新農薬実用化試験を含む）</p> <p>(イ) ネギ萎凋病に対する品種間差の検討（予備試験）</p> <p>(ウ) ネギ萎凋病に対するベノミル剤およびチオファネートメチル剤の薬剤感受性検定</p> <p>イ ネギ“葉トロケ症”の原因究明と対策検討</p> <p>(ア) “葉トロケ症”より分離した原因菌の同定（2024年度採取分）</p> <p>(イ) <i>Dickeya fangzhongdai</i> の発症温度調査</p> <p>(ウ) <i>Dickeya fangzhongdai</i> に対する薬剤感受性検定</p> <p>(エ) <i>Dickeya fangzhongdai</i> に対する薬剤感受性検定（2種混用）</p> <p>(オ) <i>Dickeya fangzhongdai</i> に対するオキシリニック酸水和剤の効果確認（接種試験）</p> <p>ウ ドローンを活用した防除方法の検討</p> <p>(ア) ドローンを活用したネギの防除方法の検討（春ネギ：ネギさび病）</p> <p>(イ) ドローンを活用したネギの防除方法の検討（ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ）（新農薬実用化試験）</p> <p>(6) スイカ病害虫防除体系の確立</p> <p>ア スイカの病害虫対策</p> <p>(ア) トンネル作型でのスイカ作付け後処理における急性萎凋症状への影響</p> <p>(イ) スイカのアブラムシ類に対する薬剤の防除効果</p>				
<p>13. 鳥取の野菜主要品目における革新技術による生産安定</p> <p>(1) 鳥取スイカの生産拡大を目指す次世代栽培技術</p> <p>ア ハウス・トンネルの生産安定技術</p> <p>(ア) 作型別の穂木品種の選定</p> <p>a ハウス作型</p> <p>b 7月どりトンネル作型</p>	39	単県	R6～R10	野菜研究室

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
<p>(イ) 台木品種の特性調査</p> <ul style="list-style-type: none"> a 台木品種の特性調査（健全圃場） b 台木品種の耐病性比較（黒点根腐病） c 台木品種の耐病性比較（炭腐病） <p>(ウ) 黒皮種無スイカ「ガブリコ」における5本整枝3果どり栽培の検討</p> <p>(エ) ‘稀勢丸’における異常果の発生原因の解明</p> <p>(オ) 種苗会社が育成した耐病性系統のうどんこ病耐病性の検定</p> <p>(カ) 育苗期 UV-B 照射によるうどんこ病抑制効果の検定</p> <p>イ 高温期のスイカにおける高品質生産</p> <ul style="list-style-type: none"> (ア) ハウススイカにおける遮光技術の確立 <p>(2) 黒ボク地域における露地野菜の生産拡大</p> <p>ア ブロッコリーの高品質多収技術</p> <ul style="list-style-type: none"> (ア) 作型別適品種の選定 <ul style="list-style-type: none"> a 6月どり作型 b 10月どり作型 c 年内どり作型 d 2月どり作型（令和5年定植） (イ) 高温期定植における保水剤、バイオスティミュラント剤の活着への影響 <p>イ 白ネギの生産安定</p> <ul style="list-style-type: none"> a 有望品種の選定（9月どり作型） <p>(3) 施設利用野菜の高品質多収技術</p> <p>ア ミニトマトにおける夏季異常高温に対応した栽培技術</p> <ul style="list-style-type: none"> (ア) ハウス天面の農 P0 フィルム除去の検討 (イ) 高温対策としての定植時期の検討 (ウ) ミニトマト栽培における遮熱資材の検討（令和5年） (エ) ミニトマト栽培における遮熱資材の検討（令和6年） <p>イ 抑制メロンの高品質多収技術</p> <ul style="list-style-type: none"> (ア) 抑制メロンにおける台木品種試験 				

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
<p>(4) 鳥取県開発イチゴ品種の高品質多収技術</p> <p>ア 新品種‘堅しろう’の栽培技術</p> <p>(ア) 摘果の収量・品質への影響</p> <p>イ UV-B 照射によるイチゴの果皮硬度への影響</p> <p>(5) みどりの食料システム戦略に対応した栽培技術</p> <p>ア 生分解性不織布ポットの利用</p> <p>(ア) スイカ</p> <p>a スイカ栽培における生分解性不織布ポットの利用 (ハウス作)</p> <p>b スイカ栽培における生分解性不織布ポットの利用 (露地トンネル作)</p> <p>c 抑制小玉スイカ栽培における生分解性不織布ポットの利用</p> <p>d 抑制小玉スイカでの生分解性不織布ポットの実用性 (現地試験)</p> <p>(イ) イチゴ</p> <p>a イチゴ栽培における生分解性不織布ポット及びネイキッド培地の利用</p> <p>b イチゴ栽培における生分解性不織布ポットの実用性 (現地試験)</p> <p>イ 鶏ふんを利用した化学肥料の削減</p> <p>(ア) 白ネギ栽培における鶏ふん利用の検討(12月どり作型)</p>				
<p>14. 気候・風土に適応した砂丘ラッキョウ・ナガイモの安定生産技術の確立</p> <p>(1) ラッキョウにおける安定生産技術の確立</p> <p>ア 収量に影響する重点施肥時期の解明</p> <p>イ 現地優良系統の選抜と特性の解明</p> <p>(ア) 早出し栽培に適した現地優良系統の特性調査</p> <p>ウ 中部地区における施肥の検討</p> <p>(ア) 秋季重点施肥による肥料削減の可能性の検討</p> <p>エ 春肥施用が灰色カビ病・あめ色症状の発生に及ぼす影響</p>	46	単県	R6~R10	砂丘農研セ

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
<p>オ 福部砂丘における乾腐病耐病性系統の適応性検討</p> <p>(2) ‘ねばりっ娘’専用栽培技術の確立</p> <p>ア 縦割れ症発生原因究明と低減技術の確立</p> <p>(ア) pH低下処理が縦割れ症に及ぼす影響(現地試験)</p> <p>(イ) ホウ素配合資材の施用効果(現地試験)</p> <p>イ ‘ねばりっ娘’専用栽培指針の作成</p> <p>(ア) ‘ねばりっ娘’の生育特性調査</p> <p>(イ) 土壌改良資材による収量への影響(予備試験)</p> <p>ウ 基肥削減の影響</p> <p>(3) ナガイモ黒陥没症対策技術の確立</p> <p>ア 発生原因の究明と低減技術の確立</p> <p>(ア) 土壌の差異による影響</p> <p>a 土壌pHによる影響</p> <p>(イ) バイオスティミュラントの検討(予備試験)</p> <p>(4) ‘鳥取1u61’の安定生産技術の確立</p> <p>ア ‘鳥取1u61’に適した施肥法の検討</p> <p>イ 切片による子芋増殖法の検討</p> <p>ウ 品質向上技術の開発</p> <p>(ア) 出芽率向上に向けた種芋保存法の検討(予備試験)</p> <p>(5) 環境に配慮した施肥法の開発</p> <p>ア ラッキョウにおけるリン酸施用の削減</p> <p>イ 耐病性系統における特別栽培への適応性の検討</p> <p>ウ 汚泥肥料を用いた施肥の検討</p>				
<p>15. 地球温暖化に対応した白ネギ安定生産技術と弓浜特産野菜の栽培改善</p> <p>(1) ネギ軟腐病・萎凋病の発生を軽減する栽培技術の確立</p> <p>ア ほ場整地による畝間滞水解消とネギ生育(現地試験)</p> <p>(ア) ほ場嵩上げによる湿害回避</p> <p>(イ) 弓浜湿地におけるネギ湿害の実態調査</p> <p>イ 乾燥畑における9月どりネギの安定生産技術</p> <p>(ア) 現地ほ場の水分調査</p> <p>(イ) 高温乾燥時における土壌適湿管理がネギ生育収量に及ぼす影響</p>	48	単県	R5~R9	弓浜分場

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
<p>ウ 高温期の肥培管理技術 (ア) 夏越しネギにおける土壌改良資材の施用効果</p> <p>エ ネギ軟腐病・萎凋病防除技術の確立 (ア) 栽培期間短縮による夏越しネギ安定生産技術 (イ) バスアミド無被覆処理による土壌病害虫防除（現地試験） (ウ) トリフミン水和剤灌注処理と夏越しネギ茎盤褐変の発生時期（令和5年度）</p> <p>(2) 白ネギ周年栽培体系の強化</p> <p>ア 作型別適品種の選定 (ア) 5月どり (イ) 弓浜湿地での9月どり（現地試験） (ウ) 5月下旬定植10月どり短縮栽培 (エ) 12, 1月どり（令和5年度）</p> <p>イ 生産者ができる春ネギ抽台時期予測手法</p> <p>ウ 初夏どり無被覆栽培の前進化 (ア) ‘羽生一本太’の花芽分化特性</p> <p>エ 各種病害虫等に対する薬剤防除体系 (ア) 砂畑白ネギほ場での雑草防除体系（畑地雑草） (イ) ネギべと病発生後の薬剤防除試験</p> <p>オ 低コスト施肥技術の確立 (ア) 有機質原料入り化学肥料の施肥が春ネギ生育に及ぼす影響 (イ) 鶏糞、緑肥施用ほ場におけるL型肥料（低PK）が秋冬ネギの生育に及ぼす影響（令和5年度）</p> <p>カ 緑肥・輪作作物を組込んだ土壌環境改善 (ア) イモ類輪作後の白ネギ生育収量 (イ) 砂畑におけるネギの木質堆肥連用試験</p> <p>(3) 弓浜特産野菜の栽培改善</p> <p>ア ニンジン優良品種選定と栽培技術の検討 (ア) 春まき初夏どりニンジンの晩抽性品種選定</p> <p>イ カンショ ‘べにはるか’の栽培技術と早期出荷用良食味品種の検索 (ア) 早期出荷用良食味品種の検索</p>				

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
<p>(イ) コガネムシ薬剤防除試験 (ウ) 定植方法と発根促進資材処理による上物収量への影響（予備試験）</p> <p>16. 中山間地園芸作物の安定栽培技術の確立</p> <p>(1) 夏秋トマト‘りんか409’の高品質安定多収技術の確立</p> <p>ア 草勢維持による中位段の収量安定化</p> <p>(ア) 送風受粉と多かん水が6～8段果房の収量へ及ぼす影響</p> <p>(イ) 果梗捻枝による裂果抑制効果の検討 (ウ) 低価格肥料の検討</p> <p>イ 高品質安定多収品種の検索</p> <p>(ア) 耐裂果性品種における多かん水管理の検討</p> <p>(2) 中山間地における白ネギの安定・多収栽培技術の確立</p> <p>ア 7月どり作型に適した栽培方法の検討</p> <p>(ア) 育苗資材及び栽植本数が生育に及ぼす影響 (イ) 播種時期が生育に及ぼす影響</p> <p>イ 作型別適品種の選定</p> <p>(ア) 盆前どり (イ) 9月どり (ウ) 秋冬どり</p> <p>ウ 高品質多収技術の検討</p> <p>(ア) 鶏ふん利用による化学肥料の使用量低減 (イ) 夏秋どり品種‘源翠’に適した施肥量の検討 (ウ) 追肥時期の変更による生育への影響 (エ) 密植栽培による収量向上（予備試験）</p> <p>(3) ブロッコリーの安定栽培技術の確立</p> <p>ア 作型別適品種の選定</p> <p>(ア) 6月どり (イ) 夏秋どり</p> <p>(4) 夏秋ピーマンの高品質安定多収栽培技術の確立</p> <p>ア ピーマン斑点病に対する防除体系の検討 イ 施肥コスト削減</p>	52	単県	R6～R10	日南試験地

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
<p>(5) 新規品目の栽培技術確立</p> <p>ア 中山間地におけるトルコギキョウ9～10月収穫作型の適品種選定</p> <p>17. 鳥取の花き主要品目における安定・高品質生産技術の確立</p> <p>(1) 切り花（ストック）</p> <p>ア 生育促進効果が高いEOD照射と品質向上法の検討</p> <p>(ア) オールダブル試験品種の検討（スタンダード系）</p> <p>(イ) オールダブル試験品種の検討（スプレー系）</p> <p>(ウ) オールダブル品種における収穫後の品質評価（スタンダード系）</p> <p>(エ) オールダブル品種における収穫後の品質評価（スプレー系）</p> <p>(オ) PCa処理と低日照条件が奇形花発生に及ぼす影響</p> <p>(カ) PCa処理と高温が奇形花発生に及ぼす影響</p> <p>(キ) 芯止め発生の要因と発生低下法の解明</p> <p>(ク) 効果の高い花芽分化および開花促進手法の検討</p> <p>(ケ) PCa処理による奇形花発生を軽減する方法について（予備試験）</p> <p>イ 遮光とFR照射による開花調節</p> <p>(ア) 午前中のみ遮光による開花調節（予備試験）</p> <p>ウ 安定出荷につながる開花予測と品質保持技術の開発</p> <p>(ア) 精度の高い開花予測技術の開発</p> <p>(イ) スtock D2出荷に対応した前々日収穫の効果的な前処理方法の検討</p> <p>(2) 切り花（シンテッポウユリ）</p> <p>ア 露地作型の高品質化と長期出荷体系の確立</p> <p>(ア) 堆肥施用量の増量による施肥量の削減</p> <p>a F₁オーガスタ EX</p> <p>b F₁凜花 EX II</p> <p>(イ) 露地盆出荷作型に適した品種の検討</p> <p>(ウ) 全農開発堆肥入り肥料による化学肥料の削減</p> <p>(エ) 露地盆出荷作型に適した品種の検討</p>	55	単県	R6～R10	花き研究室

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
<p>(オ) 露地彼岸出荷作型に適した品種の検討</p> <p>イ 秋冬出荷作型の採花率向上と高品質化</p> <p>(ア) 直播き栽培の検討</p> <p>(イ) スイカ後作におけるシンテッポウユリの減肥栽培</p> <p>(ウ) 秋冬出荷作型に適した品種の検討</p> <p>(エ) 試験場育種系統に適した栽培方法の検討</p> <p>(オ) 試験場育種系統の現地適応性</p> <p>(カ) チェーンポットの種類が輪数に及ぼす影響の解明</p> <p>(キ) 追肥が輪数に及ぼす影響の解明</p> <p>(ク) NK 化成の追肥が輪数に及ぼす影響の解明（予備試験）</p> <p>(ケ) 育苗期後半の高温が抽台に及ぼす影響の解明</p> <p>(3) 切り花（アスター）</p> <p>ア 秋出荷マイクロアスターの品質向上と開花期調節に効果的な光照射法の検討</p> <p>(ア) 発芽率向上手法の検討</p> <p>(イ) アスターにおけるチェーンポット栽培の実証</p> <p>イ 大輪系アスターの栽培方法検討</p> <p>(ア) 大輪系アスターの品種検討</p> <p>(イ) 大輪系アスターのチップバーン軽減手法の検討</p> <p>(ウ) 電照を行う時間帯と電照時間が大輪系アスターの生育と品質に及ぼす影響</p> <p>(エ) 大輪系アスターの露芯花発生軽減手法の検討</p> <p>(4) 切り花（ハボタン）</p> <p>ア 高品質な切り花ハボタン栽培の確立</p> <p>(ア) 播種時期および栽植密度の検討</p> <p>(イ) シンテッポウユリ栽培後圃場における無施肥栽培の検討</p> <p>(5) 花壇苗</p> <p>ア EOD 光照射+EOD 加（保温）+わい化剤を組み合わせた早春出荷法の確立</p> <p>イ 高温期における安定・高品質生産技術の確立</p> <p>(ア) サルビアにおけるハウス降温管理の検討</p> <p>(イ) サルビアにおける苗サイズの検討</p>				

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
(ウ) サルビアにおける栽培用土の検討 (エ) パンジーにおけるハウス降温管理の検討 (オ) パンジーにおけるセルトレイ苗冷蔵処理の検討 (6) シバ ア 生理障害抑制法の確立 (ア) 土壌改良剤による地下部生育促進の検討 イ 秋冬期から夏期にバミューダグラス等の生育を旺盛にする保温および光照射法の検討 (ア) 保温および光照射がバミューダグラス等の生育に及ぼす影響				
18. 環境に配慮した持続可能な農業拡大推進事業 (1) 化学農薬・肥料の使用削減、廃プラスチックの排出量削減 ア 花壇苗における生分解性ポットの利用方法の検討 (ア) ペチュニアの定植前苗および定植後の生育に及ぼす影響 (イ) パンジーの定植前苗および定植後の生育に及ぼす影響 (2) ポータブルバッテリーを活用した簡易夜間電照技術の開発 ア ポータブルバッテリーと太陽光パネルを組み合わせた簡易電照栽培技術の確立	62	単県	R4~R6	花き研究室
19. 花ふれ愛事業 (1) ミニフラワーガーデン設置事業 ア 県中部施設への花壇苗配布	62	単県	R6	花き研究室
20. 市場競争力のある鳥取オンリーワン園芸品種の育成 (1) スイカ耐病性優良台木の育成と実用化 ア スイカつる割病耐病性系統の選抜及び形質固定 イ 倉吉極実西瓜における共台新品種‘台じょうぶ’の実用性アンケート調査 (2) イチゴ新品種の育成と実用化	62	単県	R1~R5	野菜研究室 砂丘農研セ 花き研究室

研究課題名	掲載ページ	予算区分	研究期間	分類
<p>ア 有望系統の3, 4次選抜</p> <p>(3) ナガイモ新品種の育成</p> <p>ア 実用性評価</p> <p>(ア) 縦割れ症多発ほ場における‘鳥取 1u61’の縦割れ症発生程度の調査</p> <p>(4) ユリ新品種の開発</p> <p>ア 秋冬出荷栽培に適したシンテッポウユリの開発</p> <p>(ア) 選抜系統の形質の改良</p> <p>イ ユリ小球開花性新品種の開発</p> <p>(ア) ‘鳥鱗 1号’の秋出荷栽培技術の確立</p> <p>(イ) ‘鳥鱗 1号’の抽台率を高める育苗方法の検討</p> <p>(5) アジサイ新品種の開発</p> <p>イ 八重咲き新品種の育成</p>				
《農林水産試験場臨時的調査研究事業》				
<p>21. 臨時的調査研究</p> <p>(1) カキ9倍体完全甘ガキ品種育成のための12倍体中間母本の作出</p> <p>(2) スイカ各種台木における土壌病害ホモプシス根腐病の耐病性検定(ポット試験)</p>	64	単県	R6	果樹研究室 野菜研究室

Ⅱ 試験研究成果

《果樹関係》

1. 病害虫発生予察調査事業

(1) 果樹主要病害虫の発生予察調査

担当者：山田高之・戸板重則・森本隆義・米村善栄

協力分担：病害虫防除所

ナシ、カキ、ブドウなど果樹病害虫の発生状況を調査し、発生予察情報を提供した。これらの主な内容は病害虫防除所ホームページに公開した。

(<http://www.jpjn.ne.jp/tottori/>)。

(本試験成績登載印刷物：19)

2. 新農薬適用試験

(1) 果樹主要病害虫に対する新農薬の実用化試験

担当者：山田高之・戸板重則・米村善栄

協力分担：なし

殺菌剤ではナシ黒星病、ナシ黒斑病の防除薬剤2種類、殺虫剤では、ナシのシンクイムシ類、ハマキムシ類の防除薬剤2種類について実用性を評価した。

(本試験成績登載印刷物：11)

3. 園芸産地の今と未来を見据えた病害虫の防除対策

(1) ナシ黒星病多発園における防除対策

ア 摘果期の発病果叢における潜在的な感染量

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：なし

摘果期にナシ黒星病の果実発病が認められた果叢における、外観上健全な果実の感染状況を明らかにすることを目的に、発生量調査を行った。その結果、平均で約2～3割の果実が潜在感染している可能性が示唆された。

(本試験成績登載印刷物：なし)

イ 梨なびアプリの鳥取県における利用(年次比較、参考試験)

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：NTT西日本(株)、中部農林局

梨なびアプリの本県における有効性を確認することを目的に、異なる年次間でその利用有無によるナシ黒星病の発生量を比較した。その結果、気象条件により散布回数が削減できることが示されたものの、その後追加散布を行わない場合には感染危険度が高まる可能性があった。

(本試験成績登載印刷物：なし)

ウ 梨なびアプリの鳥取県における利用(春季比較)

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：NTT西日本(株)、中部農林局

梨なびアプリの本県における有効性を確認することを目的に、その利用有無による春季のナシ黒星病の発生量を比較した。その結果、いずれの場合も同一の散布タイミングとなる可能性があり、防除回数削減は困難と推察された。

(本試験成績登載印刷物：なし)

エ 早春におけるナシの発育ステージ別感受性

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：なし

早春の発育ステージの違いによるナシ黒星病に対する感受性差異を明らかにすることを目的に、ステージ別に孢子接種を行った。その結果、花蕾露出期～落弁期の花蕾感受性は常に高く、特に花蕾露出期～鱗片脱落期に感染した場合には速やかに大型病斑を形成すると考えられた。

(本試験成績登載印刷物：なし)

オ 摘果期に生じた病斑の形態

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：なし

典型的な煤状病斑とは異なる特徴を持つナシ黒星病の果実病斑を対象として、その形態を明らかにすることを目的に病斑観察を行った。その結果、本病

斑は煤状病斑と同様に分生子形成が認められ、二次伝染源になりうると考えられた。また、病斑周辺部の小黑点は気孔周辺の細胞が着色することにより生じると推察された。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

カ 開花前における各種殺菌剤のナシ黒星病に対する予防効果

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：なし

生育初期に利用すべき最適な薬剤を明らかにすることを目的に、開花前のステージにおいて主要殺菌剤の散布後に接種を行い、その後の発生量を調査した。その結果、予防効果の程度は調査部位によってやや異なっていたものの、数剤を除いて防除効果が期待できる可能性があった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

キ 有機銅水和剤の葉における残効（自然感染条件下）

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：なし

自然感染条件下で、ナシ黒星病に対する有機銅水和剤の葉における残効を明らかにすることを目的に、同一期間内で散布間隔を変えて複数回散布を行い、その後の発生量を調査した。その結果、残効（防除効果）は、約5日間は極めて高く、約10日後においても実用的な水準が認められるが、約15日後には大きく低下する可能性があった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

ク 有機銅水和剤の果実における防除効果及び残効（自然感染条件下）

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：なし

自然感染条件下で、ナシ黒星病に対する有機銅水和剤の果実における防除効果及び残効を明らかにすることを目的に、同一期間内で散布間隔を変えて複数回散布を行い、その後の発生量を調査した。その結果、残効（防除効果）は、約5日間は極めて高

く、約10日後、約15日後においても実用的な水準で認められる可能性があった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

ケ 有機銅水和剤の果実における防除効果及び残効（接種条件下）

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：なし

接種条件下で、ナシ黒星病に対する有機銅水和剤の果実における防除効果及び残効を明らかにすることを目的に、接種までの期間を変えて散布を行い、その後の発生量を調査した。その結果、残効（防除効果）は、約5日間は極めて高く、約10日後、約15日後においても実用的な水準で認められると考えられたが、日数の経過とともに防除効果が不安定となる可能性があった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

コ ‘新甘泉’ 果実における感受性変化の発生要因（ア）クチクラ層の観察

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：なし

‘新甘泉’の果実が、ナシ黒星病に対して感受性変化を生じる要因を考察することを目的に、果実の表面構造と肥大状況を経時的に観察した。その結果、果実肥大量は7月に大きい傾向であり、4月から7月にかけて果実表面の構造が変化していたため、その関与が考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

（イ）果実上での挙動

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：なし

‘新甘泉’の果実が、ナシ黒星病に対して感受性変化を生じる要因を考察することを目的に、ナシ黒星病菌の果実上での挙動を経時的に観察した。その結果、感受性変化が生じる要因には、果実上における病原菌の発育ステージの違いがあると考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(ウ) 病斑の形態(接種)

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：なし

‘新甘泉’の果実に生じるナシ黒星病の病斑の形態を明らかにすることを目的に、接種時期別に発生した病斑を観察した。その結果、春季の感染では煤状病斑を生じ、それ以降～果実肥大の後期にかけての感染でえくぼ状の病斑を生ずると考えられ、病斑の種類によって子座の発生頻度や細胞の褐変程度は異なっていた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(エ) 病斑の形態(自然発生)

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：なし

‘新甘泉’の果実に生じるナシ黒星病病斑のうち、外観上の子座形成状態が異なる病斑の形態を明らかにすることを目的に、自然発生した病斑を観察した。その結果、外観上子座形成が認められる場合は、実際に子座が形成されていると考えられ、それが確認できない病斑においても顕微鏡下ではそれが認められることがあった。また、子座は春季と同様の領域に発達していると考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(2) ナシ炭疽病多発園における防除対策

ア キャプタンを有効成分とする薬剤を用いた体系の防除効果

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：なし

殺菌剤2剤の慣行防除体系下における追加防除の有効性を明らかにすることを目的に、2回散布の試験を行った。その結果、両剤とも高い防除効果が認められた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(3) みどりの食料システム戦略に係る農業低減技術の確立

ア 成分数およびリスク値の異なる薬剤の防除効果

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：なし

ナシ黒星病と黒斑病の防除に利用する殺菌剤の成分数およびリスク値の削減を目指し、現行の防除暦採用剤に代替できる可能性がある薬剤の防除効果を検討した。その結果、一部の薬剤で代替の可能性が示された。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

イ 自動草刈りロボットを用いた落葉破碎による黒星病の孢子飛散抑制

担当者：山田高之・米村善栄

協力分担：なし

落葉処分を省力化する手法を確立することを目的に、ナシ黒星病に対するロボット草刈機による落葉破碎の効果を検討した。その結果、本処理は子嚢孢子の飛散抑制および発生量の低減に有効な可能性があった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(4) カキの病害虫対策

ア 灰色かび病に対する各種殺菌剤の防除効果

担当者：戸板重則・米村善栄

協力分担：なし

カキの灰色かび病の防除強化とカキサビダニへの影響を調査するため、開花期前後の4月下旬と5月上旬の防除効果を確認した。その結果、開花前のフルアジナム水和剤散布は、‘輝太郎’の灰色かび病の発病に対して、デブコナゾール水和剤、ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル水和剤と同等の防除効果となり、防除効果が認められた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(5) ダニ類の防除対策

ア ナシのアシノナピル水和剤と有機銅剤の近接散布の検討

担当者：戸板重則・米村善栄

協力分担：なし

クワオオハダニを対象とした試験において、アシノナピル水和剤単用と同等以上の防除効果が認められたのは、60日前に有機銅水和剤を散布した区のみであり、50

日前にキャプタン・有機銅水和剤を散布した区と 30 日前に有機銅水和剤を散布した区ではこれにやや劣り、14 日前に有機銅水和剤を散布した区では大きく劣った。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(6) カメムシ類の防除対策

ア スマート害虫モニタリングシステムを活用した 予察調査の検証

担当者：戸板重則・米村善栄

協力分担：双日九州（株）

カメムシ類の発生予察に使用している水銀灯が製造中止となっているため、代替の予察方法として LED 予察灯と水銀灯を比較した。その結果、LED 光源による誘殺ピークはチャバネアオカメムシ、クサギカメムシでは概ね一致しており、将来的には発生予察に利用可能であると考えられたものの、AI による画像識別の正答率は現時点で低いと考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

4. 鳥取県オリジナル品種等の多収安定生産技術の確立

(1) ‘新甘泉’の収穫適期の拡大

ア 袋の種類による検討

担当者：谷脇恵吾・長谷川諒・井戸亮史

協力分担：なし

‘新甘泉’の収穫適期の拡大を目的に袋の種類や袋掛けの有無が収穫期間に及ぼす影響を検討した結果、「網掛×大袋」栽培の収穫開始が最も早く、最も遅い「露地×無袋」と組み合わせることで、収穫期間を約 10 日間から約 20 日間へ拡大が可能と考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

イ エテホン液剤の散布

担当者：大西優・長谷川諒・井戸亮史

協力分担：なし

‘新甘泉’の熟期促進を目的にエテホン液剤を散布した結果、満開後 101 日に散布することで 5～10 日程度の熟期促進効果があることが分かった。一方、変形硬化の発生が目立った。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

ウ サンテ®黒の被覆による熟期促進効果の検討

担当者：大西優・谷脇恵吾・井戸亮史

協力分担：東レコムズ愛媛（株）

‘新甘泉’の熟期促進を目的にサンテ®黒を被覆した結果、熟期促進効果が認められた。一方、食味が悪くなり、日持ちが短くなった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(2) ‘甘太’の収穫期予測

担当者：長谷川諒・大西優・井戸亮史

協力分担：なし

本県における‘甘太’の収穫始めを予測するため、①満開後日数と②開花後の気象から作成した回帰式の 2 通りで予測を行ったが、いずれも実際の収穫始めと 1 週間程度の誤差が生じた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(3) スマートフレッシュを用いた‘新甘泉’の日持ち性向上

担当者：長谷川諒・大西優・井戸亮史

協力分担：アグロフレッシュ・ジャパン（同）

収穫後の‘新甘泉’の日持ち性向上を検討するため、常温条件下においてスマートフレッシュを処理した結果、果色の変化や果肉の軟化が緩やかになり、無処理より 1 週間以上良食味を維持できる可能性が示唆された。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

5. ナシ栽培の革新的な省力化技術の確立

(1) ジョイント栽培の高品質・安定多収栽培技術の確立

ア ‘新甘泉’のジョイント栽培における超早期多収栽培技術の開発

担当者：長谷川諒・大西優・井戸亮史

協力分担：なし

樹体ジョイント仕立て栽培における超早期多収技術を開発するため、大苗の予備新梢を側枝として扱う「早期着果区」と「慣行区」の定植 2 年目における収量および樹体生育を調査した結果、「早期着果区」は「慣行区」よ

り1年早く収穫が可能であり、収量もジョイント栽培マニュアルにある定植3年目の初収穫量より多かった。また、主枝からの新梢発生量に処理区間差は認められなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

イ ‘新甘泉’の腋花芽の利用が収量・果実品質に及ぼす影響（着果2年目）

担当者：大西優・川上和博・井戸亮史

協力分担：なし

早期多収かつ安定生産を目的に、着果2年目のジョイント仕立て‘新甘泉’の側枝をベタ付けにし、短果枝花芽、腋花芽両方に着果させた結果、収量が増加し、約1.5倍の粗収益が得られた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

ウ 夜間のFR光照射による補光が‘おさゴールド’苗木の伸長に及ぼす影響

担当者：長谷川諒・大西優・井戸亮史

協力分担：なし

‘おさゴールド’のジョイント栽培用2年生大苗の育成において、新梢をより長く伸長させるため、夜間にFR光を照射した結果、「無処理区」より大きな苗を育成することができた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

エ 摘心が‘新甘泉’における同一側枝上の芽に及ぼす影響

担当者：長谷川諒・大西優・井戸亮史

協力分担：なし

‘新甘泉’の樹体ジョイント仕立て栽培で行う新梢管理としての摘心が他の芽に及ぼす影響を検討するため、2年生側枝を対象とし、生育期間中に発生した新梢を随時摘心する「摘心区」、新梢伸長停止期に新梢を柵面に誘引する「誘引区」、新梢管理を行わない「無処理区」を比較した結果、側枝上からの新梢発生率および側枝径の肥大率、果実品質に差は認められなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

オ ヒオモン水溶剤による‘新甘泉’の新梢伸長抑制

効果の検討

担当者：川上和博・大西優・井戸亮史

協力分担：アグロカネショウ（株）

新梢伸長抑制による新梢管理の省力化を目的として樹体ジョイント仕立て樹の‘新甘泉’において、満開後50日に側枝上の新梢を摘心し、ヒオモン水溶剤2,000倍液を散布した結果、処理後に伸びた新梢は随時摘心する摘心区よりは長かったものの、24cm程度に収まった。作業時間は摘心区の68%と大幅に少なくなった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

カ ‘おさゴールド’JV仕立てにおける主枝高および側枝仰角の違いが樹体生育に及ぼす影響

担当者：川上和博・井戸亮史

協力分担：なし

早期多収が期待できるV字ジョイント（以下、JVとする）仕立ての最適な主枝高や側枝仰角について検討するため、‘おさゴールド’においてV-60°区、V-45°区、V-30°区、慣行区（水平）を設け、新梢の発生状況及び主枝径を調査した。その結果、処理区による差は認められなかった。一方、幹周は、V-30°区と慣行区において、V-60°区より大きくなる傾向が認められた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

キ ‘おさゴールド’ジョイント仕立て樹における新梢管理方法の違いが果実品質に及ぼす影響

担当者：川上和博・井戸亮史

協力分担：なし

‘おさゴールド’樹体ジョイント仕立て樹の新梢管理方法の違いが果実品質に与える影響を検討するため、誘引又は摘心処理を実施した。その結果、果実品質については差が認められなかったが、誘引区は摘心区に比べて作業時間が49%と省力的に管理できた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

ク 二十世紀系品種の袋かけ省略化に向けた果面保護剤の検討

担当者：井戸亮史・川上和博・大西優

協力分担：JA全農とっとり、JA鳥取中央、シブヤ精

機

大袋かけ省略化の目的で果面保護剤（グリーンナー）の効果を検討した結果、20～50 倍液が適当と考えられた。一方、中袋1回かけと組み合わせた処理では、無散布との差が無く、効果は判然としなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

ケ ジョイントV字トレリスの生産性および作業性の検討

（ア）‘甘太’及び‘王秋’（短果枝花芽の維持が「容易」な品種）の検討

担当者：井戸亮史・川上和博・谷脇恵吾

協力分担：なし

県内で普及している JH と新たに開発された JV の収量性を比較したところ、着果4年目の‘甘太’は、両仕立てにおいて6 t/10aを超えた。果重はJHが大きかった。

一方、着果2年目の‘王秋’は、昨年JVの着果が少なく、収量もJHの1/3程度の600 kg/10a程度だったが、本年は、着果数が大幅に増加し、収量は4.2 t/10aとJHより650 kg/10a多くなった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

（イ）‘新甘泉’（短果枝花芽の維持が「困難」な品種）の検討

担当者：井戸亮史・川上和博・谷脇恵吾

協力分担：なし

JHとJV（仰角45度、60度）の収量性を比較したところ、昨年まではいずれも4～4.5 t/10a程度であったが、本年はJVが6 tを超え、JHよりも1 t/10a程度多くなった。一方、作業時間は踏み台や脚立が必要とする高所作業があるJVの方がやや多くなった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

コ 樹体ジョイント仕立て‘甘太’及び‘王秋’の適正着果量の検討

担当者：井戸亮史・川上和博・谷脇恵吾

協力分担：なし

樹体ジョイント仕立て‘甘太’及び‘王秋’の適正着果量を検討するため、側枝1m当たりの着果量を4果、

6果、8果とした結果、着果4年目の‘甘太’は全ての処理区において目標とする果重550gに達しなかった。

一方、着果2年目の‘王秋’は8果区を除いて目標とする650gに達した。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

サ 樹体ジョイント仕立て‘新甘泉’及び‘甘太’の着果位置の違いが果実品質に及ぼす影響

担当者：井戸亮史・川上和博・谷脇恵吾

協力分担：なし

側枝仰角の違いと着果位置による果実品質の関係を調査するため、JH（仰角0度）とJV（仰角45度、60度）を比較した結果、果重、糖度とも仰角に関係なく先端側から基部側にかけてやや大きく、糖度は高くなるか差が無いことがわかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

シ ジョイント仕立て‘新甘泉’における全量有機質肥料施肥体系の実証（場内）

担当者：谷脇恵吾・遠藤貴裕・井戸亮史

協力分担：なし

全量有機質肥料施肥体系を実証するため、樹体ジョイント仕立て樹を栽培試験した結果、慣行肥料施肥体系と果実品質および樹体生育ともに同程度であった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

ス ジョイント仕立て‘新甘泉’における全量有機質肥料施肥体系の実証（現地園）

担当者：谷脇恵吾・遠藤貴裕・井戸亮史

協力分担：八頭普及所、倉吉普及所、西部普及所

生産振興課

樹体ジョイント仕立て‘新甘泉’における全量有機質肥料施肥体系の実証を目的として、現地園において3年間栽培試験を実施した結果、慣行肥料施肥体系と果実品質および樹体生育ともに同程度であった。本課題は、国の事業である「みどりの食料システム戦略緊急対策交付金」のグリーンな栽培体系への転換サポート事業において実施し、栽培実証マニュアルにまとめた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

セ ‘王秋’ ジョイント仕立て樹の効率的な土壌改良方法の検討

担当者：川上和博・谷脇恵吾・井戸亮史

協力分担：なし

着果2年目の‘王秋’ジョイント仕立て樹において、コルク状果肉障害の発生軽減対策として、樹列に沿った列深耕(株元から50cm離れた位置を、1年に片側ずつ2年間)を行った結果、本年は、処理の有無にかかわらず発生が多発したため、土壌改良効果は認められなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

ソ 除草剤の散布が除草作業の省力化及び‘おさゴールド’の1年生苗木の生育に及ぼす影響

担当者：谷脇恵吾・大西優・井戸亮史

協力分担：なし

苗木への除草剤散布が省力化および苗木の生育に及ぼす影響を明らかにするため、苗木株元への除草剤散布を行った結果、省力的に管理ができ、樹体生育にも影響がみられなかった。一方、想定外の草種の繁茂により、処理時期等の検討は十分に出来なかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

6. 気候変動に負けない高品質果実生産技術の確立

(1) 温暖化の影響評価と対応技術の開発

ア ‘新甘泉’の日焼け果軽減対策

(ア) 新梢誘引による検討

担当者：大西優・川上和博・井戸亮史

協力分担：なし

ジョイント仕立て‘新甘泉’の日焼け果軽減を目的として、側枝上に発生した新梢を果実に直射日光が当たらないように誘引した結果、果面温度の上昇抑制や果実に当たる日射量の抑制効果、日焼け果軽減効果が認められた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) 日焼け防止資材(サンテ、チタン袋、褐色一重袋)の効果検討

担当者：大西優・川上和博・井戸亮史

協力分担：東レコムズ愛媛(株)

‘新甘泉’の日焼け果軽減を目的として、サンテ®、チタン袋及び褐色一重袋の被覆を行った。その結果、全ての被覆資材で‘新甘泉’日焼け果の被害が軽減され、特にチタン袋の軽減効果が高かった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(ウ) 日焼け防止資材(バラカ、みかんまもるテープ)の効果検討

担当者：大西優・亀岡靖崇・井戸亮史

協力分担：アビオン(株)

‘新甘泉’の日焼け果軽減を目的として、日焼け防止剤(商品名：バラカ)の果面散布処理及びみかんまもるテープの果面貼付処理を行った。その結果、いずれの資材も‘新甘泉’の日焼け果軽減効果は認められず、実用性は低いと考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(エ) サンテ®白の使用可能回数の検討(使用3回目)

担当者：遠藤貴裕・大西優・井戸亮史

協力分担：なし

サンテ®白の使用可能回数を検討するため、すでに2回(令和4、5年)使用したサンテ®白と新品のサンテ®白を被覆して比較した結果、3回使用しても新品と同様の日焼け果軽減効果が認められた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

イ 台風等による潮害が翌年の‘新甘泉’の花芽生育に及ぼす影響

担当者：井戸亮史・川上和博・大西優

協力分担：なし

台風等の潮風を想定した海水処理が翌年の‘新甘泉’の花芽生育に及ぼす影響を検討するため、前年(令和5年)処理した花芽を追跡調査した結果、前年(令和5年)の処理後に落葉し、年内中に動いた花芽は、次年(令和6年)度は着果不可となるが、その芽の多くは短果枝になることがわかった。

また、海水処理6時間後に除塩のために散水しても効果は見られず、全て落葉した。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

ウ 中間台品種の違いが‘夏さやか’‘新甘泉’‘王秋’の枝幹病害の発生に及ぼす影響

担当者：川上和博・井戸亮史・山田高之
協力分担：なし

‘夏さやか’‘新甘泉’‘王秋’における中間台品種の違いによる枝幹病害発生への影響及び‘夏さやか’における接ぎ木位置と中間台品種の違いが苗木の伸長に及ぼす影響を検討した。その結果、枝幹病害の発生率に、穂木品種による差は見られなかった。中間台については、‘夏さやか’の発病率が高かった。また、中間台の違い及び接ぎ木位置の違いによる枝幹病害の発生に差は見られなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

エ 元肥および夏肥の有無が果実品質及び樹体に及ぼす影響（18年目）

担当者：谷脇恵吾・遠藤貴裕・井戸亮史
協力分担：なし

元肥、夏肥の施用の有無が‘おさゴールド’の果実品質と樹体生育に及ぼす影響を明らかにすることを目的として、慣行区（窒素量15kg/10a）、夏肥無区、元肥無区、元肥・夏肥無区の4処理区を設定して18年間継続処理を行った結果、本年は例年に比べて小玉傾向であったことから収量は減少したものの、その他の果実品質、樹体生育および収量は全ての処理区で慣行区と同等であった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

オ 化学肥料の2割低減試験

担当者：谷脇恵吾・長谷川諒・井戸亮史
協力分担：生産振興課

化学肥料2割低減施肥体系の実証を目的として、‘ゴールド二十世紀’（37年生）に2種類のJAオリジナル堆肥入り肥料を施用した結果、慣行施肥体系における果実品質および樹体生育と同程度であった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

カ ネパール由来ナシ系統の受粉樹適性調査

（ア）満開日、花芽着生及び花粉量の調査

担当者：大西優・遠藤貴裕・井戸亮史
協力分担：川島實

‘長十郎’より開花が早いネパール由来ナシ系統‘ネパールみのるA’‘ネパールみのるB’の満開日、花芽着生、花粉量について調査を行った。その結果、本県においても両系統とも‘長十郎’と比較して早期に開花し、‘ネパールみのるB’は‘長十郎’よりも多くの花粉が採取できた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

（イ）各温度帯における花粉発芽性の調査

担当者：大西優・遠藤貴裕・井戸亮史
協力分担：川島實

‘長十郎’より開花が早いネパール由来ナシ系統‘ネパールみのるA’‘ネパールみのるB’の各温度帯における花粉発芽性について調査を行った。その結果、‘ネパールみのるB’は‘長十郎’よりも低温環境下における花粉発芽率が高く、‘ネパールみのるA’は‘長十郎’よりも低温環境下における花粉発芽率が低かった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

（ウ）県内主要品種に対する親和性の調査

担当者：大西優・遠藤貴裕・稲本俊彦・亀岡靖崇・井戸亮史
協力分担：川島實

‘長十郎’より開花が早いネパール由来ナシ系統‘ネパールみのるA’‘ネパールみのるB’の県内主要品種に対する親和性について調査を行った。その結果、両系統とも‘ゴールド二十世紀’‘二十世紀’‘新甘泉’‘王秋’に対する親和性は‘長十郎’と同等であった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

（エ）低温環境下における県内主要品種に対する親和性の調査

担当者：大西優・遠藤貴裕・井戸亮史
協力分担：川島實

‘長十郎’より開花が早いネパール由来ナシ系統‘ネパールみのるA’‘ネパールみのるB’の低温環境下における県内主要品種に対する親和性について調査を行った。

その結果、両系統とも低温環境下における‘ゴールド二十世紀’‘新甘泉’‘王秋’に対する親和性は‘長十郎’と同等であった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

（オ）人工受粉した県内主要品種の果実品質の調査

担当者：大西優・遠藤貴裕・稲本俊彦・亀岡靖崇・井戸亮史

協力分担：川島實

‘長十郎’より開花が早いネパール由来ナシ系統‘ネパールみのるA’‘ネパールみのるB’を用いて人工受粉した県内主要品種の果実品質について調査を行った。その結果、‘ゴールド二十世紀’‘新甘泉’にネパールみのるA’‘ネパールみのるB’を人工受粉した果実は、‘長十郎’を人工受粉した果実と同等の品質であった。また、‘王秋’に‘ネパールみのるB’を人工受粉した果実はコルク状果肉障害が少なかった。‘二十世紀’に‘ネパールみのるB’を人工受粉した果実は結実率低下に伴い小玉傾向となった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

（カ）花粉の保管方法が発芽能に及ぼす影響

担当者：大西優・遠藤貴裕・井戸亮史

協力分担：川島實

‘ネパールみのるA’‘ネパールみのるB’‘長十郎’の花粉採取から交配作業までを想定して花粉を保管し、日数の経過が発芽能に及ぼす影響について調査を行った。その結果、3系統・品種とも、常温保管、低温保管に関わらず低温条件下で保管することで、花粉採取から交配作業まで花粉発芽能が維持された。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

キ ‘輝太郎’ に対する凍霜害軽減資材（フロストバスター）の効果確認

担当者：稲本俊彦・亀岡靖崇・井戸亮史

協力分担：日本農薬（株）

凍霜害軽減を目的に‘輝太郎’に対してフロストバスター処理を行った結果、霜害率および着らい数は試験区間で差が認められず、散布回数および経済的観点から、

凍霜害軽減資材としての実用性は低いと判断した。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

ク ‘輝太郎’ および ‘西条’ の日焼け果軽減対策の検討

担当者：亀岡靖崇・稲本俊彦・大西優・井戸亮史

協力分担：アビオン（株）

‘輝太郎’および‘西条’の日焼け軽減を目的に日焼け防止剤（商品名：バラカ）を散布した結果、両品種とも日焼け軽減効果は認められなかった。また、果皮およびヘタには薬斑が残り、拭き取ることが困難だったため、実用性は低いと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

ケ 鳥取県におけるカンキツ類栽培試験

担当者：谷脇恵吾・大西優・井戸亮史

協力分担：なし

本県におけるウンシュウミカンの栽培適性を検討するため極早生および早生温州の栽培試験をした結果、本年は収穫期に雨が多く、多くの品種が国内主産地の出荷基準（糖度）を満たさなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

（2）果樹の生態調査

ア 開花期及び果実品質調査

担当者：遠藤貴裕・長谷川諒・井戸亮史

協力分担：なし

気候変動が果樹の生育に及ぼす影響を明らかにする目的で、ナシ（‘新甘泉’、‘秋甘泉’、‘ゴールド二十世紀’、‘なつひめ’、‘王秋’）、リンゴ（‘ふじ’）、ナシ受粉樹（‘長十郎’、‘山梨’）の開花期及び果実品質を調査した結果、本年のナシ、ナシ受粉樹の満開日は平年（平成26～令和5）よりも1～4日遅かった。また、ナシの果重は‘新甘泉’、‘王秋’を除いて平年以上であり、糖度も‘王秋’を除いて平年以上であった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

イ ‘長十郎’ の花芽着生量に関する調査

担当者：遠藤貴裕・長谷川諒・井戸亮史

協力分担：なし

ナシ花粉用品種‘長十郎’の花芽着生と気象要因との関係を明らかにする目的で花芽着生率、新梢長を調査した結果、7月下旬の平均気温は平年よりも高く、7月上旬の日照時間は平年並であったが、花芽着生率及び新梢長は平年をやや下回った。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

ウ ナシの新梢発育に関する調査

担当者：遠藤貴裕・長谷川諒・井戸亮史

協力分担：なし

本県における主要ナシ品種の生育状況を把握するため‘ゴールド二十世紀’、‘新甘泉’、‘王秋’、‘なつひめ’の新梢発育を調査した結果、新梢停止期は‘王秋’を除いて平年よりも早かった（‘王秋’は平年値がないため不明）。新梢長は‘ゴールド二十世紀’が平年より長く、‘新甘泉’は平年並であった（‘王秋’は平年値がないため不明、‘なつひめ’は調査樹伐採のためデータなし）。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

エ ナシの花芽生育の調査

担当者：遠藤貴裕・長谷川諒・井戸亮史

協力分担：なし

近年の地球温暖化を始めとする気候変動が、ナシの花芽生育に与える影響を把握するため、主要品種の発芽から開花までの生育状況を調査した。その結果、‘ゴールド二十世紀’、‘新甘泉’、‘幸水’の短果枝花芽の生育は、花芽の先端が割れた時期（ステージ 4.5）がほぼ同じであり、その後は‘ゴールド二十世紀’の生育が他の品種よりも早まったが、‘王秋’の生育は遅かった。全品種とも昨年（令和5年）よりも遅く、一昨年（令和4年）と比較すると、‘王秋’は遅く、‘ゴールド二十世紀’、‘新甘泉’、‘幸水’は同等からやや遅かった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

オ 作況調査

担当者：遠藤貴裕・谷脇恵吾・井戸亮史・石河利彦

協力分担：JA 全農とっとり、生産振興課

主要果樹（ナシ、カキ、ブドウ）の作柄を把握する目的で、10日ごとに果実の肥大調査、収穫時に果実品質の

調査を行った。

ナシの満開日は‘ゴールド二十世紀’、‘新甘泉’が2日、‘王秋’、‘なつひめ’が3日、‘秋甘泉’が1日平年よりも遅かった。果実肥大は‘ゴールド二十世紀’、‘なつひめ’、‘秋甘泉’で概ね平年並から平年以上であったが、‘新甘泉’は平年を下回って推移する期間が長く、‘王秋’は生育不良により7月上旬まで平年を下回った。果重は‘ゴールド二十世紀’、‘なつひめ’、‘秋甘泉’で平年以上であったが、‘新甘泉’、‘王秋’は平年を下回った。

カキの開花最盛期は平年より1～2日早かった。‘富有’の果実肥大は平年並から平年以下で推移し、平年よりも小玉となった。‘西条’の果実肥大は9月中下旬の猛暑による肥大の落ち込みが大きかったものの、初期肥大が良好であったことから平年よりもやや大玉となった。‘輝太郎’の果実肥大は9月上旬までは平年並に推移し、9月中旬に落ち込んだがそれ以降は平年を上回ったことから平年よりも大玉となった。

ブドウは‘巨峰’、‘ピオーネ’とも平年より萌芽が10日程度早まり、開花期も10日程度早まった。着色始めは平年より14日程度早まり、着色は良好であった。甘味比（糖酸比）は高く、粒重は小さかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

カ カキ品種特性調査

担当者：遠藤貴裕、稲本俊彦、井戸亮史

協力分担：なし

気象の年次変動が果樹の生育に及ぼす影響を評価する基礎データを収集する目的で、カキ主要品種の生育特性及び果実特性を調査した。平均気温は4月が平年並～約2℃高く5月は平年並であったが、6月～11月までは概ね平年以上で推移した。降水量は8月～9月（8月下旬を除く）で平年よりも大幅に少なかった。‘富有’、‘早生西条’、‘輝太郎’の開花盛は平年（平成30～令和5年）よりも1～2日早かった。果重は‘富有’で平年（平成28～令和5年）よりも小さく、‘早生西条’、‘輝太郎’は平年を上回り、糖度はいずれの品種も平年並であった。果色は‘富有’で平年よりも低く、西条は平年並であっ

た。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

キ カキ園土壌のアレロパシー活性の実態把握

担当者：稲本俊彦・亀岡靖崇・井戸亮史

協力分担：なし

カキ園での連作障害の基礎的知見を得ることを目的にアレロパシー活性を調査した結果、検定植物であるレタスの根長伸長は阻害され、カキ園土壌におけるアレロパシー物質の存在が示唆された。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

7. 「輝太郎」を核としたカキ産地力強化に向けた栽培技術の確立

(1) 「輝太郎」早期成園化・早期収量確保技術の確立

ア ジョイントV字トリスによる「輝太郎」の早期成園化・省力化試験

担当者：川上和博・稲本俊彦・井戸亮史

協力分担：なし

「輝太郎」の早期成園化、省力化を目的として、ジョイントV字トリス（以下、JV）仕立て樹の樹体生育を調査した。その結果、定植2年目の「輝太郎」JV仕立ては、慣行仕立て（2本主枝）と比較して新梢数は少なかった。また、新梢管理にかかる時間は、JV仕立ての方が慣行仕立てより多かったことから、作業軽減効果は認められなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

イ 「輝太郎」JV仕立てにおける側枝更新用の新梢発生促進技術の検討

担当者：川上和博・稲本俊彦・井戸亮史

協力分担：なし

「輝太郎」JV仕立て樹における更新枝確保を目的として、側枝を更新する際に、ホゾを残さない際切り区、ホゾを1cm残す1cm区、側枝基部へノコ目処理するノコ目区、主枝上への芽傷処理する芽傷区を設定した。その結果、残すホゾの長さに関わらず53～73%で新梢の発生が認められた。一方、ノコ目区と芽傷区は、新梢発生を促進する効果がなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

ウ ポット育苗2年苗利用による「輝太郎」の早期樹冠拡大試験

担当者：川上和博・井戸亮史

協力分担：なし

「輝太郎」の早期樹冠拡大を目的として、1年間ポット育苗した2年生大苗と、前年には場へ直接定植した1年生苗木の生育を比較した結果、1年生苗木をほ場に直接植えた方が、定植2年目（ポット区は1年目）の樹体生育は良好であった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

エ 土壌保水材処理が「輝太郎」苗木の生育に与える影響

担当者：川上和博・稲本俊彦・井戸亮史

協力分担：なし

土壌水分が不足しても良好な樹体生育を維持する目的で「輝太郎」の1年生苗木定植時に、土壌保水材（サンフレッシュGT-1（主成分：高吸水性樹脂））を植え付け穴の容量に対して0.5%量混和した。その結果、保水剤区は土壌水分量の急激な変化を緩衝する効果が認められたが、樹体生育に与える効果は、判然としなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

オ 接ぎ木テープの食い込みが「輝太郎」の生育に及ぼす影響

担当者：長谷川諒・稲本俊彦・井戸亮史

協力分担：なし

苗木育成の際、接木部の固定に使用されるポリエチレンフィルムが樹体内に食い込み、除去できなくなった場合の樹体への影響を調査した結果、2年生時においては食い込みによる負の影響は認められなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(2) 「輝太郎」果実品質向上のための技術開発

ア アブシシン酸液剤による「輝太郎」の熟期促進の検討

(ア) 着色前散布

担当者：亀岡靖崇・稲本俊彦・井戸亮史

協力分担：なし

‘輝太郎’の着色促進向上を目的にアブシシン酸液剤（商品名：アブサップ液剤）を着色前に果実へ散布した結果、果頂部およびへた部の着色促進効果は見られなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

（イ）着色後散布

担当者：亀岡靖崇・稲本俊彦・井戸亮史

協力分担：なし

‘輝太郎’の着色促進向上を目的にアブシシン酸液剤（商品名：アブサップ液剤）を着色後に果実へ散布した結果、果頂部およびへた部の着色促進効果は見られなかったが、散布後に樹上で過熟果が散見された。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

イ 樹上散水による‘輝太郎’の熟期促進の検討

担当者：稲本俊彦・長谷川諒・井戸亮史

協力分担：なし

‘輝太郎’の熟期促進を目的に8月1日から10月21日まで、日中、繰り返し樹上散水を行った結果、気温および果実表面温度が低下し、収穫期が9日程度前進化した。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

ウ 果実袋による‘輝太郎’の外観品質向上の検討

担当者：亀岡靖崇・稲本俊彦・井戸亮史

協力分担：JA 全農とっとり

‘輝太郎’の外観品質向上を目的に、8月中旬および下旬にカキ用果実袋を被覆した結果、汚損果、日焼け果、裂皮果が減少し、‘輝太郎’の外観品質向上に有効であると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

（3）既存品種の生産安定

ア ‘花御所’のへたすき果軽減対策試験（現地ほ場）

（ア）着果管理の早晚が‘花御所’の果実品質に及ぼす影響

担当者：稲本俊彦・亀岡靖崇・井戸亮史

協力分担：郡家柿生産部、JA 鳥取いなば、八頭普及所

‘花御所’のへたすき果の低減を目的に、摘らいおよ

び摘果による着果管理の早晚がへたすき果の発生に及ぼす影響について調査を行った結果、着果管理の早晚によるへたすき軽減効果は認められなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

8. 新技術を活用した他産地に打ち勝つブドウ栽培技術の確立

（1）‘シャインマスカット’に続く有望品種の検討

ア ‘マスカーティーン’等の特性確認（3年生以上）

担当者：森本隆義・石河利彦

協力分担：なし

定植後5年以上の新品種‘マスカーティーン’等について、本県の砂丘畑での適応性を検討するために果房の品質調査を行った。その結果、‘マスカーティーン’の果皮色は緑色で、房重462g、無核率は100%だった。盆前の8月5日の調査で糖度18.4度と高く、粒重は14.5gと大きく、本県において有望な品種と考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

イ ‘富士の輝’等の特性確認（3年生以下）

担当者：森本隆義・石河利彦

協力分担：なし

定植後3年以下の新品種‘富士の輝’等について、本県の砂丘畑での適応性を検討するために果房の品質調査を行った。その結果、‘富士の輝’の果皮色は赤紫色～黒色で、房重354gだった。8月10日の調査で糖度24.5度と高く、粒重は16.1gと大きかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

（2）基幹品種の高品質化

ア ‘ピオーネ’の反射マルチによる着色向上

担当者：石河利彦・森本隆義

協力分担：鳥取普及所、倉吉普及所

‘ピオーネ’の着色向上を目的に、白色反射マルチを設置したところ、砂丘地農業研究センターの試験では着色促進効果は確認されなかったが、現地調査では国府町で生育促進効果が示唆され、湯梨浜町でもやや着色促進の効果が確認された。過去3年のセンターにおける試験

では効果が認められていることを勘案すると、白色反射マルチの敷設による果実品質向上効果の発現程度は園地間、年次間差があり、マルチ処理単独で安定した効果は得られにくいのではないかと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

イ ‘ピオーネ’ のアブサップによる着色向上

担当者：石河利彦・森本隆義

協力分担：住友化学（株）

‘ピオーネ’の着色促進を目的に「アブサップ」処理を行ったところ、無処理区よりも着色がやや促進されたが、効果は少なかった。これは、着色期まで大房で管理していたためと推察され、適度な房作り（500gまで）を行うことで効果が上がると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

ウ ‘シャインマスカット’ のMA包装による鮮度保持試験

担当者：森本隆義・石河利彦

協力分担：なし

本県の‘シャインマスカット’の出荷ピークである9月頃に全国的に単価が低下しており、単価が高い12月以降の出荷を目指した冷蔵保存技術開発を目的に、MA包装技術を活用して、‘シャインマスカット’の長期保存法について調査を行った。その結果、従来のフレッシュホルダーを用いた冷蔵保存技術では12月（3か月間）までが冷蔵保存の限界であったが、MA包装資材を利用した場合、2月（5か月間）より長く鮮度を保持した状態で冷蔵保存が可能であった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

エ ブドウハウス栽培の前進化（予備試験）

担当者：森本隆義・石河利彦

協力分担：なし

本県の‘シャインマスカット’の出荷ピークである9月頃に全国的に単価が低下しており、単価が高い8月の出荷を目指したハウス栽培の前進化を目的に、連棟ハウスの被覆日を例年より20日早めた結果、収穫日が15日以上早まった。また、被覆日を早めることで果実品質も

向上した。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

9. 市場競争力のある鳥取オンリーワン園芸新品種の育成

(1) 極早生および高品質ナシの育成

ア 交雑種作出

担当者：長谷川諒・川上和博・井戸亮史

協力分担：なし

‘夏さやか’に代わる極早生黒星病抵抗性・自家和合性等の性質を持つナシの育成を行うことを目的に交雑を行った結果、黒星病抵抗性を有する極早生品種を狙った組み合わせで807個、極早生青ナシを狙った組み合わせで452個の種子を獲得した。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

イ 定植前選抜

担当者：長谷川諒・川上和博・井戸亮史

協力分担：なし

令和5年に黒星病抵抗性品種作出のため交雑し、獲得した苗を対象に遺伝子診断を行った結果、109個体を黒星病抵抗性個体として選抜しその内53個体をほ場に定植した。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

ウ 未選抜系統の果実調査

担当者：長谷川諒・川上和博・井戸亮史

協力分担：なし

極早生および高品質ナシを育成するため、未選抜系統の果実品質調査を行った結果、67の未選抜系統から5系統を選抜候補とした。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

エ 選抜候補系統の果実特性調査

担当者：長谷川諒・川上和博・井戸亮史

協力分担：なし

極早生および高品質ナシを育成するため、選抜候補38系統の果実調査を行った結果、25系統を淘汰し、10系統を継続調査、3系統を選抜系統とした。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(2) ナシ新品種、新系統の評価試験

ア 場内試験

担当者：長谷川諒・川上和博・井戸亮史

協力分担：なし

県内外で育成されたナシ新品種、新系統の本県における適応性を検討する目的で5品種4系統の生育特性および果実品質調査を行った結果、いずれも生理障害等は認められなかったが、本県育成の2系統は品種化に不適であると判断し淘汰した。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

イ 現地栽培試験

担当者：長谷川諒・川上和博・井戸亮史

協力分担：なし

選抜・育成を行った‘鳥園K’‘鳥園L’の現地試験園における果実品質調査および試験関係者による検討を行った結果、‘鳥園K’は淘汰とし、‘鳥園L’を品種登録に向かうこととした。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

ウ ‘鳥園L’の黒星病感受性検定

担当者名：長谷川諒・川上和博・井戸亮史・山田高之

協力分担：なし

‘鳥園L’の黒星病への感受性を検討するため、幼葉と満開約80日後の果実に黒星病孢子懸濁液を接種した結果、葉は‘新甘泉’‘幸水’より感受性が低く、果実は‘新甘泉’‘ゴールド二十世紀’より感受性が低かった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

エ ‘ゆつみ’の機械化樹形への適応性評価

担当者：長谷川諒・井戸亮史

協力分担：農研機構、神奈川県、埼玉県、新潟県

「食料安全保障強化に向けた革新的新品種開発プロジェクト」の中で、‘ゆつみ’の機械化樹形への適応性を評価するため、擬似的に作成したV字樹形と慣行の平棚樹形の比較を行った。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

オ 短果枝着生性の育種選抜に利用可能なDNAマーカー

一の開発

担当者：長谷川諒・井戸亮史

協力分担：農研機構、新潟県、高知県、かずさDNA研究所

「食料安全保障強化に向けた革新的新品種開発プロジェクト」の中で、短果枝着生性に関するDNAマーカー開発を行うため、本県育成品種および系統の短果枝着生性を評価した。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

カ スマートフレッシュを用いた‘鳥園L’の日持ち性向上

担当者：長谷川諒・大西優・井戸亮史

協力分担：アグロフレッシュ・ジャパン（同）

‘鳥園L’の貯蔵性向上を目的とし、収穫後の‘鳥園L’にスマートフレッシュを処理した結果、日持ち性を向上させることができた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(3) 早生および輸出に適したカキ新品種の育成

ア 交雑種作出

担当者：稲本俊彦・長谷川諒・井戸亮史

協力分担：なし

‘輝太郎’より早く収穫できる早生品種、超高糖度品種および輸出に適した晩生品種の作出を目的に交雑を行った結果、早生を狙った組み合わせで317個、超高糖度を狙った組み合わせで201個、晩生を狙った組み合わせで470個の種子を獲得した。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(4) 交雑育種によるカキ新品種の育成

ア 未選抜系統の果実調査

担当者：稲本俊彦・長谷川諒・井戸亮史

協力分担：なし

河原試験地にて交雑した系統から、‘輝太郎’に次ぐオンリーワン完全甘ガキ品種を育成することを目的に、未選抜系統の果実調査を行った結果、1系統を注目系統、7系統を保留、3系統を淘汰とした。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

《野菜・花き・特産関係》

10. 病害虫発生予察調査事業

(1) 野菜主要病害虫の発生予察調査

担当者：川田久美子・坂井侑香里・鈴木祐・竹中春人・
米村善栄

協力分担：病害虫防除所

スイカ、ネギ、イチゴ、ブロッコリー、ラッキョウ、
ナガイモ等7品目の野菜について病害虫の発生状況を調
査し、発生予察情報を提供した。これらの主な内容は病
害虫防除所ホームページに公開した。

(<http://www.jpnpn.ne.jp/tottori/>)。

〈本試験成績掲載印刷物：19〉

(2) 病害虫発生状況と防除対策の情報提供

担当者：川田久美子・坂井侑香里・鈴木祐・竹中春人・
米村善栄

協力分担：病害虫防除所

スイカ、ネギ、イチゴ、ブロッコリー、ラッキョウ、
ナガイモ等の病害虫の発生状況と防除対策についての病
害虫発生予報を4月から翌年3月まで合計12回、病害
虫防除所を通じて発表した。

〈本試験成績掲載印刷物：19〉

(3) 病害虫の診断依頼

担当者：川田久美子・坂井侑香里・鈴木祐・竹中春人・
米村善栄

協力分担：病害虫防除所

本県特産野菜及び花きについて普及所、JA、生産者か
ら持ち込みのあった病害虫について診断を行い、防除対
策を指導した。

スイカ、メロン、ネギ、ナガイモ、イチゴ、ラッキョ
ウ、トマト、ブロッコリー、キャベツなどの野菜類の病
害虫診断依頼が1月～12月において100件以上あった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

11. 新農薬適用試験

(1) 野菜主要病害虫に対する新農薬の実用化試験

担当者：川田久美子・坂井侑香里・鈴木祐・竹中春人・
岡崎悠希・柳凜太郎

協力分担：なし

殺菌剤では、スイカうどんこ病、ネギ萎凋病およびブ
ロッコリー黒すす病などの防除薬剤、15種類について実
用性を評価した。

殺虫剤では、ネギのネギハモグリバエ、やまのいもの
コガネムシ類幼虫およびやまのいものハダニ類などの防
除薬剤、6種類について実用性を評価した。

〈本試験成績掲載印刷物：13、14〉

12. 園芸産地の今と未来を見据えた病害虫防除対策

(1) ブロッコリーの病害虫防除対策

ア ブロッコリーの病害虫対策

(ア) ブロッコリー黒すす病に対する薬剤の防除効果 (初夏)

担当者：竹中春人・川田久美子・坂井侑香里・米村善
栄

協力分担：なし

ブロッコリー初夏どり栽培において、ブロッコリー黒
すす病に対する他系統薬剤（登録なし）の防除効果を確認
する目的で、殺菌剤4剤の本病に対する防除効果を検
討した。その結果、薬剤A、薬剤Bの防除効果は高く、
イミノクタジンアルベシル酸塩水和剤は防除効果はある
ものの、対照薬剤であるアゾキシストロビン水和剤と比
べその効果はやや低かった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) ブロッコリー黒すす病に対する耐病性の品種間 差 (2023年秋冬)

担当者：竹中春人・川田久美子・坂井侑香里・米村善
栄

協力分担：なし

10月どり作型に適したブロッコリー品種において、ブ
ロッコリー黒すす病に対する品種間差を確認する目的で、
4品種検討した。その結果、対照品種‘SK9-099’と比較

して、‘アーリーキャノン’ および ‘令麟’ は本病の発病が少なかった。また、両品種ともに ‘SK9-09’ と比較して葉と主茎の角度が鈍角で、花蕾高が高く、草丈と花蕾の差が少なかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(ウ) ブロッコリー黒すす病に対する薬剤の防除

効果 (秋冬)

担当者：竹中春人・川田久美子・坂井侑香里・米村善栄

協力分担：なし

ブロッコリー秋冬どり栽培において、ブロッコリー黒すす病に対する薬剤の防除効果を確認する目的で、令和5年登録拡大した薬剤の防除効果と定植前処理剤（未登録）の防除効果を検討した結果、マンデストロビン水和剤は高い防除効果が認められた。定植時にトレイ灌注処理を行ったピラジフルミド水和剤は 42 日後まで発病は認められなかったが、無処理区と比較して効果は判然としなかった。現状の罹病苗の設置密度では接種圧が高く、葉の防除効果の評価は可能であるが、花蕾の評価は難しいため、花蕾の防除効果が評価できる罹病苗の設置方法の検討が必要である。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(エ) ブロッコリー黒すす病に対する散布量および散布間隔による防除効果 (秋冬)

担当者：竹中春人・川田久美子・坂井侑香里・米村善栄

協力分担：なし

ブロッコリー秋冬どり栽培において、ブロッコリー黒すす病に対するブームスプレーヤーを用いた散布液量で十分な防除効果が得られているか確認する目的で、アゾキシストロビン水和剤の散布量と散布間隔の違いによる効果を検討した結果、ブームスプレーヤーによる散布を想定した少量散布 (100ℓ/10a) は慣行量散布 (250ℓ/10a) より防除効果が劣ることが認められた。また、ブームスプレーヤーによる散布を行う場合、2週間間隔よりも1週間間隔と間隔を短くすることが望ましいと考えられ

た。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(オ) 越年どり作型のブロッコリーべと病に対する品種間差の確認 (2022 年、2023 年)

担当者：川田久美子・坂井侑香里・竹中春人・米村善栄

協力分担：なし

ブロッコリーべと病（特に花蕾べと病）に対する品種間差を確認する目的で、越年どり作型で3月収穫品種6品種、4月収穫品種2品種を検討したところ、2か年とも花蕾の発病は3月収穫品種では‘ともえ’が、4月収穫品種では‘晩緑 99W’がそれぞれ慣行品種よりも少なかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(カ) 越年どり作型のブロッコリーべと病に対する防除体系の検討 (2022 年、2023 年)

担当者：川田久美子・坂井侑香里・竹中春人・米村善栄

協力分担：なし

ブロッコリーべと病（特に花蕾べと病）に対する体系防除の効果を確認する目的で、越年どり作型でメタラキシルM・TPN 水和剤の散布時期およびマンジプロパミド水和剤の2月散布の防除効果を検討した結果、2か年ともメタラキシルM・TPN 水和剤12月防除+マンジプロパミド水和剤2月防除区、メタラキシルM・TPN 水和剤2月下旬防除のみ区の防除効果が認められた。メタラキシルM・TPN 水和剤の散布時期は11月より12月で花蕾への防除効果が高い傾向が認められた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(キ) ブロッコリーのシロイチモジヨトウに対する新規薬剤の防除効果 (新農業実用化試験)

担当者：鈴木祐・米村善栄

協力分担：なし

ブロッコリー秋冬どり栽培において、シロイチモジヨトウに対する薬剤の防除効果を確認する目的で、新規薬剤A、ジクロロメゾチアズ水和剤およびスピネトラム水

和剤の防除効果を検討した結果、新規薬剤A、スピネトラム水和剤の防除効果は高く、ジクロロメゾチアズ水和剤は防除効果はあるものの、スピネトラム水和剤と比べその効果はやや低かった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

イ ドローンを活用した防除方法の検討

(ア) ドローンを活用したブロッコリーの防除方法の検討 (初夏：コナガ)

担当者：鈴木祐・米村善栄

協力分担：鳥取農援 (株)、花王 (株)

ブロッコリー初夏どり栽培において、コナガに対するエマメクチン安息香酸塩・ルフェヌロン水和剤のドローンによる高濃度少量散布の各生育ステージにおける防除効果およびドローン専用展着剤の加用による影響を確認することを目的に、その防除効果と薬害について検討した。その結果、エマメクチン安息香酸塩・ルフェヌロン水和剤のドローン散布は生育期間を通じ、下位葉まで薬液を付着させることが可能であり、コナガ幼虫極少発生条件下において防除効果が見られた。また、ドローン専用展着剤の加用による影響は判然としなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(イ) ドローンを活用したブロッコリーの防除体系の検討 (秋冬：黒すす病)

担当者：鈴木祐・米村善栄

協力分担：鳥取農援 (株)

ブロッコリー秋冬どり栽培において、ドローンによる高濃度少量散布の体系防除の効果について確認することを目的に、その防除効果について検討した。その結果、本試験条件下においてドローン散布による体系防除は、ハスモンヨトウなどのチョウ目および黒すす病に対して慣行の防除体系と同等程度の防除効果が見られ、花蕾の収穫率も同等程度であったことからドローンによる防除のみでのブロッコリー栽培は可能であると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

ウ スマート農業技術を活用した発生予察調査方法の検討

(ア) IoT カメラを利用した予察調査の検証 (ハスモンヨトウ)

担当者：鈴木祐・米村善栄

協力分担：なし

IoT カメラを用いて発生予察調査の省力化や迅速化を行うことを目的に、ブロッコリーの主要害虫であるハスモンヨトウを対象として、IoT カメラを用いた発生予察調査の実用性について検討した。その結果、IoT カメラによる撮影画像からの読み取り数と実測値との差は小さく読取調査は可能であり、遠隔地における初飛来時期の調査等に利用できる可能性があった。一方で、定期的な粘着トラップの交換が必要であることなど、現行の発生予察調査から変更する利点は少ないと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(2) ラッキョウの病害虫防除対策

ア ラッキョウの病害虫対策

(ア) ネダニ類に対する物理的防除方法の殺虫効果の検討 (予備試験)

担当者：鈴木祐・米村善栄

協力分担：なし

ラッキョウ種球に寄生するネダニ類に対する物理的防除の殺虫効果を確認することを目的に、45°C30分の温湯浸漬処理と35、40、45°C2時間熱処理によるネダニ類の殺虫効果を検討した。その結果、温湯浸漬処理は高い殺虫効果が見られた。一方で熱処理による殺虫効果は認められなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

イ ドローンを活用した防除方法の検討

(ア) ドローンを活用したラッキョウの防除方法の検討 (ラッキョウさび病)

担当者：鈴木祐・米村善栄

協力分担：シンジェンタジャパン (株)、鳥取農援 (株)、花王 (株)

ラッキョウ栽培において、ラッキョウさび病に対する薬剤Aのドローンによる高濃度少量散布の効果および薬

害を確認することを目的に、その防除効果と薬害について検討した。その結果、本病の発病が認められず効果は判然としなかった。また、薬害は確認されなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(3) ナス科植物の病害虫防除対策

ア ミニトマト病害虫防除体系の確立

(ア) ミニトマトにおける常温煙霧法の防除効果（ミカンキイロアザミウマ）

担当者：鈴木祐・米村善栄

協力分担：日本曹達（株）

ハウス栽培において、薬剤A（ブドウにおいて常温煙霧法の登録あり）の常温煙霧法によるミカンキイロアザミウマの防除効果を検討した結果、薬害は認められず、慣行散布と比較した防除効果は相当投下薬量が異なっていたため判然としなかったが、無処理区と比べ、防除効果が認められたことから、実用性はあると考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(4) ナガイモ腐敗症状への対策

ア ナガイモの病害虫対策

(ア) ダゾメット粒剤冬季無被覆処理および定植時粒剤処理による褐変症発生への影響（2年目）

担当者：竹中春人・川田久美子・坂井侑香里・米村善栄

協力分担：東伯普及所、JA鳥取中央

土壌消毒による褐変症および黒陥没症対策のコスト削減を目的に、ダゾメット剤の冬期処理（無被覆）および定植前アゾキシストロビン・メタラキシルM粒剤の本症状発生軽減効果を確認した結果、ダゾメット剤の冬期処理（無被覆）は、処理16日後までMITCガスが検出されたが、処理3日～10日後にかけて地温が低温にさらされたため、ガス化が不十分であり、本症状に対する軽減効果も認められなかった。また、D-Dは無被覆では効果が十分でないことが確認された。ダゾメット剤単用処理より定植前アゾキシストロビン・メタラキシルM粒剤との併用で軽減効果が認められた。また、定植前アゾキシストロビン・メタラキシルM粒剤の処理量は18kgよりも

36kg処理することで本病に対する軽減効果が認められた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) 処理時期の異なるダゾメット剤無被覆処理による芋品質への影響（1年目）

担当者：竹中春人・川田久美子・坂井侑香里・米村善栄

協力分担：東伯普及所、JA鳥取中央

土壌消毒による褐変症および黒陥没症対策のコスト削減を目的に、処理時期の異なるダゾメット剤無被覆処理による本症状発生軽減効果を確認した結果、ダゾメット剤無被覆処理は3月処理ではガス化が十分に行われ、適切に処理が可能であったが、1月処理ではガス化が不十分であった。また、ダゾメット剤無被覆処理は1月処理および3月処理ともに褐変症および黒陥没症に対して軽減効果が認められなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(5) ネギ病害虫防除対策

ア ネギの病害虫対策

(ア) ネギ萎凋病に対する定植前処理による防除効果（育苗方式の違い、新農薬実用化試験を含む）

担当者：竹中春人・川田久美子・坂井侑香里・米村善栄

協力分担：なし

ネギ萎凋病に対して防除効果が高いものの生育抑制が確認されたマンデストロビン水和剤のトレイ灌注処理の育苗様式の違いによる防除効果および生育への影響を確認する目的で、県中部ネギほ場より採取した本病を用いた汚染ほ場にて検討した結果、チェーンポット苗、200穴セルトレイ苗では定植63日後まで、448穴セルトレイ苗では定植91日後まで生育抑制が認められた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) ネギ萎凋病に対する品種間差の検討（予備試験）

担当者：竹中春人・川田久美子・坂井侑香里・米村善

栄

協力分担：なし

ネギ萎凋病に対する品種間差を確認する目的で、秋冬どり品種5品種について汚染ほ場にて検討した結果、対照品種‘吉蔵’と比較して、供試品種4品種はいずれも本病の発病が少なかった。特に収穫期まで残存株の多かった品種は‘夏柱’であった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(ウ) ネギ萎凋病に対するペノミル剤およびチオファネートメチル剤の薬剤感受性検定

担当者：川田久美子・坂井侑香里・竹中春人・米村善栄

協力分担：なし

ネギ萎凋病のペノミル剤およびチオファネートメチル剤に対する薬剤感受性を確認する目的で、令和6年に現地より採取した6菌株について薬剤感受性検定を行った結果、今回の供試菌株において両薬剤に対する耐性菌は認められなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

イ ネギ“葉トロケ症”の原因究明と対策検討

(ア) “葉トロケ症”より分離した原因菌の同定

担当者：川田久美子・坂井侑香里・竹中春人・米村善栄

協力分担：鳥取大学

ネギ葉トロケ症状の原因究明および対策の効果確認手法の確立を目的に、令和6年に採取した菌種の同定およびネギへの刺針接種を行った結果、軟化腐敗症状を呈する37サンプル中17サンプルで *Dickeya fangzhongdai* が検出された、ネギへの病原性が認められた菌株のうち、本病原菌の分離割合は67%であった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(イ) *Dickeya fangzhongdai* の発症温度調査

担当者：川田久美子・坂井侑香里・竹中春人・米村善栄

協力分担：鳥取大学

Dickeya fangzhongdai の軟化腐敗症状が発症する温度

を確認する目的で、本病原菌をネギに刺針接種後5℃～50℃で3日間保存し軟化腐敗症状を調査した結果、25℃～35℃では接種1日後でネギの黄化および軟化が認められた。10℃以下および45℃以上では接種3日後でもネギの軟化腐敗は確認されなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(ウ) *Dickeya fangzhongdai* に対する薬剤感受性調定

担当者：川田久美子・坂井侑香里・竹中春人・米村善栄

協力分担：鳥取大学

Dickeya fangzhongdai に対する対策の効果確認を行う目的で、現場で使用されている軟腐病に登録のある殺菌剤10剤の本病原菌に対する薬剤感受性を調査した結果、オキシロニック酸水和剤が本病原菌の繁殖を抑制する可能性があると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(エ) *Dickeya fangzhongdai* に対する薬剤感受性検定 (2種混用)

担当者：川田久美子・坂井侑香里・竹中春人・米村善栄

協力分担：鳥取大学

Dickeya fangzhongdai に対する対策の効果確認を行う目的で、オキシロニック酸水和剤と現場で使用されている殺虫剤7剤、殺菌剤3剤と2種混用した際の本病原菌に対する薬剤感受性を調査した結果、いずれも本病原菌の繁殖を抑制する可能性があると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(オ) *Dickeya fangzhongdai* に対するオキシロニック酸水和剤の効果確認 (接種試験)

担当者：川田久美子・坂井侑香里・竹中春人・米村善栄

協力分担：鳥取大学

Dickeya fangzhongdai に対するオキシロニック酸水和剤の防除効果を確認をする目的で、オキシロニック酸水和剤にネギを浸漬処理した後に本病原菌を接種し30℃

で3日間保存して軟化腐敗症状を調査した結果、オキシリニック酸水和剤浸漬は接種1日後まで発症を軽減したものの、発症後の伸展は無処理と同程度であった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

ウ ドローンを活用した防除方法の検討

(ア) ドローンを活用したネギの防除方法の検討 (春ネギ：ネギさび病)

担当者：鈴木祐・米村善栄

協力分担：鳥取農援(株)、花王(株)

白ネギ栽培において、ネギさび病に対するアゾキストロビン水和剤のドローンによる高濃度少量散布の効果およびドローン専用展着剤の加用による影響を確認することを目的に、その防除効果と薬害について検討した。その結果、極少発生条件下での試験となったため、その防除効果は判然としなかった。また、薬害は確認されなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) ドローンを活用したネギの防除方法の検討 (ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ) (新農薬実用化試験)

担当者：鈴木祐・米村善栄

協力分担：日産化学(株)、鳥取農援(株)、花王(株)

白ネギ栽培において、ネギアザミウマ、ネギハモグリバエに対する殺虫剤Aのドローンによる高濃度少量散布の効果およびドローン専用展着剤の加用による影響を確認することを目的に、その防除効果と薬害について検討した。その結果、ドローン専用展着剤の加用により薬液の伸展性および速乾性が向上すると考えられた。また、ネギハモグリバエに対する防除効果は判然としなかったが、ネギアザミウマ少発生条件下において殺虫剤Aのドローン散布は手散布区と同様に高い防除効果が見られたことから、ドローンによる殺虫剤Aの高濃度少量散布の実用性があると考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(6) スイカ病害虫防除体系の確立

ア スイカの病害虫対策

(ア) トンネル作型でのスイカ作付け後処理における急性萎凋症状への影響

担当者：川田久美子・坂井侑香里・竹中春人・米村善栄

協力分担：ZM クロッププロテクション(株)

トンネル作型での急性萎凋症状へ対策を確立する目的で、スイカ栽培終了後にトンネル被覆した状態で実施可能な土壌くん煙剤であるカーバムナトリウム塩液剤を用いた古株枯死処理および土壌消毒処理の防除効果を検討した結果、本処理は無処理においても萎凋症状が軽減されたため、効果が判然としなかった。また、カーバムナトリウム塩液剤土壌消毒処理は炭腐病に対して発病軽減する可能性が考えられた。土壌消毒処理は炭腐病およびホモプシス根腐病に対して発病軽減する傾向が認められた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) スイカのアブラムシ類に対する薬剤の防除効果

担当者：鈴木祐・米村善栄

協力分担：なし

スイカのアブラムシ類に対する定植時の粒剤処理の防除効果を確立する目的でアセタミプリド・シアントラニプロロール粒剤、シアントラニプロロール・チアメトキサム粒剤およびチアメトキサム粒剤の防除効果を検討した結果、チアメトキサム粒剤、アセタミプリド・シアントラニプロロール粒剤、シアントラニプロロール・チアメトキサム粒剤の順で防除効果が高かった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

13. 鳥取の野菜主要品目における革新技術による生産安定

(1) 鳥取スイカの生産・消費拡大を目指す次世代栽培技術

ア ハウス・トンネルの安定生産技術の確立

(ア) 作型別の穂木品種の選定

a ハウス作型

担当者：荒木佑哉・白岩裕隆

協力分担：なし

ハウス作型において、低温でも着果が安定し果実品質が良い穂木品種の選定を目的に、‘春のだんらん’を対照として5品種を比較した。定植は3月3日、受粉を4月17日から5日間行い、収穫を6月4日から行った。本年4月は気温が高く、すべての品種で花粉発芽率、着果率に問題は見られず、低温による影響について調査ができなかった。果実品質は‘春のだんらん’が最も優れていた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

b 7月どりトンネル作型

担当者：荒木佑哉・白岩裕隆

協力分担：なし

7月どりトンネル作型において、日焼け・うるみ果の発生が少ない品種の選定を目的に、‘祭ばやし RG’、‘稀勢丸’を対照として7品種を比較した。定植は4月19日、5月21日から6日間受粉を行い、収穫を7月9日から行った。日焼け・うるみ果の発生が対照品種に比べて少なかったのは‘U-027’、‘U-041’、‘MWX-918’、‘CR-36’の4品種であったが、‘U-027’、‘U-041’は果実が大玉傾向のため、栽培方法の検討が必要と考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) 台木品種の特性調査

a 台木品種の特性調査 (健全圃場)

担当者：井上和・麻木聖也

協力分担：なし

ユウガオ台の‘ダイハード’、‘かちどき2号’、‘強者’、‘TKN-116’ (タキイ種苗)、共台の‘台じょうぶ’、カボチャ台の‘かがやき’、‘Gパワー’について栽培特性を明らかにすることを目的として、露地トンネルで試験を行った。穂木は‘稀勢丸’を用いた。定植は4月29日、受粉は5月10～17日、収穫は6月27日、7月2日に行った。カボチャ台の‘かがやき’、‘Gパワー’、ユウガオ台の‘TKN-116’について果実糖度・硬度・食味に問題はなかった。‘TKN-116’は草勢も強く大玉傾向であった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

b 台木品種の耐病性比較 (黒点根腐病)

担当者：井上和・麻木聖也

協力分担：なし

台木の種類による黒点根腐病への耐病性の違いを明らかにすることを目的として、ユウガオ台の‘ダイハード’、‘かちどき2号’、‘強者’、‘TKN-116’ (タキイ種苗)、共台の‘台じょうぶ’、カボチャ台の‘かがやき’、‘Gパワー’を供試し、土壌病害発生ほ場 (黒点根腐病優占) で栽培した。穂木は‘稀勢丸’を用いた。定植は4月9日、受粉は5月10～15日、収穫は6月26、28日に行った。黒点根腐病への耐病性を総合的に評価すると以下のとおりと考えられた。

‘Gパワー’ > ‘強者’ ≒ ‘TKN-116’ > ‘ダイハード’
≒ ‘台じょうぶ’ ≒ ‘かがやき’ ≧ ‘かちどき2号’

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

c 台木品種の耐病性比較 (炭腐病)

担当者：井上和・麻木聖也

協力分担：なし

台木の種類による炭腐病への耐病性の違いを明らかにすることを目的として、ユウガオ台の‘ダイハード’、‘かちどき2号’、‘強者’、‘TKN-116’ (タキイ種苗)、共台の‘台じょうぶ’、カボチャ台の‘かがやき’、‘Gパワー’を供試し、土壌病害発生ほ場 (炭腐病優占) で栽培した。穂木は‘稀勢丸’を用いた。定植は4月5日、受粉は5月10～16日、収穫は6月27日、7月2日に行った。炭腐病に対する強さはカボチャ台の‘Gパワー’、‘かがやき’、共台の‘台じょうぶ’で高く、ユウガオ台は炭腐病に弱いことが示唆された。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(ウ) 黒皮種無スイカ「ガブリコ」における5本整枝 3果どり栽培の検討

担当者：井上和・麻木聖也

協力分担：なし

「ガブリコ」の3L中心栽培と空洞果の発生抑制を目的として、5本整枝3果どりが果実品質へ及ぼす影響を

検討した。定植は3月5日、受粉は4月22～29日、収穫は6月12、14、17日に行った。4の2区、5の3区の両区で着果不良が発生したものの、着果した株で比較すると、4本整枝2果どりに対して、5本整枝3果どりは糖度等の果実品質は同等であり、果実肥大を抑制する傾向が認められた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(エ) ‘稀勢丸’における異常果の発生原因の解明

担当者：荒木佑哉・白岩裕隆・浅尾悠介

協力分担：なし

‘稀勢丸’で発生する異常果は、果実外観に問題は無いが、果実内がうるみや発酵したような症状を呈しており、生産現場で問題となっている。そこで、異常果の発生原因の解明を目的として、整枝方法（5本整枝3果どり、4本整枝2果どり）、受粉時期（慣行での受粉、慣行より1週間早い受粉）、果実肥大後期の高温処理、これら3つの要因を組み合わせる試験を行った。定植は3月27日、受粉は1週間早めた処理区で4月25日～5月2日、慣行の処理区で5月3日～5月7日に行い、収穫はそれぞれ6月12日、6月21日から行った。その結果、いずれの処理でも異常果は発生せず、これらは異常果発生の要因ではないと考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(オ) 種苗会社が育成した耐病性系統のうどんこ病耐病性の検定

担当者：麻木聖也・白岩裕隆

協力分担：なし

7月中旬どりトンネル作において、品種「祭ばやし」のうどんこ病・炭疽病耐病性系統のうどんこ病耐病性について検討した。台木には‘ダイハード’を用いて、定植は4月25日に、収穫は7月11、16日に行った。その結果、慣行品種の‘祭ばやしRG’及び‘祭ばやし777’と比較して、耐病性系統の‘TM-13’及び‘TM-777’はうどんこ病及び炭疽病に高い耐病性が認められた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(カ) 育苗期 UV-B 照射によるうどんこ病抑制効果の

検定

担当者：麻木聖也・白岩裕隆

協力分担：パナソニック ライティングデバイス（株）

7月中旬どりトンネル作において、スイカ育苗期にUV-Bを照射し、その後の本圃でのうどんこ病発病抑制効果について検討した。品種は‘祭ばやしRG’（台木‘ダイハード’）を用いて、UV-Bは3月25日（発芽）から4月25日（定植）まで照射した（ただし、4月1日（接ぎ木）～7日（養生終了）は照射せず）。収穫は7月11、16日に行った。その結果、スイカ栽培において、育苗期のUV-B照射による本圃でのうどんこ病発病抑制効果は認められなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

イ 高温期のスイカにおける高品質生産

(ア) ハウススイカにおける遮光技術の確立

担当者：麻木聖也・白岩裕隆

協力分担：なし

7月中旬どりハウス作における、日焼けによる果実品質低下を抑制する技術として、ハウス内遮光法（果実の上部に1.5m幅で寒冷紗をトンネル状に被覆する遮光方法）の技術開発に向けて、遮光率の検討を行った。品種は‘稀勢丸’を用いて、定植4月25日、収穫7月11日、16日に行った。その結果、無処理区に対して、交配35日後から遮光率30%の遮光を実施した場合、常時遮光区及び開閉区（晴天時遮光、曇雨天時開放）のいずれの処理区においても糖度の低下は認められなかった。また、遮光率を40%に高め、曇雨天時に開閉したところ、無処理区と比較して糖度の低下は認められなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(2) 黒ボク地域における露地野菜の生産拡大

ア ブロッコリーの高品質多収技術

(ア) 作型別適品種の選定

a 6月どり作型

担当者：谷口美保・井上和

協力分担：なし

ブロッコリーの6月どり作型において収量性と花蕾品

質に優れる品種の選定を目的とし、‘SK9-099’及び‘令麟’を対照として10品種を比較した。2月20日播種、4月1日定植、及び2月28日播種、4月8日定植でいずれも128穴セルトレイを用いた。その結果、対照品種以上に花蕾品質と収量性に優れた品種はなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

b 10月どり作型

担当者：谷口美保・井上和

協力分担：なし

ブロッコリーの10月どり作型において収量性と花蕾品質に優れる品種の選定を目的とし、‘SK9-099’及び‘アーリーキャノン’を対照として8品種を比較した。7月10日播種、8月5日定植、及び7月19日播種、8月16日定植でいずれも128穴セルトレイを用いた。その結果、‘YQQ648’は腐敗発生率が低く、小花黄化の発生がなく、可販率が高いことから収量性に優れ有望品種であると考えられた。ただし、対照品種と比較してキャッツアイの発生が多く、花蕾色はやや淡かった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

c 年内どり作型

担当者：麻木聖也・谷口美保

協力分担：なし

本県の11～12月どり作型の主要品種‘おはよう’より可販率が高く、花蕾品質の優れる品種を選定する。併せて現場で導入済みの‘アーリーキャノン’、‘はつみらい’、‘令麟’についても参考品種として栽培した。その結果、8月6日及び8月13日両播種区（それぞれ定植9月4日及び9月12日）とも参考品種である‘アーリーキャノン’または‘はつみらい’と比較して、可販率及び花蕾品質が優れる品種はなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

d 2月どり作型（令和5年定植）

担当者：井上和・谷口美保

協力分担：なし

2月どり作型で花蕾品質に優れ、安定的に収穫できる品種を選定することを目的として13品種を比較した。8月22日播種、9月20日定植及び、8月29日播種、9

月26日定植でいずれも128穴トレイを使用した。積雪を経過した品種のなかでは‘美緑410’が腐敗の発生率が低く、可販率が高かった。次点で‘ウインタードーム’の可販率が高かった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) 高温期定植における保水剤、バイオスティミュラント剤の活着への影響

担当者：白岩裕隆・川口重弓

協力分担：なし

高温期のブロッコリー定植において、乾燥条件下でも活着が安定する栽培技術が求められている。本試験では、保水剤およびバイオスティミュラント剤の活着、生育への影響を調査した。

品種‘SK9-099’を令和5年7月4日に128穴セルトレイに播種し、定植3日前にゲインウォーター200倍、スキーパー500倍、ジャスモメート液剤500倍を10/トレイ処理し、8月1日にハウスおよび露地圃場にそれぞれ定植した。その結果、露地およびハウス圃場の両者において供試薬剤の活着を向上させる効果は認められなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

イ 白ネギの生産安定

(ア) 有望品種の選定（9月どり作型）

担当者：麻木聖也・白岩裕隆

協力分担：なし

9月どり作型において、夏越し性と斉一性に優れる多収品種の選定を目的とし、対照品種に‘夏扇パワー’と‘関羽一本太’を用いて、品種比較試験を行った。播種12月22日、定植3月15日、収穫9月25日に行った。本年は高温乾燥のため、各品種とも2L規格以上の株はなく、L4規格中心と低収量であった。その中で‘大地の響き’が最も収量が多く、次いで‘項羽一本太’であった。襟部の締まりは‘項羽一本太’のほうがやや優れたが大きな差はなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(3) 施設利用野菜の高品質多収技術

ア ミニトマトにおける夏季異常高温に対応した栽

培技術

(ア) ハウス天面の農 P0 フィルム除去の検討

担当者：井上和・荒木佑哉

協力分担：なし

猛暑での高温対策に資するため、夏期にハウス天面の農 P0 フィルム除去がハウス内の環境、ミニトマトの生育、収量に及ぼす影響について調査した。

天面 P0 除去区では7月22日～9月5日までハウス天面の農 P0 フィルムを除去し、寒冷紗は定植前～9月5日まで展張した。ハウスサイドおよび妻面は通常通り農 P0 フィルム及び防虫ネットで被覆した。慣行区では寒冷紗を定植前～9月5日まで展張した。寒冷紗は両試験区とも遮光率 40%のシルバー寒冷紗を使用した。品種は‘サンチェリーピュア’、‘エコスイート’を使用した。定植は7月5日に行った。

雨水によるかん水効果が少なからずあった条件ではあるものの、気温上昇が抑制されたことによる収量増加、果実肥大促進の傾向が認められた。一方で、天面 P0 除去区において天面被覆後にすすかび病が発生したことによる収量減少、糖度低下が認められた。

(本試験成績掲載印刷物：なし)

(イ) 高温対策としての定植時期の検討

担当者：井上和・荒木佑哉

協力分担：なし

猛暑での高温対策と8～9月に集中する収穫作業の分散を目的として、現地慣行の6月下旬～7月上旬に定植する作型に対して、定植時期を7月下旬まで遅らせた場合のつやなし果の発生、可販収量および旬別の収穫量に与える影響を検討した。7月上旬定植区は7月5日、7月下旬定植区は7月31日に定植した。品種は‘サンチェリーピュア’と‘エコスイート’とした。

7月上旬定植に比べて7月下旬定植で9・10月のつやなし果発生率がやや低かったが、全期間でのつやなし果発生率に差は認められなかった。7月上旬定植に比べて7月下旬定植で総収量及び可販収量が低かったものの、定植日を遅らせることで収穫ピークを分散できる可能性

が示唆された。

(本試験成績掲載印刷物：なし)

(ウ) ミニトマト栽培における遮熱資材の検討 (令和5年)

担当者：白岩裕隆・荒木佑哉

協力分担：なし

遮熱塗布資材レディヒートがミニトマトの生育、果実収量、品質に及ぼす影響について検討した(令和5年度実施)。小型ハウス(4×8×2.7m)において、レディヒート区と寒冷紗区を設けて試験を実施した。レディヒート区は定植前のハウスに5倍希釈液を動噴で散布塗布した。寒冷紗区は、40%シルバー寒冷紗を定植～10月7日まで被覆した。品種は‘サンチェリーピュア’、定植は8月5日、2本仕立て栽培を行った。

定植28日後の生育は、レディヒート区で草丈がやや低く、段別茎径がやや太い傾向であった。開花段数には差は認められず、収穫は両区とも9月18日から開始した。10月までの収量は、収穫個数、重量、1果重ともレディヒート区で高かったのに対して、11月の収量は、寒冷紗区で高かった。以上の結果、8月、9月の高温期においてレディヒート区では、寒冷紗区に対して果実肥大が良く、収量が高い傾向が認められた。

(本試験成績掲載印刷物：なし)

(エ) ミニトマト栽培における遮熱資材の検討 (令和6年)

担当者：荒木佑哉・白岩裕隆

協力分担：なし

遮熱塗布資材レディヒートが、ミニトマトの生育・収量に及ぼす影響について検討した(令和6年度実施)。小型ハウス(4×8×2.7m)において、レディヒート区と寒冷紗区を設け、レディヒート区は定植前のハウスに5倍希釈液を動噴で散布塗布した。寒冷紗区は、40%シルバー寒冷紗を定植から収穫終了時まで被覆した。品種は‘サンチェリーピュア’、定植は8月5日、2本仕立て栽培を行った。

その結果、レディヒート区は寒冷紗区に比べて日射量

が多く、晴天時ではハウス内気温がやや低かった。平年より日射量が少なかった本年11月以降の収量は、寒冷紗区では10月までの収量に比べて低下したのに対して、レディヒート区の収量が高かった。収穫期間を通して、可販率に差はみられず、レディヒート区の1果重、2L規格割合が寒冷紗区に比べて多くなった。これらのことから、レディヒートは透過日射量を維持したまま昇温を抑制できるため、果実肥大が良く収量の確保ができる可能性が示唆された。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

イ 抑制メロンの高品質多収技術

(ア) 抑制メロンにおける台木品種試験

担当者：荒木佑哉・白岩裕隆

協力分担：なし

‘プリモレッド’に適した台木品種の選定を目的に、‘バーネット’を対照品種として2品種比較した。定植は8月8日、9月9日から4日間受粉し、10月31日から収穫しその後7日間追熟した。実生の時点では、‘バーネット’の生育がやや旺盛であり、‘ラッシュ’の生育がやや緩やかであったが、接ぎ木後の苗から収穫時までの生育には台木品種間で差はみられなかった。本試験の圃場での生育はやや緩慢となり、全体的に草勢が弱い状況であった。‘バーネット’は定植後から収穫時まで草勢が維持されたが、‘ガイア’と‘ラッシュ’は草勢の低下がみられた。果実品質は‘バーネット’が最も優れていた。以上の結果より、‘バーネット’より優れる台木品種はなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(4) 鳥取県開発イチゴ品種の高品質多収

ア 新品種‘堅しろう’の栽培技術

(ア) 摘果の収量・品質への影響

担当者：井上和・白岩裕隆・谷口美保・麻木聖也

協力分担：なし

‘堅しろう’の摘果が収量および果実品質に及ぼす影響を明らかにすることを目的として、各果房の果数をそれぞれ3果、5果、7果、7-5-3果に摘果する区と摘果

をしない区(無処理区)を設けて検討した。定植は9月21日に行い、1芽で管理した。‘堅しろう’の摘果処理は、無処理区に対して可販収量は低くなるものの、果実肥大効果が認められ、L規格以上の収量が高まった。‘堅しろう’は‘とっておき’と同様に果房当たりの花数が少ない品種であり、‘とっておき’に準じた摘果の栽培管理で良いと考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

イ UV-B照射によるイチゴの果皮硬度への影響

担当者：麻木聖也・白岩裕隆

協力分担：パナソニック ライティングデバイス (株)

‘とっておき’は春先の果皮硬度の低下が問題となっている。そこで、UV-B照射による、果皮硬度への影響を検討した。定植9月20日に行い、UV-Bは10月12日から栽培終了まで、23時から翌2時(3時間)に照射した。その結果、果皮硬度を高める傾向はみられたものの、実用性は低いと考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(5) みどりの食料システム戦略に対応した栽培技術

ア 生分解性不織布ポットの利用

(ア) スイカ

a スイカ栽培における生分解性不織布ポットの利用(ハウス作)

担当者：谷口美保・白岩裕隆

協力分担：生産振興課

環境負荷の低減に向けた生産技術開発を目的とし、廃プラスチック削減の一助となる生分解性の不織布ポット(商品名「Jiffy-7C」50×60mm)を育苗ポットとして供試し、定植3月14日、収穫6月17日～19日でハウス作のスイカを栽培した。その結果、慣行ポリポットと比較して、本圃において同等に生育し、収量性及び果実品質に差が認められなかったことから実用性があると考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

b スイカ栽培における生分解性不織布ポットの利用(露地トンネル作)

担当者：麻木聖也・白岩裕隆

協力分担：なし

環境負荷の低減に向けた生産技術開発を目的とし、廃プラスチック削減の一助となる生分解性の不織布ポット（商品名「Jiffy-7C」50×60mm）を育苗ポットとして供試し、定植4月5日、収穫6月27日～7月3日で露地トンネル作のスイカを栽培した。その結果、慣行ポリポットと比較して生分解性不織布ポットは、苗及び生育初期のつる長に差が認められたが、節数は差がなく、収穫果実の大きさ、形状及び果実糖度に差が認められなかったことから、露地トンネル作型において、生分解性不織布ポットは実用性があると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

c 抑制小玉スイカ栽培における生分解性不織布ポットの利用

担当者：谷口美保・白岩裕隆

協力分担：生産振興課

環境負荷の低減に向けた生産技術開発を目的とし、廃プラスチック削減の一助となる生分解性の不織布ポット（商品名「Jiffy-7C」50×60mm）を育苗ポットとして供試し抑制小玉スイカを栽培した。品種‘ひとりじめBonBon リッチ’、定植7月12日、株間75cm、5本整枝4果どりとし、収穫は9月4～12日に行った。その結果、慣行ポリポットと比較して、本圃において同等に生育し、収量性及び果実品質に問題が認められなかったことから実用性があると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

d 抑制小玉スイカでの生分解性不織布ポットの実用性（現地試験）

担当者：白岩裕隆・谷口美保・麻木聖也

協力分担：なし

廃プラスチック削減の一助とするため、生分解性の不織布ポットの利用について検討を行う。本試験での抑制小玉スイカにおいて現地実証を実施した。

北栄町の現地農家ハウスにおいて、慣行9cmポリポットと生分解性不織布ポットJiffy7C 50×60mm（サカタの

タネ）との比較栽培を行った。園芸試験場で育苗を行い、現地圃場にて慣行栽培で試験を実施した。品種‘ひとりじめBonBon リッチ’、定植7月12日、株間80cm、5本整枝の4～5果どり、収穫9月4～5日、栽培終了後に農家へアンケート調査を実施した。

抑制小玉スイカ栽培において不織布ポットは、慣行の9cmポリポットに比べて定植作業性が優れ、生育、収量、果実品質とも同等の栽培が可能であり、現地での実用性が認められた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(イ) イチゴ

a イチゴ栽培における生分解性不織布ポット及びネイキッド培地の利用

担当者：谷口美保・白岩裕隆

協力分担：生産振興課

イチゴ栽培における廃プラスチック削減の一助とするため、生分解性不織布ポット及びポットを用いないネイキッド培地による育苗について検討した。育苗ポットは慣行ポリポット（7.5cm径）と生分解性不織布ポット（5cm径、商品名「Jiffy-7C」50×60mm）及びネイキッド培地（5cm角、商品名「イチゴエクセルキューブ」）の3水準、受苗時期を7月上旬と8月上旬の2水準とした。品種は‘とっておき’及び‘章姫’とし、令和5年9月19日に定植した。その結果、生分解ポット及びネイキッド培地の利用によって、出蕾及び収穫開始日が早まり、年内可販収量が増加すると認められ、実用性があると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

b イチゴ栽培における生分解性不織布ポットの実用性（現地試験）

担当者：白岩裕隆・谷口美保

協力分担：生産振興課

イチゴ栽培における廃プラスチック削減の一助とするため、生分解性不織布ポット（不織布ポット）による栽培技術について検討を行う。本試験では、現地イチゴ農家圃場において不織布ポットの実用性の評価を実施した。

琴浦町の現地農家ハウスにおいて、慣行7.5cmポリポットと生分解性不織布ポットJiffy7C 50×60mm（サカタのタネ）との比較栽培を行った。育苗および本圃ともに農家慣行とした。品種‘とっておき’、受苗6月17日～26日、定植9月20日、令和7年1月7日に農家へアンケート調査を実施した。

イチゴ栽培において慣行ポリポットに比べて不織布ポットは、作業性が良いこと、生育が優れること、第1花房および第2花房の出蕾が早まり早期収量の確保ができること等、現地イチゴ農家での実用性が認められた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

イ 鶏ふんを利用した化学肥料の削減

(ア) 白ネギ栽培における鶏ふん利用の検討（12月どり作型）

担当者：麻木聖也・谷口美保

協力分担：なし

環境負荷の低減に向けた生産技術開発を目的とし、化学肥料の削減に向けて、慣行の施肥体系に対して、窒素3割鶏ふん代替区及び、窒素5割鶏ふん代替区を設けて白ネギを栽培した。播種3月6日、定植5月10日、収穫12月16日とした。その結果、鶏ふん施用区で化成肥料施用量を減らした6月においてECまたは無機態窒素量に差が認められたものの、生育に大きな差は認められず、収量は同等であった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

14. 気候・風土に適応した砂丘ラッキョウ・ナガイモの安定生産技術の確立

(1) ラッキョウにおける安定生産技術の確立

ア 収量に影響する重点施肥時期の解明

担当者：森本隆義・田中需・鳥飼周平・石河利彦

協力分担：ジェイカムアグリ、鳥取普及所、JA鳥取いなば

ラッキョウ施肥の省力化を検討するため、カリ成分について緩効性肥料を用いた一発基肥体系を検討した結果、緩効性のケイ酸加里を使用した場合、収量が少なくなる

傾向が見られた。また、緩効性のケイ酸加里およびエコカリコートを使用した場合、乾物率が低くなる傾向が見られた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

イ 現地優良系統の選抜と特性の解明

(ア) 早出し栽培に適した現地優良系統の特性調査

担当者：田中需・鳥飼周平・石河利彦

協力分担：鳥取普及所、JA鳥取いなば

鳥取市福部地区において早期収穫時（5月中旬出荷想定）に鱗茎乾物率が高く、かつ収量性も高い系統を選抜するため、平成23、24、25年に収集した系統を用いて2ほ場で収量特性を調査したところ、‘H2405’において早期鱗茎乾物率が高い値を示した。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

ウ 中部地区における施肥の検討

(ア) 秋季重点施肥による肥料削減の可能性の検討

担当者：鳥飼周平・大津真士・田中需・石河利彦

協力分担：なし

肥料削減を目的に秋季重点施肥について検討した結果、総窒素量を慣行施肥の4割減にしても慣行施肥と同等の収量が得られた。また秋季重点区は慣行区と鱗茎重に差はなかったが、換算収量では1割程度増収となった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

エ 春肥施用が灰色カビ病・あめ色症状の発生に及ぼす影響

担当者：鳥飼周平・大津真士・田中需・石河利彦

協力分担：JA鳥取中央、東伯農業改良普及所、環境研究室

春肥によって灰色カビ病、あめ色症状が多発するかを検討した結果、春肥の有無にかかわらず灰色カビ病の発生は認められなかった。また、あめ色症状発生数に春肥の有無による差はなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

オ 福部砂丘における乾腐病耐病性系統の適応性検討

担当者：田中 需、鳥飼周平、大津真士、石河利彦

協力分担：なし

園試で育成された乾腐病耐病性系統（‘IF1’）の現地適応性を見るため、園試福部ほ場および福部現地生産者ほ場に植え付けた結果、‘IF1’は生産者ほ場と試験場ほ場で収量性が大きく異なる結果となり、ほ場により収量性が大きく異なる可能性があるため普及性は乏しいと考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

（2）‘ねばりっ娘’専用栽培技術の確立

ア 縦割れ症発生原因究明と低減技術の確立

（ア）pH低下処理が縦割れ症に及ぼす影響（現地試験）

担当者：大津真士・田中需・鳥飼周平・石河利彦

協力分担：東伯普及所

土壌 pH が高いと発生しやすい縦割れ症に対し、pH 低下処理の影響を確認するため、硫黄華施用による土壌 pH の低下効果について現地多発ほ場で検討した結果、施用量 200kg/10a、100kg/10 a とともに、土壌 pH は酸性に低下した。しかし、縦割れ症の発生率は慣行区と同等程度であった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

（イ）ホウ素配合資材の施用効果（現地試験）

担当者：大津真士・田中需・鳥飼周平・石河利彦

協力分担：東伯普及所

縦割れ症についてホウ素含有資材（FTE）の影響を確認するため、現地の縦割れ症多発ほ場で検討した結果、FTE 施用による縦割れ症発生軽減効果は得られなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

イ ‘ねばりっ娘’専用栽培指針の作成

（ア）‘ねばりっ娘’の生育特性調査

担当者：鳥飼周平・田中需・石河利彦

協力分担：なし

‘ねばりっ娘’の生育特性を確認するために定期掘り取り調査を行った結果、令和6年産のねばりっこは地上部が6月中旬から7月中旬にかけて急激に成長し、地下部は10月上旬まで成長を続けた。平成24～26年と比較して生育期間が長くなる傾向であった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

（イ）土壌改良資材による収量への影響（予備試験）

担当者：鳥飼周平・田中需・石河利彦

協力分担：なし

増収を目的に土壌改良資材（ハイフミン特号）の施用を検討した結果、芋重は慣行区と同等だった。また土壌中の水分量は生育期間を通して慣行区より低く推移し、降水量の少ない条件下では増収は見込めないと考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

ウ 基肥削減の影響

担当者：鳥飼周平・田中需・石河利彦

協力分担：なし

肥料の削減を目的に基肥の有無による収量性を調査した結果、慣行区と比較して基肥無し区で生育初期の地上部重、芋の窒素含量が少なかったが、生育中期には差がなくなり、収量は同等であった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

（3）ナガイモ黒陥没症対策技術の確立

ア 発生原因の究明と低減技術の確立

（ア）土壌の差異による影響

a 土壌 pH による影響

担当者：田中需・鳥飼周平・石河利彦

協力分担：なし

土壌 pH が黒陥没症の発生に及ぼす影響を検討するため、炭酸カルシウム施用による緩衝能曲線を作成し、異なる高さの pH での黒陥没症発生率を調査したところ、pH7.0 より高い pH の調整は難しいと考えられた。また、pH7.0 区では栽培途中で土壌 pH が低下しており、段階的な土壌 pH の差異による黒陥没症発生率の差は判別できなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

（イ）バイオスティミュラントの検討（予備試験）

担当者：田中需・鳥飼周平・石河利彦

協力分担：OAT アグリオ株式会社

黒陥没症対策を目的に、品質等の向上に効果があると

考えられる「ポテトール®」を散布して収量性等を調査したところ、6月3回散布、7月3回散布ともに収量性及び品質の向上は認められなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(4) ‘鳥取 1u61’ の安定生産技術の確立

ア ‘鳥取 1u61’ に適した施肥法の検討

担当者：田中需・鳥飼周平・石河利彦

協力分担：なし

‘鳥取 1u61’ の密植栽培における収量性を向上させるため、施肥の分施を検討したが、慣行区と改良区で芋サイズに差はみられず、効果は判然としなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

イ 切片による子芋増殖法の検討

担当者：田中需・鳥飼周平・石河利彦

協力分担：鳥取大学

切片による初期増殖法を確立するため、べた掛け処理の有無による子芋の収穫量を比較したところ、50 g 以上比率は栽植密度による差はなかったが、収穫数は前年度と比較して著しく低かった。また、べた掛けについては、全処理区の出芽率が悪く、効果については判然としなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

ウ 品質向上技術の開発

(ア) 出芽率向上に向けた種芋保存法の検討

(予備試験)

担当者：田中需・鳥飼周平・石河利彦

協力分担：なし

‘鳥取 1u61’ の出芽能力を向上させるため、乾燥を防ぐように保存方法を変えることで出芽能力の向上を試みたが、出芽率は低下し、収穫株数も減少する結果となった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(5) 環境に配慮した施肥法の開発

ア ラッキョウにおけるリン酸施用の削減

担当者：大津真士・田中需・鳥飼周平・石河利彦

協力分担：福部らつきょう生産部、JA 鳥取いなば

リン酸の削減を目的とし、リン酸施肥量を慣行比 1/2 削減および全量削減した施肥による収量比較を行った結果、りん茎重、分球数に有意な差はなかったが、反復によるばらつきが大きく判然としなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

イ 耐病性系統における特別栽培への適応性の検討

担当者：田中需・鳥飼周平・石河利彦

協力分担：なし

乾腐病耐病性系統（‘T4’）の活用について特別栽培の適応性を検討したところ、特裁区において慣行区と比較して収量が低くなる結果となったが、病害の発生等はなく、今年度については特裁防除と慣行防除は同等程度の効果があると思われた。鱗茎重における品種間の有意差はなかったため、‘T4’ は‘大栄 1 号’ と同等程度の適応性があると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

ウ 汚泥肥料を用いた施肥の検討

担当者：鳥飼周平・大津真士・田中需・石河利彦

協力分担：公益財団法人鳥取市環境事業公社

有機質肥料を用いた施肥の確立を目的に、慣行施肥にの窒素成分量を全量汚泥肥料に代替した際の収量を調査した結果、収量は慣行に比べて 46%であった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

15. 地球温暖化に対応した白ネギ安定生産技術と弓浜特産野菜の栽培改善

(1) ネギ軟腐病・萎凋病の発生を軽減する栽培技術の確立

ア ほ場整地による畝間滞水解消とネギ生育（現地試験）

(ア) ほ場嵩上げによる湿害回避

担当者：井上浩・柳凜太郎・岡崎悠希

協力分担：農業試験場水田高度利用研究室

地下水位が高く、雨水が地下浸透しづらいほ場の排水対策を目的に、嵩上げ施工について効果検証した。

集中豪雨後、嵩上げしてない区は地下水位 40cm の状

況が長期間継続し湿害を生じた。それに対し 15cm 嵩上げした区は、地下水位が 55cm まで下がることで湿害回避ができた。また、ほ場端に「お堀」を掘り、排出した土を嵩上げに用いると、低コスト施工が行えた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) 弓浜湿地におけるネギ湿害の実態調査

担当者：井上浩・柳凜太郎・岡崎悠希

協力分担：農業試験場水田高度利用研究室

ネギ湿害が生じる状況とその被害を明らかにすることを目的に、3年間過湿地でネギを栽培し実態調査を行った。その結果、集中豪雨後に地下水位が 40cm 以下だと土壤の過湿が長引くことで湿害が起りやすく、地下水位 50cm 以上だと、過湿解消が早まり湿害が軽減された。また湿害の影響は、ネギ生育初期よりもネギ生育後期で大きくなる傾向があり、高温時の畝崩壊後の土寄せも被害を助長した。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

イ 乾燥畑における9月どりネギの安定生産技術

(ア) 現地ほ場の水分調査

担当者：柳凜太郎・井上浩

協力分担：西部普及所

夏期の土壤水分がネギ生育に及ぼす影響を明らかにするため、弓浜地域の湿地ほ場、やや湿地ほ場、乾燥ほ場の pF 推移と生育収量との関係を調査した。

その結果、何れのほ場も夏期に pF1.5 から 2.4 の適湿からやや乾燥で推移しており、ネギの生育にも大差なく、土壤水分がネギ生育に及ぼす影響は判然としなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) 高温乾燥時における土壤適湿管理がネギ生育収量に及ぼす影響

担当者：井上浩・柳凜太郎

協力分担：なし

夏期におけるネギの草勢維持を目的に、乾燥時に散水して土壤を適湿に管理する手法について検討した。その結果、無散水区は pF2.5 以上の過乾燥で、散水区は pF1.8 から 2.2 の適湿で推移し、散水区は無散水区に比

べ生存株率は同等以上、乾物生産量、根部の健全性は顕著に増加した。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

ウ 高温期の肥培管理技術

(ア) 夏越しネギにおける土壤改良資材の施用効果

担当者：井上浩・柳凜太郎

協力分担：なし

夏期におけるネギの根張り向上を目的に、水溶性カルシウム、水溶性腐植資材の施用効果を検討した。その結果、無施用区に比べ水溶性カルシウム区、水溶性腐植区ともに根張りが良く、生育が良かった。また水溶性カルシウムはネギの軟弱徒長を抑制する効果がみられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

エ ネギ軟腐病・萎凋病防除技術の確立

(ア) 栽培期間短縮による夏越しネギ安定生産技術

担当者：柳凜太郎・井上浩

協力分担：なし

ネギの夏越し安定化を目的に、定植時期を慣行より 1 か月遅らせ、5月定植したやや小さめのネギに対し、夏期に散水と肥培管理を行い、生育を進める栽培方法について検討した。その結果、慣行は夏期に生育停滞したが、5月定植は生育停滞せず、欠株も少なく、重量感のあるネギが収穫できた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) バスアミド無被覆処理による土壤病害虫防除 (現地試験)

担当者：柳凜太郎・井上浩

協力分担：西部普及所

ネギの萎凋病対策として、バスアミド微粒剤 60kg/10a、30kg/10a 処理区を設けて土壤病害虫への効果を検討した。その結果、8月収穫であれば、バスアミド微粒剤 30kg/10a 処理で根の健全性が保たれた。収穫時のフザリウム密度は処理前と同程度まで回復しており、本作型を連作する場合、毎年の土壤消毒が必要であると考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(ウ) トリフミン水和剤灌注処理と夏越しネギ茎盤褐変の発生時期 (令和5年度)

担当者：柳凜太郎・岡崎悠希

協力分担：なし

ネギ萎凋病の軽減を目的に、トリフミン水和剤灌注処理効果と本病の発生時期について調査を行った。その結果、トリフミンの効果は、定植から1か月後までみられたが、その後は無処理と同等の発病となった。萎凋病の症状であるネギ茎盤褐変は8月以降に多発したことから、トリフミンを5月に処理しても薬効は期待できないと考えられた。

(本試験成績掲載印刷物：なし)

(2) 白ネギ周年栽培体系の強化

ア 作型別適品種の選定

(ア) 5月どり

担当者：岡崎悠希・柳凜太郎

協力分担：なし

極晩抽性品種‘陽春の宴’の5月どりでの抽台時期の把握、多収技術開発を目的に、‘羽緑一本太’を対照として栽植本数を変えた栽培試験を行った。その結果、対照品種は5月7日から抽台が生じたのに対し‘陽春の宴’は約1週間遅い発生であった。栽植本数4本、5本/10cmを比べると5本の方が多収となった。

(本試験成績掲載印刷物：なし)

(イ) 弓浜湿地での9月どり (現地試験)

担当者：柳凜太郎・岡崎悠希

協力分担：なし

湿害が起きやすい弓浜湿地において、耐湿性に優れた品種選定を目的に、9月どり作型で8品種を供試し栽培試験を行った。その結果、本年は集中豪雨と高温が厳しい年であったが、‘夏柱’は生存株率とL率に優れ、品質に問題なく有望品種であった。

(本試験成績掲載印刷物：なし)

(ウ) 5月下旬定植10月どり短縮栽培

担当者：柳凜太郎・岡崎悠希

協力分担：なし

慣行より1か月定植を遅らせる短縮栽培に適する品種を選定することを目的に、5月下旬定植10月どり作型で5品種を供試し栽培試験を行った。その結果、‘大地の響き’、‘項羽一本太’、‘夏柱’は出荷箱数が100cs/aを超え有望品種であると考えられた。

(本試験成績掲載印刷物：なし)

(エ) 12、1月どり (令和5年度)

担当者：柳凜太郎・岡崎悠希

協力分担：なし

雪害に強く、収量性に優れた品種選定を目的に6品種を供試して栽培試験を行った。その結果、‘項羽一本太’、‘SK4-043’は対照‘関羽一本太’と比較して収量に優れ、耐雪性も同程度であり、有望品種であった。

(本試験成績掲載印刷物：なし)

イ 生産者ができる春ネギ抽台時期予測手法

担当者：柳凜太郎・岡崎悠希

協力分担：なし

生産者が行える春ネギの抽台時期予測手法を開発するため、内葉枚数と新葉の展葉速度を経時調査した。その結果、3月下旬の内葉枚数から、抽台までの日数 = $\{(3 \text{ 月下旬の内葉枚数} + 1) / 4 \text{ 月中} 1 \text{ 週間の展葉枚数}\} \times 7 \text{ 日}$ の計算式で予測が可能と考えられた。4月中の展葉枚数は、‘春扇’は0.9枚/週、‘陽春の宴’は0.7枚/週であった。

(本試験成績掲載印刷物：なし)

ウ 初夏どり無被覆栽培の前進化

(ア) ‘羽生一本太’の花芽分化調査

担当者：岡崎悠希・柳凜太郎

協力分担：なし

無被覆栽培での5月中下旬どり作型開発を目的に、‘羽生一本太’を10月中旬、11月上旬に定植し、生育と抽台発生について調査した。その結果、定植時期が早いほど抽台が多発し、11月上旬定植でも50%発生した。ネギ生育と抽台発生の関係は分からなかった。

(本試験成績掲載印刷物：なし)

エ 各種病害虫等に対する薬剤防除体系

(ア) 砂畑白ネギほ場での雑草防除体系（畑地雑草）

担当者：井上浩

協力分担：ランドサイエンス

除草剤による雑草防除体系の確立を目的に、非選択性除草剤の畝間処理、ロロックスやトレファノサイドなどの土壌処理剤を時期別に組合わせた体系防除試験を行った。その結果、盛夏期までに発生した雑草はカレターなど非選択性除草剤の散布後土寄せを行う、盛夏期はトレファノサイドとナブ乳剤を混用散布する、広葉雑草が多い時はロロックスを混用することで雑草防除ができた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) ネギべと病発生後の薬剤防除試験

担当者：柳凜太郎・岡崎悠希

協力分担：なし

ネギべと病が蔓延した後に散布する効果の高い薬剤選定を目的として、4剤を比較検討した。その結果、リドミルゴールドMZは高い防除効果を示した。しかし数日後に病徴が復活してくるため、追加散布を行う必要があった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

オ 低コスト施肥技術の確立

(ア) 有機質原料入り化学肥料の施肥が春ネギ生育に及ぼす影響

担当者：岡崎悠希・柳凜太郎

協力分担：なし

肥料コスト削減のため、安価な有機質原料入り化学肥料が春ネギの生育に及ぼす影響を調査した。その結果、BM有機スペシャル280は慣行化成肥料と比べ、生育及び収量が同程度であり有望と思われた。しかし、低温時の窒素肥効がやや劣るため、施肥時期の検討が必要と考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) 鶏糞、緑肥施用ほ場におけるL型肥料が秋冬ネギの生育に及ぼす影響（令和5年度）

担当者：岡崎悠希・柳凜太郎

協力分担：なし

肥料コスト削減のため、12月どり作型において安価なL型肥料（低PK成分）がネギ生育及び土壌成分に与える影響を調査した。その結果、L型肥料だけでは慣行化成肥料と比べ生育収量が劣った。しかし緑肥、鶏糞を元肥施用することで慣行化成肥料と比べて、生育収量が同程度得られた。土壌成分への影響については判然としなかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

カ 緑肥・輪作作物を組み込んだ土壌環境改善

(ア) イモ類輪作後の白ネギ生育収量

担当者：井上浩・柳凜太郎

協力分担：なし

ネギの連作障害回避のため、イモ類との輪作による土壌病害虫の低減効果について検討した。その結果、カンショおよびサトイモを2作作付けした後のネギ栽培ではネギ連作区に比べ、夏場の根傷みや茎盤褐変が軽減され、生存株率が向上した。しかし有害センチュウ被害が増加したことから、対策を講じる必要があった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) 砂畑におけるネギの木質堆肥連用試験

担当者：井上浩・柳凜太郎

協力分担：なし

砂畑での木質堆肥連用による地力増強効果を明らかにするため、2t/10aを連用し白ネギ栽培を行った。その結果、3年から4年連用で可給態窒素が1mg/100g土増加し、一定の地力増工効果が認められ、無施用区に比べ白ネギ収量が増加した。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(3) 弓浜特産野菜の栽培改善

ア ニンジン優良品種の選定と栽培技術の検討

(ア) 春まき初夏どりニンジンの晩抽性品種選定

担当者：岡崎悠希・柳凜太郎

協力分担：なし

晩抽性が強く、収量品質に優れる品種を選定する目的で、7品種を用いて栽培試験を行った。その結果、‘クリスティーン’は対照品種‘翔彩’より抽台が少なく、上

物収量及び早期肥大性に優れ、品質も問題なかった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

イ カンショ ‘べにはるか’ の栽培技術と早期出荷用 良食味品種の検索

(ア) 早期出荷用良食味品種の検索

担当者：柳凜太郎・井上浩

協力分担：なし

早掘り作型での良食味かつ高収量な品種を検索する目的で、‘あまはづき’の栽培試験および食味調査を行った。その結果、‘あまはづき’は対照‘べにはるか’に比べて低収量で、丸イモの発生も多かった。収穫直後の甘味も少なく、食味評価は「普通」であった。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) コガネムシ薬剤防除試験

担当者：柳凜太郎・岡崎悠希

協力分担：なし

コガネムシ薬剤防除方法確立のため、畝立て時のダン
トツ粒剤処理と7月のダイアジノン SL ゴル散布を組み
合わせた効果について検討した結果、無処理区の被害株
率60%に対し、薬剤区は3%とコガネムシ被害が軽減さ
れた。しかしダイアジノン SL ゴルの生育期散布はナカ
ジロシタバでの登録なので注意が必要である。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(ウ) 定植方法と発根促進資材処理による上物収量 への影響 (予備試験)

担当者：柳凜太郎

協力分担：なし

焼き芋に適する LM 規格の増収を目的として、‘べには
るか’の定植方法と発根促進資材の効果について検討した。
その結果、水平挿しにおいて発根促進資材クロスバリュ
ーの 200 倍液を 500ml/株植穴灌注した区は無処理区と
比較して上物個数が増加し、焼き芋に適する LM 規格で
長さの揃った芋が増える傾向が見られた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

16. 中山間地園芸作物の安定栽培技術の確立

(1) 夏秋トマト ‘りんか 409’ の高品質安定多収技術 の確立

ア 草勢維持による中位段の収量安定化

(ア) 送風受粉と多かん水が6～8段果房の収量へ及 ぼす影響

担当者：小谷和宏・大豊航史

協力分担：なし

‘りんか409’の中位段(6～8段)の収量安定につな
げることを目的として、3～5段の送風受粉と多かん水
管理を行った。その結果、送風処理区はつやなし果が増
加し、多かん水と組み合わせても収量への影響は小さか
ったことから、全段ホルモン処理でかん水量を多めの管
理が良いと考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) 果梗捻枝による裂果抑制効果の検討

担当者：小谷和宏・大豊航史

協力分担：なし

‘りんか409’の放射状裂果を軽減することを目的と
して果梗捻枝の強度試験を行った。その結果、裂果の発
生した果房を選択的に捻枝しても、一斉に捻枝した場合
と同等の裂果抑制効果があり、糖度低下も慣行区と有意
差はなかったため、10月の裂果抑制技術として実用性が
あると考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(ウ) 低価格肥料の検討

担当者：小谷和宏・大豊航史

協力分担：なし

肥料高騰対策として、スーパーIBS222に代わる基肥の
比較試験を行った。その結果、BM スペシャル有機 280 お
よび果菜美 268 はスーパーIBS222 と同等の収量があり代
替可能と考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

イ 高品質安定多収品種の検索

(ア) 耐裂果性品種における多かん水管理の検討

担当者：小谷和宏・大豊航史

協力分担：なし

‘りんか 409’に代わる品種検索を目的として、耐裂果性に優れる‘麗月’と‘TTM-177’を少かん水と多かん水の管理で比較した。その結果、‘麗月’、‘TTM-177’は両品種とも多かん水管理で収量は増加する傾向だったが、収穫後半は土壌水分が過湿傾向に推移し、少かん水管理との平均1果重の差が縮まってしまったため、かん水量の再検討を要した。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(2) 中山間地における白ネギの安定・多収栽培技術の確立

ア 7月どり作型に適した栽培方法の検討

(ア) 育苗資材及び栽植本数が生育に及ぼす影響

担当者：大豊航史・小谷和宏

協力分担：なし

7月どり作型の確立を目的として、育苗資材及び栽植本数の検討を行った。その結果、CP2粒/穴は最も多収だったが、2L率が2割未満と非常に低く細物傾向だった。CP1.5粒/穴はLP×3粒/穴よりも2L率が高く収量性に優れており、栽植本数が同じ場合でも、ポット内の播種粒数が少ないほど初期生育が優れると考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) 播種時期が生育に及ぼす影響

担当者：大豊航史・小谷和宏

協力分担：なし

7月どり作型の確立を目的として、播種時期の検討を行った。その結果、LP303-10に3粒ずつ播種しベンチ育苗した場合、10月よりも12月に播種した方が初期生育に優れ収量性が良かったため、播種時期は12月が適していると考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

イ 作型別適品種の選定

(ア) 盆前どり

担当者：大豊航史・小谷和宏

協力分担：なし

本県中山間地域における白ネギ産地の生産性向上を目的

的として、盆前作型に適した品種の検討を行った。その結果、‘MKS-N60’、‘夏柱’は対照品種‘夏扇パワー’以上の収量であり本作型の適品種と考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) 9月どり

担当者：大豊航史・小谷和宏

協力分担：なし

本県中山間地域における白ネギ産地の生産性向上を目的として、9月どり作型に適した品種の検討を行った。その結果、‘MKS-N60’は対照品種‘夏扇パワー’より収量、品質に優れていたため、本作型の適品種と考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(ウ) 秋冬どり

担当者：大豊航史・小谷和宏

協力分担：なし

本県中山間地域における白ネギ産地の生産性向上を目的として、秋冬どり作型に適した品種の検討を行った。その結果、‘MKS-N60’、‘夏柱’、‘項羽一本太’、‘源翠’は対照品種‘関羽一本太’、‘夏扇4号’よりも収量性に優れていたため、本作型の適品種と考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

ウ 高品質多収技術の検討

(ア) 鶏ふん利用による化学肥料の使用量低減

担当者：大豊航史・小谷和宏

協力分担：なし

白ネギ栽培における化学肥料の使用削減を目的として、代替肥料として施肥の全量または追肥の全量に鶏ふんペレットを利用した。その結果、生育が慣行よりも緩慢となり細出来での収穫となったため、慣行以上の収量を得ることは難しいと考えられた。

〈本試験成績掲載印刷物：なし〉

(イ) 夏秋どり品種‘源翠’に適した施肥量の検討

担当者：大豊航史・小谷和宏

協力分担：なし

有望品種‘源翠’の肥大性向上を目的として、追肥の

施肥量の検討を行った。その結果、窒素成分で慣行の1.5倍～1.75倍程度に追肥量を増やすことで残存株率に影響がないまま肥大性を大きく向上させられ、慣行よりも収量を増加させることが可能だと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(ウ) 追肥時期の変更による生育への影響

担当者：大豊航史・小谷和宏

協力分担：なし

日野郡の秋冬ネギの施肥体系の改善を目的として、夏場の追肥時期の変更を行った。その結果、圃場の長期滞水状態により生育が悪化したため、追肥時期の変更による夏越し性および収量性に及ぼす影響は不明だった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(エ) 密植栽培による収量向上（予備試験）

担当者：大豊航史・小谷和宏

協力分担：なし

生産性、収量性の向上を目的として、慣行よりも密植にした場合の生育、収量性について検討した。その結果、CP303-5に3粒播種し栽植本数を慣行よりも増やした場合、夏越し性が悪化し、かつ肥大性が悪くなり細物比率が増加するため、実用的は低いと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(3) ブロッコリーの安定栽培技術の確立

ア 作型別適品種の選定

(ア) 6月どり

担当者：大豊航史・小谷和宏

協力分担：なし

本県中山間地域におけるブロッコリーの生産性向上を目的として、初夏どり作型に適した品種の検討を行った。その結果、6月上旬どり、下旬どりともに、花蕾品質で対照品種‘SK9-099’を上回る品種はなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(イ) 夏秋どり

担当者：大豊航史・小谷和宏

協力分担：なし

本県中山間地域におけるブロッコリーの生産性向上を

目的として、夏秋どり作型に適した品種の検討を行った。その結果、9月下旬どりは、花蕾品質で対照品種‘SK9-099’を上回る品種はなかった。10月中旬どりは、‘アーリーキャノン’が最も花蕾品質に優れており、本作型に適した品種だと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(4) 夏秋ピーマンの高品質安定多収栽培技術の確立

ア ピーマン斑点病に対する防除体系の検討

担当者：小谷和宏・大豊航史

協力分担：なし

斑点病に対する効果的な防除体系の確立を目的として、オリゼメート粒剤体系と低コスト体系の防除試験を行った。その結果、いずれも慣行防除体系と同等の効果はあるが、オリゼメート粒剤は薬害による初期収量の低下がみられたため、新たな体系として組み込むのは適さないと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

イ 施肥コスト削減

担当者：小谷和宏・大豊航史

協力分担：施肥コストの削減を目的として、基肥の畝内施肥を試験した。その結果、慣行の施肥基準とくらべても生育や収量への悪影響はみられず、ロング肥料を使うことで施肥コストだけではなく、追肥作業の省力化も可能なため、実用性が高いと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(5) 新規品目の栽培技術確立

ア 中山間地におけるトルコギキョウ9～10月収穫作型の適品種選定

担当者：大豊航史・小谷和宏

協力分担：なし

中山間地におけるトルコギキョウの秋出し栽培の普及を図ることを目的として、切花品質の優れた品種の検索を行った。その結果、‘ハピネスホワイト’（白）、‘コレゾブルー’（紫）、‘コレゾローサ’（ピンク）、‘オーブブルーピコティ’（紫覆輪）が適品種と考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

17. 鳥取の花き主要品目における安定・高品質生産技術の確立

(1) 切り花 (ストック)

ア 生育促進効果が高いEOD光照射と品質向上法の検討

(ア) オールダブル試験品種の検討 (スタンダード系)

担当者：神庭涼子・松崎弘佑

協力分担：東伯普及所、タキイ種苗 (株)

ストックの鑑別品種であるアイアンシリーズを対照品種として、スタンダード系のオールダブルおよびハイダブル品種において特性検討を行った。‘アーリーアローホワイト2’ および ‘BS1580’ が有望だと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(イ) オールダブル試験品種の検討 (スプレー系)

担当者：神庭涼子・松崎弘佑

協力分担：東伯普及所、タキイ種苗 (株)

スプレー系ストックのオールダブル品種について特性検討を行った結果、白色では ‘シャンテ EZ ホワイト’ が有望品種だと考えられた。黄色の ‘ムーンフェアリー’ は ‘スパークイエロー’ と比べて切り花長が短く、開花時期も大きく変わらないため、導入の必要性はないと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(ウ) オールダブル品種における収穫後の品質評価 (スタンダード品種)

担当者：神庭涼子・松崎弘佑

協力分担：なし

ストックのスタンダード系オールダブル白色品種において収穫後の品質評価を行った結果、11月の高温期に収穫したものでは、12月に収穫したものよりも品質が低下しやすい傾向があった。今年度の試験では、以前に現地導入された品種で問題となった収穫後の花卉の傷みは発生しなかったが、試験における収穫後の保存方法が現場手法と異なる可能性があるため、再度検討する必要があると考えられた。また、11月収穫における ‘ホワイトア

イアン’ とオールダブル品種との比較試験を行う必要があると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(エ) オールダブル品種における収穫後の品質評価 (スプレー品種)

担当者：神庭涼子・松崎弘佑

協力分担：なし

ストックのオールダブルスプレー系品種において収穫後の品質評価を行った結果、‘シャンテ EZ ホワイト’ は ‘ホワイトカルテット’ よりも水揚げが悪く観賞期間が短いため、有望品種ではないと考えられた。‘ES802’ は ‘ホワイトカルテット’ よりも観賞期間が長かったが、下位分枝から開花する株が多い傾向があり有望品種ではないと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(オ) PCa 処理と低日照条件が奇形花発生に及ぼす影響

担当者：神庭涼子・松崎弘佑

協力分担：なし

PCa (プロヘキサジオンカルシウム) 処理を行うストック栽培において、奇形花が発生しやすい条件を明らかにするため、花芽分化期前後の低日照条件における PCa 処理が奇形花発生に及ぼす影響について検討した。PCa 単独処理よりも遮光と PCa 処理を組み合わせることで奇形花が増加し、PCa 処理時期の低日照によって奇形花発生率が高まることが明らかになった。そのため、花芽分化期前後に曇天が続く場合や、日照条件の悪い圃場において PCa 処理を行う際には、奇形花増加による切り花の商品性低下に留意する必要があると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(カ) PCa 処理と高温が奇形花発生に及ぼす影響

担当者：神庭涼子・松崎弘佑

協力分担：なし

PCa 処理を行うストック栽培において、奇形花が発生しやすい条件を明らかにするため、PCa 処理時期の高温が奇形花発生に及ぼす影響について検討した。PCa 単独

処理よりもPCa 1 回目処理後の高温により奇形花が増加した。PCa 1 回目処理後の方が PCa 2 回目処理後よりも遭遇温度が高く、高温による奇形花増加に関しては、処理時期と程度のどちらの影響が大きいかは判然としなかった。今後はPCa 処理後の高温の程度および時期が奇形花発生に及ぼす影響についての検討が必要だと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(キ) 芯止め発生の要因と発生低下法の解明

担当者：松崎弘佑・神庭涼子

協力分担：なし

ストックの芯止め発生要因を明らかにするため、高温、遮光、多かん水、乾燥の条件をそれぞれ組み合わせた処理区を設定し、芯止め発生について調査したところ、顕著に芯止めが発生した処理区は無く、発生要因ははっきりしなかった。また芯止め発生株と正常株、芯止め発生圃場と正常圃場における植物体と土中のN、P、K、Ca、Mgの5要素を分析したが、顕著な差は無く、これら要素が芯止め発生に影響している可能性は低いと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(ク) 効果の高い花芽分化および開花促進手法の検討

担当者：松崎弘佑・神庭涼子

協力分担：なし

高温期におけるストックの花芽分化と開花促進を目的に、地植え栽培における効果が高い促進方法を検討した。ストックで効果が高い花芽分化および開花促進方法は、早期からのEOD-FRの長時間（6時間）照射であることが分かった。また、早生系品種は慣行品種と比較して開花時期が早かったことから、早生系品種を用いてEOD-FR照射を行うと、猛暑下において更なる早期出荷が期待できると考えられる。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(ケ) PCa 処理による奇形花発生を軽減する方法について（予備試験）

担当者：神庭涼子・松崎弘佑

協力分担：なし

ストックにおいて、PCa 処理後の高温による奇形花発生の軽減を目的にバイオスティミュラント資材であるSA（スキーボン・アグリ）を検討した結果、SAによる奇形花発生軽減効果は見られなかった。本試験では鉢上げ以降にSAを施用しており、本来の効果が発揮されなかった可能性があるため、植物体が小さいうちからの施用を検討する必要があると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

イ 遮光とFR照射による開花調節

(ア) 午前中のみ遮光による開花調節（予備試験）

担当者：神庭涼子・松崎弘佑

協力分担：なし

午前中のみ遮光条件におけるストックの開花抑制効果について検討した結果、遮光率50%の寒冷紗による発蕾後1か月間の処理では開花抑制効果がほとんどなく、午前中のみ遮光で開花抑制を行うには、遮光の強度および期間について検討する必要があると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

ウ 安定出荷につながる開花予測と品質保持技術の開発

(ア) 精度の高い開花予測技術の開発

担当者：松崎弘佑・神庭涼子

協力分担：なし

より早期からの開花日予測を目的に、花芽分化日を起点とした開花日予測を検証した。予測精度は低いものの、早期から開花時期を予測できることから、精度を必要としない手法で活用の可能性がある。

しかしながら、予測精度が低いことや気象条件や予測結果の年次変動を考慮し、継続検証していく必要があると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(イ) ストックD2出荷に対応した前々日収穫の効果的な前処理方法の検討

担当者：松崎弘佑・神庭涼子

協力分担：なし

D2 出荷条件における、ストックの前々日収穫で効果が
高い前処理条件および前処理剤を検討した。前処理剤は
4 剤を供試し、温度等の条件を変更して計 9 水準の処理
区を設定し、品質保持効果等について検討したところ、
最も効果が高い条件は前処理にオスバン、ブレイクスル
ーを使用した処理区となり、次いで水に浸けて 10℃の予
冷庫で保存した区となった。予冷庫がある生産者は 10℃
の予冷保存が有効と考えられ、予冷庫が無い生産者はオ
スバンが有効と考えられた。ブレイクスルーは効果が高
いものの、使用に農薬取締法の規制を受けるため、利用
方法等の検討が必要である。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(1) 切り花 (シンテッポウユリ)

ア 露地作型の高品質化と長期出荷体系の確立

(ア) 堆肥施用量の増量による施肥量の削減

a F₁オーガスタ EX

担当者：田邊雄太・神庭涼子

協力分担：なし

施用する堆肥量を増やすことで、元肥に投入する化学
肥料が削減可能か検討した。本試験の土壤条件では堆肥
を慣行施用して元肥の LP140 の施用量を慣行と比べて半
減させても定植後と 6 月下旬の葉色が低下するタイミン
グで追肥を行えば、慣行施肥と同等の切り花品質になる
ことが明らかになった。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

b F₁凜花 EX II

担当者：田邊雄太・神庭涼子

協力分担：なし

‘F₁凜花 EX II’ について ‘F₁オーガスタ EX’ と同様に、
堆肥を慣行施用して元肥の LP140 の施用量を慣行と比べ
て半減させても、定植後と 6 月下旬の葉色が低下するタ
イミングで追肥を行えば、慣行施肥と同等の切り花品質
になることが明らかになった。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(イ) 全農開発堆肥入り肥料による化 成肥料の削減

担当者：田邊雄太・神庭涼子

協力分担：なし

化学肥料の施用量削減を目的に、全農が開発した堆肥
入り肥料を用いて栽培試験を行った。全農堆肥肥料を用
いて慣行の窒素施用量の約 8 割の施肥を行えば、切り花
品質に問題がないことが明らかになった。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(ウ) 露地盆出荷作型に適した品種の検討

担当者：田邊雄太・神庭涼子

協力分担：なし

露地盆出荷作型に適した品種を明らかにするため、栽
培試験を行った。市場出荷を行う場合は、採花時期が 7
月下旬から 8 月上旬にまとまり、採花率が高く、輪付の
収穫本数が多い F₁オーガスタ EX’ が最も優れていると
考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(エ) 露地彼岸出荷作型に適した品種の検討

担当者：田邊雄太・神庭涼子

協力分担：なし

露地彼岸出荷作型に適した品種を明らかにするため、
栽培試験を行った。6 月 20 日定植した品種が老化苗
で、適期苗で定植した場合の採花時期と大きく異なると
考えられたため、彼岸作型に適した品種は明らかでなか
った。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

イ 秋冬出荷作型の採花率向上と高品質化

(ア) 直播き栽培の検討

担当者：田邊雄太・遠藤英

協力分担：なし

シンテッポウユリの栽培労力軽減策として、本圃への
直播き栽培を検討した。本試験の播種日および品種では、
切り花品質および採花率が低く実用化は難しいと考えら
れた。5 月 22 日播種は抽台率が低いため適していない。
5 月 1 日～15 日までの播種では早期抽台が多く、輪数が
少なかったため、品種の変更または栽植密度の変更をす
るなどして切り花品質および採花率を高めて輪数を増や

す必要がある。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(イ) スイカ後作におけるシンテッポウユリの減肥栽培

担当者：田邊雄太・遠藤英

協力分担：なし

スイカ作付け後のハウスにおいて、リン酸と加里の減肥が生育に及ぼす影響を明らかにするため、減肥栽培試験を行った。スイカ後作圃場はリン酸と加里の蓄積があり、リン酸と加里の施用量を減らしても切り花品質に問題がないことが明らかになったが、単年の試験結果であるため継続検討が必要である。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(ウ) 秋冬出荷作型に適した品種の検討

担当者：田邊雄太・遠藤英

協力分担：なし

秋冬出荷作型に適した品種を明らかにするため、品種試験を行った。採花率が高く、輪数が3輪程度である‘F₁凜花 EX II’が最も秋冬出荷作型に適していると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(エ) 試験場育種系統に適した栽培方法の検討

担当者：田邊雄太・遠藤英

協力分担：なし

試験場育種系統‘22L’に適した定植前苗冷蔵時間を明らかにするため、冷蔵時間を複数設定、栽培試験を行った。定植前苗冷蔵時間に関係なく‘22L’は‘F₁凜花 EX II’と比べて採花率が低いため、普及は難しいと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(オ) 試験場育種系統の現地適応性

担当者：田邊雄太・遠藤英

協力分担：大栄花き部会、東伯普及所

‘22L’の現地適応性を明らかにするため、生産者ハウス5か所で現地栽培試験を行った。多くの生産者において‘22L’の抽台率が‘F₁凜花 EX II’と比べて低いた

め、‘22L’の現地普及は難しいと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(カ) チェーンポットの種類が輪数に及ぼす影響の解明

担当者：田邊雄太・遠藤英

協力分担：なし

チェーンポットの種類が輪数に及ぼす影響を明らかにするため、慣行のCP303と比べて高さが高いCP304を用いて栽培試験を行った。CP304を用いるとCP303と比べて抽台が早まり、輪数が減少することが明らかになった。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(キ) 追肥が輪数に及ぼす影響の解明

担当者：田邊雄太・遠藤英

協力分担：なし

追肥が輪数に及ぼす影響を明らかにするため、肥効がコントロールしやすい速効性肥料の硫酸を用いて窒素投入量を増やした栽培試験を行った。慣行と比べて窒素成分の追肥を3倍以上に増やしても輪数は増えないことが明らかになった。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(ク) NK化成の追肥が輪数に及ぼす影響の解明(予備試験)

担当者：田邊雄太・遠藤英

協力分担：なし

リン酸減肥栽培を目的にNK化成を追肥に用いて栽培試験を行った。リン酸投入量を減らし、NK化成を追肥に用いても切り花品質に問題がないことが明らかになったが、単年の試験であり試験の反復もなかったため、継続試験が必要である。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(ケ) 育苗期後半の高温が抽台に及ぼす影響の解明

担当者：田邊雄太・遠藤英

協力分担：なし

育苗期後半の高温が抽台率に及ぼす影響について検討した。定植前1週間間に高温に遭遇しても抽台率は低下しないことが明らかになった。しかし、単年の試験で

あるため継続試験が必要である。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(1) 切り花（アスター）

ア 秋出荷マイクロアスターの品質向上と開花期調節に効果的な光照射法の検討

(ア) 発芽率向上手法の検討

担当者：松崎弘佑・神庭涼子

協力分担：なし

近年、秋作のアスターで発芽不良が度々発生することから、発芽率を向上させる手法について検討を行った。その結果、アスターの発芽には温度、播種深度、土壌水分の3条件が影響しており、強遮光による降温処理、極浅い播種深度、約30%程度の播種時土壌水分、以上3点が発芽率向上に有効であると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(イ) アスターにおけるチェーンポット栽培の実証

担当者：松崎弘佑・神庭涼子

協力分担：なし

高温期に播種が必要となる抑制アスターの発芽率低下対策のため、チェーンポット栽培における品質を検証した。チェーンポット栽培でも高品質のアスター生産が可能であり、高温期における発芽率低下対策の一選択肢になると考えられた。一方で大輪系アスターでは再検討が必要である。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

イ 大輪系アスターの栽培方法検討

(ア) 大輪系アスターの品種検討

担当者：松崎弘佑・神庭涼子

協力分担：なし

近年現地導入された大輪系アスターについて、本県に適した品種を見出すため、複数のシリーズを用いて品種検討を行った。10品種を供試したところ、うち4品種で収穫率が高く、導入品種として有望であった。今後は当該品種について電照期間や遮光方法等の検討を行い、品質向上を図っていく必要がある。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(イ) 大輪系アスターのチップバーン軽減手法の検討

担当者：松崎弘佑・神庭涼子

協力分担：なし

葉焼け（チップバーン）が多く発生する大輪系アスターについて、焼けの軽減に効果があるとされるカルシウム剤の効果的な散布頻度を検証した。カルシウム剤の散布回数を無散布、週1回散布、週2回散布と設定し、散布回数を増やすことで焼けが若干軽減される傾向がみられたが、全体的に焼けが多発したため、効果が判然としなかった。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(ウ) 電照を行う時間帯と電照時間が大輪系アスターの生育と品質に及ぼす影響

担当者：松崎弘佑・神庭涼子

協力分担：なし

大輪系アスターの夜間電照の方式について、EODと暗期中断でどちらが高い品質向上効果があるか検証した。EODの方が花芽分化促進効果が高く節数が少なくなり、暗期中断区で草丈が高くなる傾向がみられた。しかし、猛暑の影響による生育抑制が生じた可能性が考えられ、再検証が必要である。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(エ) 大輪系アスターの露芯花発生低減手法の検討

担当者：松崎弘佑・神庭涼子

協力分担：なし

大輪系アスターは品種によって花卉の中心部分が露出する「露芯花」が発生しやすく、商品価値を落とすことから、「露芯花」の発生低減手法を検討した。猛暑下において長期間強遮光を行ったところ、露芯花の発生低減と草丈伸長等の品質向上が示唆された。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(1) 切り花（ハボタン）

ア 高品質な切り花ハボタン栽培の確立

(ア) 播種時期および栽植密度の検討

担当者：田邊雄太、遠藤英

協力分担：なし

市場から要望のあった2品種について、適した播種時期および栽植密度を明らかにするため栽培試験を行った。本年のような平均気温が平年を大きく上回る気象条件下では、7月16日～25日播種で60cm以上の上物となる切花長を確保することができ、栽植密度を株間条間12cmの2株植えとすることで、より長い切花を得られることが明らかになった。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(イ) シンテッポウユリ栽培後圃場における無施肥栽培の検討

担当者：田邊雄太、遠藤英

協力分担：なし

盆出荷作型シンテッポウユリ栽培後の圃場において、無施肥でのハボタン栽培を検証した。シンテッポウユリ栽培後の圃場に無施肥でハボタンを定植しても、高品質の切り花が収穫できることが明らかになったがシンテッポウユリ栽培後の圃場の肥料分は年によって異なるため、実用性については複数年で評価する必要がある。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(2) 花壇苗

ア EOD 光照射+EOD 加(保温)+わい化剤を組み合わせた早春出荷法の確立

担当者：遠藤英・神庭涼子

協力分担：なし

花壇苗の早春出荷作型において、EOD 光照射+EOD 保温(夜間密閉-短時間変温処理)にわい化剤を組合せることにより、アリッサム、インパチェンス、ダイアンサス、バーベナ、ペゴニア、ペチュニアで、栽培時の加温温度を慣行より下げても、到花日数および品質面で同等に栽培ができる可能性が示唆された。ただし、本年度は栽培期間中が極端な暖冬傾向であったことに加え、各保温処理の設定温度を常に保てているわけではないため、年次変動も踏まえて再検証が必要と考えられた。キンギョソウにおいては、草丈を抑制するためにわい化剤の濃度、使用回数など、より詳細な検討が必要と考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

イ 高温期における安定・高品質生産技術の確立

(ア) サルビアにおけるハウス降温管理の検討

担当者：遠藤英・神庭涼子

協力分担：なし

高温期の成品率を向上させるために、寒冷紗の設置方法が生育に及ぼす影響について検討した。7月上旬播種で、気温が平年よりかなり高い猛暑の気象条件下でのサルビア栽培に効果的な遮光処理方法は、活着から10日間まで外側2重遮光し、その後は収穫まで外側1重遮光の組み合わせ、または、収穫まで外側1重遮光に加えて簡易細霧処理を行う方法だと考えられた。外側1重遮光に簡易細霧処理を加えると、2重遮光と同等のハウス降温効果がみられたことから、収穫までの2重遮光処理も効果的な遮光処理方法として期待されるが、日照量との関係も含めて検討する必要がある。今後は降温効果と日照量の影響と年次変動について検討が必要である。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(イ) サルビアにおける苗サイズの検討

担当者：遠藤英・神庭涼子

協力分担：なし

高温期の成品率を向上させるために、サルビアの苗サイズの違いが高温期における生育に及ぼす影響について検討した。7月上旬播種作型では、162穴の苗が優れていたが、苗生産コスト等の問題で現実的でなく、苗サイズだけでは近年の猛暑に対応するのは難しいと考えられた。しかし、よりコストの低い406穴等で、苗のばらつきなどが開花時の苗品質に影響を及ぼした可能性があることから、再度の検証が必要と考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(ウ) サルビアにおける栽培用土の検討

担当者：遠藤英・神庭涼子

協力分担：なし

成品率向上を目的に、7月上旬播種作型において鉢上げ後の栽培用土の違いがサルビアの生育に及ぼす影響について検討した。開花時の苗品質に大きな差はなかったが、障害株の発生割合および栽培管理上の点などから、

ポットミックスに比べピートミックスがサルビアの栽培用土として優れていると考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(エ) パンジーにおけるハウス降温管理の検討

担当者：遠藤英・神庭涼子

協力分担：なし

効果的な寒冷紗設置方法確立のために、寒冷紗の設置方法が生育に及ぼす影響について検討した。7月下旬播種で、気温が平年よりかなり高い猛暑の気象条件下でのパンジー栽培に効果的な遮光処理方法は、活着から10日間まで外側1重遮光処理が良いと考えられた。設置や取り外し等の労力はかかるが、活着までは外側2重遮光、その後は活着10日間までを1重遮光の組み合わせ、または、外側1重遮光に加えて簡易細霧処理を行うことで、さらに障害株の発生軽減が期待される。今回は単年度試験結果のため、年次変動について確認が必要である。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(オ) パンジーにおけるセルトレイ苗冷蔵処理の検討

担当者：遠藤英・神庭涼子

協力分担：なし

高温期の成品率向上を目的に、冷蔵処理が高温期におけるパンジーの生育に及ぼす影響について検討した。3週間以上の冷蔵処理により、無処理の間伸びした成苗に比べ、締まったコンパクトな成苗品質となったが、開花日で冷蔵処理による品質向上効果がみられなかった。これは2週間冷蔵処理苗が大きかったことなど苗の大きさによる影響の可能性が考えられた。また、障害株発生割合で冷蔵処理と無処理区で大きな差がみられなかったのは、寒冷紗を収穫まで被覆していたことによる影響の可能性が考えられた。よって再度の検証が必要と考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(3) シバ

ア 生理障害抑制法の確立

(ア) 土壌改良剤による地下部生育促進の検討

担当者：遠藤英・田邊雄太

協力分担：なし

生理障害対策の基礎資料とするため、土壌改良剤施用が地下部生育促進に及ぼす影響を検討した。在来ノシバでは、ピートモス30%および15%、もみがら燻炭30%および15%処理で、播き芝から2年経過後も根茎発達を阻害せず、地下部生育促進効果がみられた。グリーンバードJでは、1年4か月経過時点で、いずれの土壌改良剤処理区においても、根茎等発達の阻害がなく、地下部生育促進効果がみられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

イ 秋冬期から夏期にバミューダグラス等の生育を旺盛にする保温および光照射法の検討

(ア) 保温および光照射がバミューダグラス等の生育に及ぼす影響

担当者：遠藤英・田邊雄太

協力分担：株式会社チュウブ

秋冬期から夏期におけるバミューダグラスの生育促進を目的に、保温と光照射について検討したところ、ティフブランドおよびティタフでは、EOD6hの光照射に6月いっぱいの不織布設置、ティフウェイでは、終夜光照射に6月いっぱいの不織布設置の併用が葉部増加効果およびコスト面、障害発生リスクの低さから有効だと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

18. 環境に配慮した持続可能な農業拡大推進事業

(1) 化学農薬・肥料の使用削減、廃プラスチックの排出量削減

ア 花壇苗における生分解性ポットの利用方法の検討

(ア) ペチュニアの定植前苗および定植後の生育に及ぼす影響

担当者：神庭涼子・遠藤英

協力分担：とっとり花回廊

環境負荷が少ない生産資材が花壇苗生育に及ぼす影

響を明らかにするため、ペチュニアを用いて生分解性ポットおよびポリポットによる育苗、本圃への定植を行い、生育、品質および生分解性ポットの分解状況について検討した。生分解性ポットでは黒ポリポットによる育苗と比べて生育がやや抑制されていたが、商品性低下にはつながらなかった。定植後の生育は定植後1か月頃までは黒ポリポットと比べて生分解性ポットの株幅が小さかったが、その後は差がみられなくなった。また、本試験で供試した生分解性ポットは、平均地温が26℃以上となる場合の使用は難しいと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(イ) パンジーの定植前苗および定植後の生育に及ぼす影響

担当者：神庭涼子・遠藤英

協力分担：とっとり花回廊

環境負荷が少ない生産資材が花壇苗生育に及ぼす影響を明らかにするため、パンジーを用いて生分解性ポットおよびポリポットによる育苗、本圃への定植を行い、生育、品質および生分解性ポットの分解状況について検討した。黒ポリポットと生分解性ポットで育苗時と定植後の生育に大きな差は見られなかったが、本試験の生分解性ポットは鉢上げ後約1か月で分解しているものが多く、高温期に1か月以上の育苗期間を要する花壇苗での使用は難しいと考えられた。栽培温度等の違いにより異なる結果となる可能性があるため、低温期の使用についても検討が必要と考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(2) ポータブルバッテリーを活用した簡易夜間電照技術の開発

ア ポータブルバッテリーと太陽光パネルを組み合わせた簡易電照栽培技術の確立

担当者：松崎弘佑・神庭涼子

協力分担：なし

ポータブルバッテリーと太陽光パネルを組み合わせた簡易電照技術を実証した。梅雨時期等の晴れが少ない時期であっても期間の半分以上は太陽光パネルのみで充電

が可能であり、日照が多い時期はほぼ全ての電力を太陽光パネルで発電可能になると考えられ、省力的な簡易電照技術として実現が期待される。より大容量のバッテリーと太陽光パネルを使用することで、ハウス数棟分の電照も可能となり、CO₂排出量の削減がさらに期待される。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

19. 花ふれ愛事業

(1) ミニフラワーガーデン設置事業

ア 県中部施設への花壇苗配布

担当者：神庭涼子

協力分担：生産振興課、農業大学校

中部地区の県関係施設（東伯普及所等）に花壇やプランターを設置し、花きのある環境を作るため花壇苗を配布した。配布は夏季と秋季の2回。夏季は9cmポットで育成したジニアを約300ポット配布した。秋季は9cmポットで育成したサルビアを約300ポット配布した。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

20. 市場競争力のある鳥取オンリーワン園芸新品種の育成

(1) スイカ耐病性優良台木の育成と実用化

ア スイカつる割病耐病性系統の選抜及び形質固定

担当者：麻木聖也・井上和

協力分担：なし

世界スイカ遺伝資源銀行に保管されているスイカ種子を活用して、土壌病害耐病性のスイカ台木を育成する。ここでは交雑系統のスイカつる割病に対する耐病性選抜および固定を図った。その結果、検定15系統のうち14系統について、発病度の低い個体を選抜し、自殖種子を得た。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

イ 倉吉極実西瓜における共台新品種‘台じょうぶ’の実用性アンケート調査

担当者：麻木聖也・白岩裕隆

協力分担：倉吉農業改良普及所

共台新品種‘台じょうぶ’の現地拡大試験を実施し、9名の農家に栽培終了後アンケート調査を行った。実用性の評価の結果、「やや高い」、「高い」が6名、「同等」が2名、「やや低い」が1名であった。総合的に倉吉西瓜生産部会から高い評価が得られ、極実西瓜の台木として‘台じょうぶ’は実用性が高いと考えられた。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(2) イチゴ新品種の育成と実用化

ア 有望系統のイチゴ3、4次選抜

担当者：麻木聖也・井上和・白岩裕隆

協力分担：なし

鳥取県オリジナル品種‘とっておき’の課題（春先の果実糖度、果皮硬度の低下）を克服した新たな品種育成に向け、果実糖度、果皮硬度が安定し、鳥取の寡日照条件下でも多収で食味に優れた系統を選抜する。ここでは2～3年間の食味調査を経て選抜された5系統について、収量及び食味の調査を実施した結果、収量は低かったが、食味、果皮硬度に優れた‘X2105-2’を選抜した。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(3) ナガイモ新品種の育成

ア 実用性評価

(ア) 縦割れ症多発ほ場における‘鳥取1u61’の縦割れ症発生程度の調査

担当者：田中需・鳥飼周平・石河利彦

協力分担：なし

‘鳥取1u61’の縦割れ症発生状況を調査するため、‘ねばりっ娘’を対照に縦割れ症多発ほ場へと定植したところ、芋の長さや太さには差が見られたが、芋の重さは同等程度であった。また、‘鳥取1u61’の方が‘ねばりっ娘’よりも縦割れ症の発生が少なかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(4) ユリ新品種の開発

ア 秋冬出荷栽培に適したシンテッポウ

ユリの開発

(ア) 選抜系統の形質の改良

担当者：田邊雄太・遠藤英

協力分担：なし

短日期の栽培となるシンテッポウユリ秋冬出荷栽培で、①抽台率が高く、②年内採花が可能で、③輪数が多いことを選抜条件として、品種育成を行った。令和5年度に交配して得られた各系統を調査した結果、採花率の高い系統の中で輪数が多い‘24G’を有望系統とし、優良個体の交配を行った。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

イ ユリ小球開花性新品種の開発

(ア) ‘鳥鱗1号’の秋出荷栽培技術の確立

担当者：神庭涼子・松崎弘佑

協力分担：なし

‘鳥鱗1号’において、摘芯処理により球根が肥大した抽台株が鱗片繁殖母球として利用できるか明らかにするため、摘芯株の抽台率について調査した。加えて露地球根栽培で抽台した株の連続抽台性について検討した。摘芯株を用いて鱗片繁殖を行っても、抽台率および切り花品質に問題はなく、摘芯株の球根は鱗片繁殖母球として利用できることが明らかになった。また、露地球根栽培の抽台球を用いても抽台率は低かったが、昨年度の40%から向上した。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(イ) ‘鳥鱗1号’の抽台率を高める育苗方法の検討

担当者：神庭涼子・松崎弘佑

協力分担：なし

‘鳥鱗1号’において、育苗時の液肥施用量が抽台率に及ぼす影響を検討した。育苗期の液肥を減らしても抽台率に差はなかったが、本年度は他要因により苗が充実したため、育苗期の液肥施用量と抽台率との関係は判然としなかった。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

(5) アジサイ新品種の開発

ア 八重咲き新品種の育成

担当者：田邊雄太・遠藤英

協力分担：なし

有利販売につながる鳥取県オリジナルのアジサイ品種

を育成するため、交配および育成を行った。令和5年交配株を2系統、令和6年交配系統を16系統作出した。

〈本試験成績登載印刷物：6〉

〈農林水産試験場臨時的調査研究事業〉

21. 臨時的調査研究

(1) カキ9倍体完全甘ガキ品種育成のための12倍体中間母本の作出

担当者：稲本俊彦・長谷川諒・井戸亮史

協力分担：なし

9倍体完全甘ガキ育成のための中間母本として12倍体完全甘ガキを作出することに加え、倍数性育種の実験手法を習得することを目的として、既報と同様の方法で胚培養を行ったが、全ての胚が枯死したため、コルヒチン処理には至らなかった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

(2) スイカ各種台木における土壤病害ホモプシス根腐病の耐病性検定（ポット試験）

担当者：麻木聖也・井上和・白岩裕隆

協力分担：環境研究室

スイカ土壤病害ホモプシス根腐病対策の一助とするため、各種台木の実生におけるホモプシス根腐病の耐病性検定のポット（7.5cm径）試験（試験方法の確立を含め）を実施した。その結果、ホモプシス根腐病に対してカボチャ台の2品種（‘Gパワー’、‘かがやき’）とユウガオ台の‘強者’が同程度の高い耐病性を示し、次いで‘かちどき2号’、‘台じょうぶ’の順であった。

〈本試験成績登載印刷物：なし〉

Ⅲ 研究業績一覽

1 試験成績登載印刷物

- | | | |
|----|-------------------|--|
| 1 | (農研機構)果樹茶業研究部門 | (2024)令和6年度落葉果樹試験研究成績概要集(病害関係) |
| 2 | (農研機構)果樹茶業研究部門 | (2024)令和6年度落葉果樹試験研究成績概要集(虫害関係) |
| 3 | (農研機構)果樹茶業研究部門 | (2024)令和6年度落葉果樹試験研究成績概要集(土壤肥料関係) |
| 4 | (農研機構)果樹茶業研究部門 | (2024)令和6年度果樹系統適応性・特性検定試験成績検討会資料(落葉果樹) |
| 5 | (農研機構)野菜花き研究部門 | (2024)令和6年度野菜育成系統評価試験成績概要 |
| 6 | (農研機構)野菜花き研究部門 | (2024)令和6年度花き試験研究成績概要集 |
| 7 | (農研機構)西日本農業研究センター | (2024)令和6年度近畿中国四国農業試験研究成績・計画概要集 病害 |
| 8 | (農研機構)西日本農業研究センター | (2024)令和6年度近畿中国四国農業試験研究成績・計画概要集 虫害 |
| 9 | (農研機構)西日本農業研究センター | (2024)令和6年度近畿中国四国農業試験研究成績・計画概要集 土壤 |
| 10 | (農研機構)西日本農業研究センター | (2024)令和6年度近畿中国四国農業試験研究成績・計画概要集 生物学 |
| 11 | 日本植物防疫協会 | (2024)令和6年度新農薬実用化試験成績(落葉果樹)第58集 |
| 12 | 日本植物防疫協会 | (2024)令和6年度新農薬実用化試験成績VI近畿中国地域(稲・野菜等)病害防除 |
| 13 | 日本植物防疫協会 | (2024)令和6年度新農薬実用化試験成績VI近畿中国地域(稲・野菜等)虫害防除 |
| 14 | 日本植物調節剤研究協会 | (2024)令和6年度落葉果樹関係除草剤・生育調節剤試験成績集録 |
| 15 | 日本植物調節剤研究協会 | (2024)令和6年度秋冬作野菜・花き関係除草剤・生育調節剤試験成績集録 |
| 16 | 日本植物調節剤研究協会 | (2024)令和6年度春夏作野菜・花き関係除草剤・生育調節剤試験成績集録 |
| 17 | 日本植物調節剤研究協会 | (2024)令和6年度秋冬作芝生関係除草剤・生育調節剤試験成績集録 |
| 18 | 日本植物調節剤研究協会 | (2024)令和6年度春夏作芝生関係除草剤・生育調節剤試験成績集録 |
| 19 | 鳥取県病害虫防除所 | (2024)令和6年度農作物有害動物発生予察事業年報 |
| 20 | (農研機構)果樹茶業研究部門 | (2024)令和6年度寒冷地果樹研究会資料(土壤肥料関係) |

2. 普及に移した新しい技術

(1) 鳥取県農林水産部編 新しい技術 第62集(2024)

I 普及に移す新しい技術

II 新しい品種・種畜

III 参考となる情報・成果

- ① 新梢誘引による‘新甘泉’の日焼け果軽減対策:大西 優、川上和博、河原 拓、井戸亮史
- ② 果実袋による‘輝太郎’の外観品質向上の検討:亀岡靖崇、稲本俊彦、井戸亮史、石河利彦
- ③ 台風等による潮害が翌年の‘新甘泉’の花芽生育に及ぼす影響:井戸亮史、河原拓、門河紘希
- ④ イチゴ促成栽培における生分解性不織布ポットの利用:谷口美保、荒木佑哉、白岩裕隆
- ⑤ 抑制ミニトマトにおける強遮光によるつやなし果の軽減:浅尾悠介、井上 和、白岩裕隆
- ⑥ 黒皮種なしスイカ「ガブリコ」における遅摘果による果実肥大及び空洞果の抑制:井上 和、川口亜弓、白岩裕隆
- ⑦ シロイチモジヨトウに対する各種殺虫剤の殺虫効果の検討:鈴木祐、米村善栄
- ⑧ 夏秋トマト‘りんか409’の果梗捻枝による放射状裂果の軽減:小谷和宏、大豊航史、前田真吾
- ⑨ 準高冷地のトルコギキョウ9~10月どり作型における適品種:大豊航史、前田真吾、小谷和宏
- ⑩ ストックD2出荷に対応した前々日収穫の効果的な前処理方法の検討:松崎弘佑、遠藤 英
- ⑪ 小球開花性ユリ‘鳥鱗1号’の効果的な母球増殖手法:神庭涼子、松崎弘佑、遠藤 英

(2) 近中四農研センター編 近中四農研成果情報 なし

3. 学会の口頭発表等 なし

- ① 山田高之¹・米村善栄¹ (1鳥取園試) (2024). ニホンナシ果実における数種の殺菌剤のナシ黒星病に対する予防効果と亜リン酸資材の影響. 令和6年度日本植物病理学会大会.
- ② 川田久美子¹・山本玲菜²・川端杏衣里³・竹中春人¹・米村善栄¹・木戸一孝³(1鳥取県園芸試験場・2鳥取県西部農業改良普及所・3鳥取大農) (2024). ネギ軟腐病

菌 *Dickeya fangzhongdai* (Df) の薬剤感受性と PCR による Df 検出方法の検討. 令和 6 年度日本植物病理学会大会.

4. 学会誌・大会誌・主要農業誌に発表した課題

- ① 麻木聖也・浅尾悠介・森本康史・白岩裕隆 (2024) スイカ共台新品種 ‘台じょうぶ’ の育成, 園芸学会令和 6 年度秋季大会 (令和 6 年 11 月 3～5 日、琉球大学千原キャンパス)
- ② 山田高之 (2024). グラビア・果樹病害の最近の動向と防除策 (7)、鳥取県における日本ナシ病害の発生動向と防除対策、果実日本、79 (7): 12-14.
- ③ 柳凜太郎. 「水を溜めすぎない品種」の遅植えでネギを夏越し. 現代農業. 2025 年 2 月号: P62-65.

5. 品種登録・特許

- (1) 品種登録申請 なし

IV 総務報告

1 研修生受け入れ

なし

2 来場利用者

月	区分	本場		砂丘研		弓浜分場		河原		日南		合計	
		件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数
4	県内	30	267	8	31	36	58	8	10	29	47	111	413
	県外	3	6	1	1	3	5	0	0	5	5	12	17
	計	33	273	9	32	39	63	8	10	34	52	123	430
5	県内	33	108	8	11	49	79	13	73	9	18	112	289
	県外	2	9	0	0	3	6	1	1	1	2	7	18
	計	35	117	8	11	52	85	14	74	10	20	119	307
6	県内	37	324	4	4	50	97	22	77	16	21	129	523
	県外	2	43	1	1	6	15	1	2	4	5	14	66
	計	39	367	5	5	56	112	23	79	20	26	143	589
7	県内	51	466	4	14	33	55	21	47	9	63	118	645
	県外	3	40	0	0	3	4	1	12	4	4	11	60
	計	54	506	4	14	36	59	22	59	13	67	129	705
8	県内	30	377	2	7	31	83	6	13	15	16	84	496
	県外	1	1	1	1	3	3	0	0	0	0	5	5
	計	31	378	3	8	34	86	6	13	15	16	89	501
9	県内	29	437	7	14	41	103	6	30	33	67	116	651
	県外	2	4	0	0	6	6	0	0	5	6	13	16
	計	31	441	7	14	47	109	6	30	38	73	129	667
10	県内	46	765	3	3	33	101	12	20	19	37	113	926
	県外	2	5	0	0	6	17	0	0	0	0	8	22
	計	48	770	3	3	39	118	12	20	19	37	121	948
11	県内	37	437	1	1	21	52	13	39	19	32	91	561
	県外	11	11	0	0	6	17	1	1	0	0	18	29
	計	48	448	1	1	27	69	14	40	19	32	109	590
12	県内	43	331	3	3	13	31	19	53	10	12	88	430
	県外	3	35	0	0	1	1	0	0	1	1	5	37
	計	46	366	3	3	14	32	19	53	11	13	93	467
1	県内	52	370	0	0	21	30	22	29	0	0	95	429
	県外	0	0	0	0	2	2	0	0	14	16	16	18
	計	52	370	0	0	23	32	22	29	14	16	111	447
2	県内	44	302	2	2	12	23	16	60	0	0	74	387
	県外	1	1	0	0	6	10	0	0	10	14	17	25
	計	45	303	2	2	18	33	16	60	10	14	91	412
3	県内	35	489	1	1	31	50	18	44	1	1	86	585
	県外	5	64	0	0	6	11	0	0	6	13	17	88
	計	40	553	1	1	37	61	18	44	7	14	103	673
合計	県内	467	4,673	43	91	371	762	176	495	160	314	1,217	6,335
	県外	35	219	3	3	51	97	4	16	50	66	143	401
	計	502	4892	46	94	422	859	180	511	210	380	1,360	6,736

3 土地および建物

(1) 土地

単位：㎡

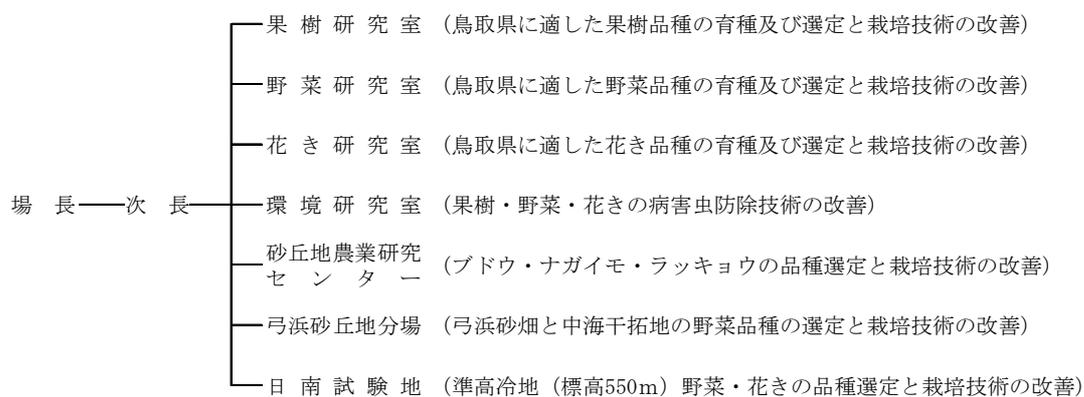
区 分	本 場				弓 浜 砂 丘 地 分 場	砂 丘 地 農 業 研 究 セ ン タ ー	日 南 試 験 地	旧 河 原 試 験 地	倉 吉 ほ 場	合 計
	樹園地	黒ぼく畑	砂畑	計						
ほ 場	81,250.00	27,293.00	9,000.00	117,543.00	19,983.00	5,578.00	6,500.00	0.00	6,087.04	155,691.04
建 物 用 地	14,450.00	17,523.00	1,950.00	33,923.00	850.00	376.00	1,400.00	300.00	13,395.00	50,244.00
そ の 他	22,077.00	26,576.91	4,496.00	53,149.91	8,185.52	3,900.33	12,514.09	1,245.11	6,309.00	85,303.96
計	117,777.00	71,392.91	15,446.00	204,615.91	29,018.52	9,854.33	20,414.09	1,545.11	25,791.04	291,239.00

(2) 建物

単位：㎡

区 分	樹園地	砂丘地農業研究センター	弓浜砂丘地分場	日南試験地	旧河原試験地	旧生物工学研究室	合 計
本 館	1,791.00	376.79	300.90	214.65	235.40	754.26	3,673.00
附 属 建 物	3,678.84	60.00	548.57	189.47	177.97	1,324.23	5,979.08
計	5,469.84	436.79	849.47	404.12	413.37	2,078.49	9,652.08

4 機構と業務



5 職員の状況（令和7年3月末日現在）

（1）定員及び現員

職 種 別	定 員	現 員	備 考
事務職員	1	1	
技術職員	35	35	
現業職員	6	6	
計	42	42	

（2）職員構成

<p>場 長(技)池田隆政 次長兼室長(技)米村善栄 課長補佐(事)藤田智子</p> <p>【果樹研究室】 室 長(技)井戸亮史 主任研究員(〃)川上和博 研 究 員(〃)長谷川 諒 〃 (〃)大西 優 〃 (〃)稲本俊彦 〃 (〃)亀岡靖崇 〃 (〃)谷脇恵吾 農林技師(〃)遠藤貴裕 現業職長(〃)田中啓介 〃 (〃)中嶋 吏</p> <p>【野菜研究室】 室 長(技)白岩裕隆 主任研究員(〃)谷口美保 研 究 員(〃)麻木聖也 〃 (〃)井上 和 〃 (〃)荒木佑哉 現業職長(〃)吉田 茂</p>	<p>【花き研究室】 室 長(技)遠藤 英 研 究 員(〃)松崎弘佑 〃 (〃)神庭涼子 〃 (〃)田邊雄太</p> <p>【環境研究室】 次長兼室長(技)米村善栄 主任研究員(〃)戸板重則 〃 (〃)川田久美子 研 究 員(〃)岩田侑香里 〃 (〃)山田高之 〃 (〃)鈴木 祐 〃 (〃)竹中春人 農業技手(〃)吉田孝也</p>	<p>【砂丘地農業研究センター】 所 長(技)石河利彦 主任研究員(〃)森本隆義 研 究 員(〃)大津真士 〃 (〃)田中 需 〃 (〃)鳥飼周平 現業職長(〃)渡辺 寛</p> <p>【弓浜砂丘地分場】 分 場 長(技)井上 浩 研 究 員(〃)岡崎悠希 〃 (〃)柳凜太郎 現業職長(〃)森 茂彦</p> <p>【日南試験地】 試験地長(技)小谷和宏 研 究 員(〃)大豊航史</p>
---	--	---

(3) 職員の異動

発令日	辞令	職名	現員	異動の内容
R6. 4. 1	転出	場長 課長補佐 試験地長 所長 主任研究員 研究員 研究員 研究員 研究員	八田辰也 田中瑞男 石河利彦 久重祐彦 河原 拓 前田真吾 古井佑樹 浅尾悠介 門河紘希	農業大学校（再任用）へ 退職 砂丘地農業研究センターへ 八頭農業改良普及所へ 生産振興課へ 鳥獣対策センターへ 鳥取農業改良普及所へ 大山普及支所へ 東部農林事務所へ
	転入	場長 課長補佐 所長 主任研究員 主任研究員 研究員 研究員 研究員 研究員 研究員	池田隆政 藤田智子 石河利彦 川上和博 戸板重則 大豊航史 亀岡靖崇 荒木佑哉 竹中春人 谷脇恵吾	東伯農業改良普及所より 倉吉保健所より 河原試験地より 鳥取農業改良普及所より 倉吉農業改良普及所より 倉吉農業改良普及所より 大山普及支所より 新規採用 新規採用 新規採用
R6. 6. 17	転出	次長	龜田修二	倉吉農業改良普及所へ
	兼務	次長	米村善栄	室長

6 予算状況

(1) 園芸試験場費

(単位：千円)

事業名	令和6年度	令和5年度		財源内訳（6年度）		
	当初予算額	当初予算額	最終予算額	国補	その他	一般財源
管理運営費	96,666	75,624	70,560	0	0	96,666
試験研究費	44,780	43,897	65,561	0	5,018	39,762
合計	141,446	119,521	136,121	0	5,018	136,428

(2) その他の執行予算

(単位：千円)

予算科目	事業名	令和6年度 当初予算額	備考
肥料植物防疫費	病虫害防除所運営費外	3,025	
農業総務費	先進的農林水産試験研究推進強化事業等	2,356	
農作物対策費	生産振興推進事業等	600	

(3) 主な備品購入

(単位：千円)

備品名	型式・規格	金額	担当
土壌水分ロガーシステム	センシズ テンシオメモリ HD5 日置電機 データコレクタ LR5092	396	弓浜
人工気象器	PHC MLR-352H-PJ	1,760	環境
自動灌水装置	自動灌水装置一式	199	砂丘
位相差顕微鏡	ニコン ECLIPSE Ci-L plus	967	環境
大容量爪付きバケツ	ヤンマーアグリ HBKC1540S	198	日南
低温インキュベータ	PHC MIR-254-PJ	451	花き
ドラフトチャンバー(酸分解型)	ダルトン MFN15MM-KSAAB-AOT	7,700	野菜

V 令和6年 半旬別気象表

観測地点：鳥取県園芸試験場（東伯郡北栄町由良宿 2048）

平年値：昭和52年～令和5年

月	半旬	気 温 (°C)					降水量 (mm)		日照時間 (h)		
		平 均		最 高		最 低		本年	平年	本年	平年
		本年	平年	本年	平年	本年	平年				
1月	1	8.0	4.9	12.5	8.5	3.5	1.6	15.5	25.9	17.2	12.5
	2	5.8	4.8	9.5	8.9	2.3	1.3	14.0	24.6	10.2	14.7
	3	6.3	4.3	10.5	8.1	2.3	0.9	20.0	28.8	16.6	13.6
	4	7.2	4.2	10.0	8.1	3.4	0.9	44.5	24.4	6.6	13.8
	5	2.8	3.7	5.6	7.5	0.6	0.4	37.0	26.6	7.5	13.3
	6	3.5	3.9	9.3	7.9	0.1	0.5	44.0	27.2	15.7	18.4
平均 (合計)		5.5	9.6	9.6	8.2	2.0	0.9	186.0	157.6	76.8	86.3
2月	1	4.7	3.5	7.6	7.6	2.6	0.0	43.0	20.6	6.1	14.9
	2	4.2	3.9	7.7	8.5	1.4	0.0	24.5	22.9	9.2	17.2
	3	9.3	4.9	14.9	9.6	2.4	0.8	22.5	20.1	29.0	16.7
	4	9.7	4.2	14.4	8.8	4.6	0.2	18.0	24.8	20.2	17.3
	5	6.1	5.0	7.6	9.3	4.3	1.1	47.5	17.8	3.4	18.6
	6	5.5	5.4	8.7	10.2	2.0	0.8	25.0	11.2	5.5	13.5
平均 (合計)		6.6	4.5	10.2	9.0	2.9	0.5	173.0	117.5	70.5	98.1
3月	1	5.2	5.9	8.4	10.6	1.5	1.5	40.5	23.2	15.7	20.2
	2	5.3	6.5	8.1	11.7	1.8	1.8	7.0	16.5	20.5	21.9
	3	8.1	7.1	13.7	12.6	2.3	1.9	25.5	18.4	34.0	24.4
	4	8.1	8.0	13.4	13.3	2.3	2.6	22.5	18.1	22.2	24.9
	5	8.3	8.1	11.5	13.3	5.1	3.0	25.0	21.9	11.9	24.6
	6	11.7	9.1	15.9	14.5	7.6	3.5	40.0	20.1	33.1	33.1
平均 (合計)		7.9	7.4	12.0	12.7	3.5	2.4	149.5	118.1	139.3	149.0
4月	1	11.9	10.0	16.1	15.7	7.1	4.2	51.5	17.4	27.3	31.9
	2	11.4	11.3	36.0	17.0	6.1	5.7	60.0	17.3	25.7	29.3
	3	15.6	11.7	22.0	16.9	8.9	6.1	0.0	20.5	43.1	29.6
	4	15.5	12.8	20.8	18.7	10.6	7.1	17.0	18.7	37.8	33.8
	5	15.2	13.6	17.9	19.2	12.2	8.2	25.5	13.5	12.4	33.8
	6	17.0	14.6	21.4	20.5	12.1	8.5	24.5	15.9	28.1	37.0
平均 (合計)		14.4	12.3	22.4	18.0	9.5	6.6	183.5	103.4	179.8	195.5
5月	1	16.2	15.7	21.0	21.3	10.5	9.7	0.0	13.1	43.7	35.2
	2	15.9	16.3	20.8	21.9	10.9	10.6	18.0	17.1	27.8	35.5
	3	17.0	16.5	22.0	21.8	11.0	10.9	27.5	27.1	37.9	32.8
	4	18.1	17.1	23.7	22.7	12.1	11.4	0	22.9	43.5	35.4
	5	18.1	17.9	22.8	23.6	14.1	12.2	0	13.1	33.4	38.3
	6	18.5	18.7	23.5	24.0	12.9	13.5	30.0	20.6	36.9	41.0
平均 (合計)		17.3	17.0	22.3	22.5	12.0	11.4	89.0	113.9	219.8	218.2
6月	1	17.5	19.3	21.5	24.9	13.4	14.0	5.0	16.2	34.3	37.9
	2	20.7	20.1	25.3	25.0	16.3	15.4	9.5	17.0	34.5	33.2
	3	24.0	20.6	29.8	25.2	18.4	16.3	0	21.7	56.7	29.8
	4	23.1	21.5	28.4	26.0	17.5	17.4	10.0	22.5	37.0	30.4
	5	24.5	21.8	28.9	26.0	21.2	18.1	98.0	42.5	19.9	25.3
	6	23.2	23.0	26.8	26.9	20.2	19.5	30.5	42.4	14.2	23.3
平均 (合計)		22.2	21.1	26.8	25.7	17.8	16.8	169.0	161.4	193.0	179.9

月 半旬	気 温 (°C)						降水量 (mm)		日照時間 (h)		
	平 均		最 高		最 低		本年	平年	本年	平年	
	本年	平年	本年	平年	本年	平年					
7 月	1	27.0	23.6	32.0	27.7	23.7	20.3	61.0	41.4	28.0	23.8
	2	27.6	24.2	32.7	28.4	23.6	20.5	104.5	42.4	28.2	26.4
	3	24.0	25.0	26.9	29.2	21.6	21.6	42.0	44.4	12.3	23.7
	4	27.4	25.2	31.6	29.6	23.5	21.4	15.5	35.1	23.5	31.0
	5	28.9	26.3	35.1	31.0	24.5	22.3	5.0	18.3	41.3	36.5
	6	29.8	26.7	34.5	31.4	25.4	22.7	0	12.9	57.9	46.6
平均 (合計)	27.5	25.2	32.2	29.5	23.8	21.5	306.0	194.5	175.5	188.0	
8 月	1	29.1	27.7	33.5	32.0	24.8	22.9	0	15.1	51.6	41.8
	2	27.4	26.9	31.7	31.7	23.3	22.8	0	22.3	47.7	36.3
	3	27.4	26.6	31.3	31.4	23.3	22.6	2.5	29.4	43.7	34.0
	4	27.8	26.1	31.8	31.1	23.9	22.5	1.5	20.1	35.9	34.5
	5	28.9	25.9	34.8	30.6	24.9	22.0	12.5	24.4	36.0	29.9
	6	27.0	25.6	32.1	30.5	23.7	21.6	128.0	27.8	24.6	39.1
平均 (合計)	27.9	26.5	32.5	31.2	24.0	22.4	133.0	139.1	252.2	215.5	
9 月	1	25.3	24.6	29.4	29.4	21.7	20.7	0	39.5	37.5	30.4
	2	26.7	23.5	31.5	28.1	22.1	19.7	0	41.8	40.5	25.6
	3	28.4	22.8	32.9	27.5	24.5	19.0	2.5	31.4	35.0	25.4
	4	28.6	22.0	33.1	26.7	24.9	17.9	0	40.3	36.5	25.7
	5	23.7	20.7	27.2	25.3	19.9	16.7	24.0	36.5	17.0	22.4
	6	23.4	20.0	27.1	24.7	19.6	15.8	0	41.2	26.6	24.1
平均 (合計)	26.0	22.3	30.2	27.0	22.1	18.3	24.5	230.6	216.3	153.7	
10 月	1	19.7	19.1	23.7	24.1	16.7	14.5	90.0	24.8	16.9	25.7
	2	18.9	18.2	22.1	23.2	15.3	13.7	75.0	21.6	15.1	25.9
	3	19.4	17.4	25.0	22.6	14.4	12.8	0	26.2	35.0	24.8
	4	20.4	16.0	25.0	21.4	15.2	11.0	36.0	36.6	18.6	27.4
	5	19.0	15.2	23.7	20.7	13.4	10.4	6.0	27.5	19.1	26.5
	6	16.6	14.5	20.5	19.8	12.9	9.5	33.0	20.8	16.1	29.8
平均 (合計)	18.9	16.7	23.2	22.0	14.6	12.0	248.0	157.5	129.5	160.1	
11 月	1	16.7	13.5	20.2	19.2	12.3	8.6	163.0	26.3	14.6	24.4
	2	12.1	13.6	16.8	18.8	7.6	8.9	31.0	20.6	22.3	23.3
	3	14.6	12.0	19.4	17.1	9.7	7.6	1.5	32.1	28.8	18.5
	4	12.2	10.8	16.6	16.0	8.7	6.3	27.0	20.3	10.6	19.0
	5	9.9	10.1	14.4	15.4	6.0	5.5	34.5	20.2	12.9	19.2
	6	9.7	9.4	13.2	14.1	5.8	5.2	24.0	29.9	9.5	16.7
平均 (合計)	12.5	11.6	16.8	16.8	8.3	7.0	261.5	149.4	96.7	121.1	
12 月	1	10.6	8.3	14.9	13.3	6.5	4.0	0.5	23.0	14.6	17.6
	2	7.4	7.8	10.8	12.5	4.3	3.7	11.5	24.3	17.1	17.4
	3	5.9	7.1	9.7	11.4	3.2	3.4	63.5	29.8	9.5	14.3
	4	5.9	6.1	9.0	10.2	2.6	2.5	23.0	24.0	18.3	14.0
	5	5.4	6.3	8.7	10.4	2.1	2.4	60.5	22.5	11.6	14.7
	6	6.6	5.2	9.6	9.4	3.5	1.7	2.5	30.1	13.6	17.0
平均 (合計)	6.9	6.8	10.4	11.2	3.7	2.9	133.5	153.6	77.7	95.1	

観測地点：砂丘地農業研究センター（東伯郡北栄町田井 529）

（降水量、日照時間：平年値、本年値とも倉吉アメダス）

（温度平年値30年のうち：平成5年～令和2年は砂丘地農業研究センター、令和3～5年は倉吉アメダス）

月 半旬	気 温 (°C)						降水量 (mm)		日照時間 (h)		
	平 均		最 高		最 低						
	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	
1月	1	8.0	4.9	12.5	9.3	3.5	1.7	14.5	23.5	20.8	11.6
	2	5.8	4.6	9.5	9.5	2.3	1.1	16.0	28.8	10.1	12.0
	3	6.3	4.4	10.5	8.8	2.3	1.1	20.0	31.6	17.4	10.9
	4	7.2	4.7	10.0	9.2	3.4	1.3	46.0	28.3	7.0	12.1
	5	2.8	4.0	5.6	8.4	0.6	0.7	77.5	26.2	8.1	10.1
	6	3.5	4.2	9.3	8.8	0.1	0.7	12.0	29.9	13.4	16.0
平均 (合計)	5.5	4.5	9.6	9.0	2.0	1.1	186.0	168.4	76.8	72.7	
2月	1	4.7	4.9	7.6	8.9	2.6	0.6	44.5	21.4	7.1	13.7
	2	4.2	4.6	7.7	9.5	1.4	0.4	15.0	22.8	7.2	14.6
	3	9.3	4.4	14.9	10.4	2.4	1.4	21.5	22.2	31.5	15.5
	4	9.7	4.7	14.4	9.9	4.6	0.9	17.5	25.9	20.3	16.4
	5	6.1	4.0	7.6	11.4	4.3	1.5	49.0	16.1	1.0	18.7
	6	5.5	4.2	8.7	11.3	2.0	1.9	25.5	11.7	3.4	10.7
平均 (合計)	6.6	4.5	10.2	10.2	2.9	1.1	173.0	120.1	70.5	89.6	
3月	1	5.2	6.7	8.4	11.9	1.5	2.2	39.0	24.4	14.5	18.7
	2	5.3	7.0	8.1	12.3	1.8	2.6	10.0	20.0	20.2	18.3
	3	8.1	7.6	13.7	13.4	2.3	2.5	19.0	16.9	36.5	24.1
	4	8.1	8.8	13.4	14.9	2.3	3.6	20.0	24.0	21.6	23.6
	5	8.3	8.4	11.5	14.4	5.1	3.3	27.0	21.5	13.9	23.2
	6	11.7	10.0	15.9	16.2	7.6	4.4	34.5	20.9	32.6	31.4
平均 (合計)	7.9	8.1	12.0	13.9	3.5	3.1	149.5	127.7	139.3	139.2	
4月	1	11.9	10.8	16.1	16.7	7.1	5.4	47.0	21.6	29.2	29.7
	2	11.4	11.7	36.0	18.1	6.1	6.0	54.5	13.1	27.8	29.0
	3	15.6	12.3	22.0	18.1	8.9	6.8	1.0	18.4	45.1	28.2
	4	15.5	13.5	20.8	20.2	10.6	7.7	22.0	15.4	40.3	30.1
	5	15.2	14.6	17.9	20.5	12.2	9.0	30.5	14.7	11.7	27.7
	6	17.0	15.2	21.4	21.7	12.1	9.4	28.5	14.7	25.7	33.0
平均 (合計)	14.4	13.0	22.4	19.2	9.5	7.4	183.5	98.0	179.8	177.6	
5月	1	16.2	17.0	21.0	23.0	10.5	11.1	0.5	14.9	46.3	32.0
	2	15.9	17.2	20.8	23.5	10.9	11.5	18.5	15.4	26.3	31.1
	3	17.0	17.2	22.0	23.4	11.0	11.6	36.0	28.1	36.9	29.3
	4	18.1	18.1	23.7	24.5	12.1	12.9	0	18.1	41.9	31.0
	5	18.1	19.0	22.8	25.5	14.1	13.3	0	17.0	32.6	34.6
	6	18.5	19.6	23.5	25.6	12.9	14.2	34.0	21.8	35.8	34.5
平均 (合計)	17.3	18.0	22.3	24.3	12.0	12.4	89.0	115.2	219.8	192.4	
6月	1	17.5	20.1	21.5	26.3	13.4	15.0	5.5	9.3	31.1	31.9
	2	20.7	20.4	25.3	26.2	16.3	15.7	8.5	14.5	35.0	24.9
	3	24.0	21.3	29.8	26.5	18.4	17.1	0	24.6	61.5	23.3
	4	23.1	22.2	28.4	27.5	17.5	18.0	8.0	20.9	34.9	23.9
	5	24.5	22.7	28.9	27.6	21.2	18.9	109.5	29.3	19.3	19.4
	6	23.2	24.0	26.8	28.9	20.2	20.1	37.5	43.4	11.2	17.3
平均 (合計)	22.2	21.1	26.8	25.7	17.8	16.8	169.0	161.4	193.0	179.9	

月 半旬	気 温 (°C)						降水量 (mm)		日照時間 (h)		
	平 均		最 高		最 低		本年	平年	本年	平年	
	本年	平年	本年	平年	本年	平年					
7 月	1	27.0	24.5	32.0	29.2	23.7	21.1	55.0	45.0	22.0	18.1
	2	27.6	25.0	32.7	29.6	23.6	21.5	106.5	46.8	24.7	19.1
	3	24.0	25.6	26.9	30.6	21.6	22.0	67.0	37.4	10.6	18.5
	4	27.4	26.1	31.6	31.6	23.5	22.0	20.5	41.8	17.1	27.5
	5	28.9	27.2	35.1	32.9	24.5	22.9	57.0	17.6	42.3	31.8
	6	29.8	27.6	34.5	33.4	25.4	23.4	0	17.1	58.8	38.5
平均 (合計)	27.5	26.0	32.2	31.2	23.8	22.1	306.0	205.7	175.5	153.5	
8 月	1	29.1	28.4	33.5	34.3	24.8	23.8	0	14.4	55.3	38.4
	2	27.4	28.3	31.7	34.4	23.3	23.9	0	23.8	53.4	33.5
	3	27.4	27.6	31.3	33.5	23.3	23.4	3.0	29.6	50.2	29.7
	4	27.8	27.1	31.8	33.1	23.9	22.9	0.5	22.7	31.1	31.6
	5	28.9	26.7	34.8	32.6	24.9	22.4	42.5	24.0	43.1	28.6
	6	27.0	26.0	32.1	31.8	23.7	21.5	87.0	28.7	19.1	33.9
平均 (合計)	27.9	27.4	32.5	33.3	24.0	23.0	133.0	143.2	252.2	195.6	
9 月	1	25.3	25.0	29.4	30.4	21.7	21.1	0	47.3	45.1	24.6
	2	26.7	24.0	31.5	29.4	22.1	20.1	0	46.5	45.8	22.4
	3	28.4	23.6	32.9	29.1	24.5	19.5	4.5	28.5	37.2	23.1
	4	28.6	22.8	33.1	28.1	24.9	18.6	0	38.6	42.4	23.5
	5	23.7	21.4	27.2	26.8	19.9	17.4	20.0	32.9	18.1	21.4
	6	23.4	20.7	27.1	26.2	19.6	16.4	0	39.0	27.7	22.6
平均 (合計)	26.0	22.9	30.2	28.3	22.1	18.8	24.5	232.9	216.3	137.7	
10 月	1	19.7	20.0	23.7	25.5	16.7	15.6	87.5	25.2	16.7	22.7
	2	18.9	19.0	22.1	24.6	15.3	14.6	68.5	21.7	17.4	24.1
	3	19.4	18.2	25.0	24.0	14.4	13.7	0	19.6	38.8	24.2
	4	20.4	16.8	25.0	22.6	15.2	12.0	53.0	28.6	19.6	25.8
	5	19.0	16.2	23.7	21.7	13.4	11.7	6.0	34.6	19.0	22.7
	6	16.6	14.9	20.5	20.7	12.9	10.3	33.0	16.5	18.0	28.6
平均 (合計)	18.9	17.5	23.2	23.2	14.6	13.0	248.0	146.1	129.5	148.1	
11 月	1	16.7	14.0	20.2	20.0	12.3	9.4	163.0	26.9	16.5	23.2
	2	12.1	14.0	16.8	19.4	7.6	9.5	31.0	17.8	22.3	22.2
	3	14.6	12.8	19.4	17.9	9.7	8.7	2.5	29.4	26.8	18.1
	4	12.2	11.1	16.6	15.9	8.7	7.3	20.5	24.4	11.1	16.6
	5	9.9	10.4	14.4	15.7	6.0	6.3	23.5	20.9	12.0	17.3
	6	9.7	10.2	13.2	15.0	5.8	6.3	21.0	21.3	8.0	13.9
平均 (合計)	12.5	12.1	16.8	17.3	8.3	7.9	261.5	140.7	96.7	111.3	
12 月	1	10.6	8.6	14.9	13.6	6.5	4.7	0.5	26.2	14.0	14.9
	2	7.4	7.5	10.8	12.3	4.3	3.9	15.5	25.6	16.9	15.0
	3	5.9	7.1	9.7	11.5	3.2	3.6	53.0	33.1	9.7	12.3
	4	5.9	6.1	9.0	10.4	2.6	2.5	21.5	24.5	13.1	13.1
	5	5.4	6.4	8.7	10.9	2.1	2.7	40.5	26.4	11.5	13.0
	6	6.6	5.3	9.6	9.7	3.5	1.7	2.5	31.1	12.5	13.9
平均 (合計)	6.9	6.8	10.4	11.2	3.7	2.9	133.5	153.6	77.7	95.1	

観測地点：弓浜砂丘地分場（境港市中海干拓地 27）

数値は全て境測候所アメダス値
（平年値は1991年～2020年の平均）

項目 旬	月	気 温 (°C)						降水量 (mm)		日照時間 (h)	
		平 均		最 高		最 低		本年	平年	本年	(平年)
		本年	平年	本年	平年	本年	平年				
1 月	上	7.1	5.5	10.7	9.0	3.4	2.2	52.5	58.6	29.4	20.5
	中	7.4	4.9	10.8	8.3	3.9	1.8	75.0	64.8	30.0	19.5
	下	4.0	4.4	7.7	7.9	1.5	1.3	85.5	66.6	16.0	23.0
平均(合計)		6.2	4.9	9.7	8.4	2.9	1.8	71.0	63.3	25.1	21.0
2 月	上	5.9	4.6	8.7	8.3	4.0	1.2	68.0	51.4	18.2	25.0
	中	9.2	5.2	15.0	9.2	4.0	1.6	45.5	49.5	47.8	28.7
	下	6.9	6.2	8.7	10.3	5.4	2.3	46.0	39.4	9.5	30.9
平均(合計)		7.3	5.3	10.8	9.3	4.5	1.7	53.2	46.8	25.2	28.2
3 月	上	6.3	7.1	9.5	11.4	3.0	3.0	40.0	44.8	36.6	38.1
	中	9.1	8.2	14.1	12.9	3.9	3.7	34.0	47.4	62.2	45.9
	下	11.0	9.6	14.5	14.4	7.6	5.1	72.0	48.1	45.9	55.3
平均(合計)		8.8	8.3	12.7	12.9	4.8	3.9	48.7	46.8	48.2	46.4
4 月	上	12.8	11.4	17.6	16.4	8.3	6.7	93.5	39.8	59.0	56.0
	中	17.1	13.3	23.0	18.4	11.4	8.5	1.0	34.9	50.5	60.7
	下	17.0	15.1	20.9	20.3	13.7	10.3	34.0	35.0	40.0	65.8
平均(合計)		15.6	13.3	20.5	18.4	11.1	8.5	42.8	36.6	49.8	60.8
5 月	上	17.1	16.9	22.0	22.1	12.0	12.1	15.0	41.1	72.9	67.3
	中	18.1	17.9	23.8	23.0	12.5	13.3	55.5	42.4	81.0	68.1
	下	19.5	19.3	24.4	24.3	15.6	14.9	29.5	36.3	74.0	75.4
平均(合計)		18.2	18.0	23.4	23.1	13.4	13.4	33.3	39.9	76.0	70.3
6 月	上	20.2	20.5	24.7	25.0	16.7	16.7	15.0	33.8	62.7	62.2
	中	24.7	21.7	30.1	25.9	20.0	18.4	10.0	53.5	96.9	54.3
	下	24.6	23.1	28.5	27.0	21.8	20.1	164.0	87.1	28.9	44.3
平均(合計)		23.2	21.8	27.8	26.0	19.5	18.4	63.0	58.1	62.8	53.6

項目 旬 月	気 温 (°C)						降水量 (mm)		日照時間 (h)		
	平 均		最 高		最 低		本年	平年	本年	(平年)	
	本年	平年	本年	平年	本年	平年					
7 月	上	27.7	24.6	31.9	28.4	24.8	21.7	178.0	89.1	57.9	44.2
	中	26.2	25.8	29.7	29.9	23.5	22.9	61.5	80.1	25.6	54.4
	下	30.3	27.2	35.2	31.4	26.6	24.1	9.5	47.7	114.2	76.5
平均(合計)		28.1	25.9	32.3	29.9	25.0	22.9	83.0	72.3	65.9	58.4
8 月	上	29.6	27.9	33.9	32.2	26.5	24.7	0.0	33.0	112.4	72.9
	中	29.0	27.4	32.6	31.6	26.0	24.3	1.0	42.1	89.9	66.6
	下	29.1	26.4	34.0	30.5	25.7	23.3	147.5	61.0	67.8	66.2
平均(合計)		29.2	27.2	33.5	31.4	26.1	24.1	49.5	45.4	90.0	68.6
9 月	上	27.4	24.9	31.6	28.8	23.9	21.8	21.0	74.6	98.3	51.5
	中	29.1	23.3	33.6	27.1	26.1	20.1	28.0	71.1	76.7	50.0
	下	24.9	21.5	28.0	25.3	22.0	18.0	34.5	63.0	60.1	48.6
平均(合計)		27.1	23.2	31.1	27.1	24.0	20.0	27.8	69.6	78.4	50.0
10 月	上	20.8	19.8	233.7	23.8	18.2	16.1	136.0	45.5	28.1	48.8
	中	20.8	17.9	25.5	22.2	16.6	13.9	40.0	44.7	58.2	52.4
	下	18.8	15.9	22.3	20.3	15.1	11.8	46.0	53.7	36.3	52.9
平均(合計)		20.1	17.9	93.8	22.1	16.6	13.9	74.0	48.0	40.9	51.4
11 月	上	15.8	14.2	19.1	18.7	12.0	10.1	183.0	42.9	44.3	43.8
	中	14.3	12.3	18.2	16.6	10.7	8.4	23.5	48.8	42.2	35.5
	下	10.4	10.5	13.9	14.6	7.1	6.7	53.5	51.4	21.3	30.0
平均(合計)		13.5	12.3	17.1	16.6	9.9	8.4	86.7	47.7	35.9	36.4
12 月	上	9.4	8.7	13.0	12.6	6.3	5.1	21.5	65.1	25.1	25.6
	中	6.5	7.2	9.7	10.9	3.6	3.9	92.0	60.6	19.7	23.7
	下	6.8	6.3	9.6	9.9	4.0	2.9	52.5	64.3	19.2	25.3
平均(合計)		7.6	7.4	10.8	11.1	4.6	4.0	55.3	63.3	21.3	24.9

観測地点：日南試験地（日野郡日南町阿毘縁 1203-1）

（平年値：平成3年～令和2年の30年間、茶屋アメダス）

（※本年の気温は日南試験地で測定、他は茶屋アメダス）

項目		気 温 (°C)						降 水 量		日 照 時 間	
		平 均		最 高		最 低		(mm)		(hrs)	
月	半旬	本 年	平 年	本 年	平 年	本 年	平 年	本 年	平 年	本 年	平 年
1 月	1	2.7	0.5	7.7	4.6	-1.8	-3.8	30.5	21.8	19.3	11.4
	2	-0.1	0.2	3.5	4.2	-4.1	-4.1	17.0	22.5	4.8	11.0
	3	1.1	-0.1	6.4	3.9	-2.8	-4.4	29.5	22.5	18.4	11.1
	4	2.7	-0.4	7.0	3.6	-1.5	-4.7	45.5	22.5	10.4	10.7
	5	-0.6	-0.8	1.7	3.3	-3.0	-5.0	70.0	21.9	3.8	10.5
	6	0.4	-0.9	5.2	3.1	-3.6	-5.3	6.5	25.5	12.0	13.8
平均(合計)		1.0	-0.3	5.3	3.8	-2.8	-4.5	199.0	136.7	68.7	68.5
2 月	1	0.8	-0.8	3.7	3.4	-1.0	-5.4	29.5	20.7	7.7	13.0
	2	0.6	-0.3	4.3	4.1	-1.8	-5.2	5.5	20.5	8.3	14.0
	3	3.7	0.1	10.3	4.7	-1.7	-5.0	18.0	21.5	20.9	14.6
	4	5.8	0.3	12.1	5.0	0.7	-4.7	17.5	23.4	19.9	15.3
	5	2.7	0.5	4.5	5.3	1.2	-4.4	47.0	24.5	2.3	16.1
	6	1.5	1.0	4.6	5.8	-1.2	-4.1	30.5	19.6	10.8	13.4
平均(合計)		2.5	0.1	6.6	4.7	-0.6	-4.8	148.0	130.2	69.9	86.4
3 月	1	1.2	1.3	4.7	6.4	-3.8	-3.7	47.5	24.2	9.8	17.6
	2	1.2	2.1	4.8	7.4	-2.5	-3.2	15.0	24.0	17.3	19.0
	3	5.3	3.0	11.5	8.6	-0.5	-2.5	16.5	24.0	37.2	19.8
	4	5.1	4.0	11.1	9.7	-0.2	-1.7	32.0	23.9	24.3	20.0
	5	5.0	4.7	8.9	10.6	0.6	-1.0	29.0	22.4	11.1	20.0
	6	9.6	5.5	15.1	11.6	4.5	-0.4	49.5	24.7	30.9	25.0
平均(合計)		4.6	3.4	9.3	9.0	-0.3	-2.1	189.5	143.2	130.6	121.4
4 月	1	9.8	6.8	15.7	13.1	4.1	0.4	46.0	19.6	25.8	23.5
	2	9.5	8.0	17.8	14.5	2.0	1.4	64.0	20.3	28.7	25.2
	3	12.8	9.1	21.8	15.6	4.1	2.3	0.5	21.3	44.3	25.9
	4	13.4	10.1	21.9	16.6	6.1	3.2	8.0	20.8	39.9	26.3
	5	13.7	11.1	17.9	17.8	9.5	4.1	25.0	18.9	12.1	27.0
	6	15.6	12.2	22.3	19.0	9.3	5.2	24.0	18.0	20.8	28.4
平均(合計)		12.5	9.6	19.6	16.1	5.9	2.8	167.5	118.9	171.6	156.3
5 月	1	13.7	13.3	21.1	20.1	6.3	6.5	0.5	19.2	43.3	28.7
	2	12.1	14.0	17.6	20.6	7.4	7.4	26.0	21.8	26.1	27.4
	3	14.0	14.2	20.5	20.6	6.3	7.8	37.0	24.4	40.0	26.5
	4	14.6	14.6	21.7	20.9	7.5	8.3	2.5	23.9	44.3	27.3
	5	16.0	15.2	22.5	21.5	10.6	9.0	0.0	21.5	38.5	28.7
	6	15.7	16.0	21.5	22.2	9.9	9.9	31.5	24.2	31.9	34.8
平均(合計)		14.3	14.5	20.8	21.0	8.0	8.2	97.5	135.0	224.1	173.4
6 月	1	14.4	16.8	19.4	23.0	10.3	10.8	9.0	19.3	22.1	28.8
	2	17.7	17.5	22.4	23.6	13.0	11.8	24.0	19.3	33.9	27.6
	3	20.9	18.2	27.7	23.9	13.9	12.9	0.0	23.2	55.1	25.5
	4	19.8	19.0	25.7	24.3	13.6	14.3	18.0	35.1	32.7	21.5
	5	22.0	19.7	25.7	24.5	18.7	15.5	84.5	50.1	9.6	17.2
	6	20.8	20.4	24.1	24.9	17.7	16.4	64.5	56.4	7.3	19.3
平均(合計)		19.3	18.6	24.2	24.0	14.5	13.6	200.0	203.4	160.7	139.9

項目		氣 温 (°C)						降 水 量 (mm)		日 照 時 間 (hrs)	
		平 均		最 高		最 低					
月	半 旬	本 年	平 年	本 年	平 年	本 年	平 年	本 年	平 年	本 年	平 年
7 月	1	24.6	21.1	28.5	25.7	21.0	17.1	49.5	50.7	23.6	17.4
	2	25.2	21.8	29.7	26.4	21.1	17.8	66.0	47.4	25.5	18.5
	3	21.9	22.3	24.6	26.9	19.4	18.3	75.5	52.3	7.1	18.8
	4	24.7	22.7	28.8	27.6	20.8	18.6	5.0	49.6	16.1	21.8
	5	25.6	23.2	32.0	28.3	20.8	18.9	38.0	36.1	39.1	25.8
	6	26.4	23.5	31.6	28.8	22.4	19.2	0.0	28.9	57.5	33.2
平均(合計)		24.7	22.4	29.2	27.3	20.9	18.3	234.0	265.0	168.9	135.5
8 月	1	26.0	23.6	31.8	29.0	20.4	19.2	0.0	21.7	48.4	28.0
	2	24.2	23.5	30.3	29.0	19.2	19.2	0.0	25.3	49.6	27.1
	3	24.2	23.4	29.9	28.7	18.8	19.2	0.0	27.3	48.4	25.5
	4	24.3	23.1	29.2	28.4	20.4	18.8	0.0	26.8	29.9	24.5
	5	25.8	22.6	31.8	28.0	21.3	18.2	50.5	25.3	37.0	24.5
	6	24.1	22.1	27.6	27.4	21.5	17.5	111.5	29.0	14.8	29.2
平均(合計)		24.8	23.0	30.1	28.4	20.3	18.7	162.0	155.4	228.1	158.8
9 月	1	22.1	21.2	28.0	26.6	17.2	16.7	0.0	28.9	38.6	22.5
	2	24.0	20.2	30.4	25.5	18.0	15.8	0.0	35.1	40.8	19.6
	3	24.7	19.3	29.7	24.5	20.4	14.9	36.5	37.0	19.6	18.1
	4	25.5	18.3	31.3	23.5	20.4	13.7	0.5	37.1	34.3	18.3
	5	19.9	17.2	24.1	22.5	15.7	12.5	21.0	37.1	14.8	19.0
	6	20.1	16.1	25.3	21.5	16.1	11.2	0.0	33.9	23.2	19.0
平均(合計)		22.7	18.7	28.1	24.0	18.0	14.1	58.0	209.1	171.3	116.5
10 月	1	16.6	15.1	20.9	20.7	13.0	10.1	47.5	28.5	18.7	19.2
	2	15.8	14.2	19.6	20.0	12.1	8.8	63.0	25.1	12.2	20.7
	3	14.8	13.1	21.9	19.3	8.6	7.5	0.0	23.8	35.4	22.7
	4	17.2	11.8	21.7	18.2	12.5	6.0	39.0	22.4	16.2	23.5
	5	14.7	10.7	19.6	17.1	9.0	4.8	11.0	20.3	18.2	22.8
	6	13.0	9.9	17.7	16.3	8.8	4.0	30.5	22.9	14.7	25.7
平均(合計)		15.4	12.5	20.2	18.6	10.7	6.9	191.0	143.0	115.4	134.6
11 月	1	13.4	9.2	17.3	15.6	8.5	3.4	207.0	19.0	15.3	21.3
	2	7.7	8.6	14.3	14.7	1.8	2.9	10.5	20.1	21.2	20.0
	3	10.4	7.6	16.9	13.3	3.9	2.2	3.0	20.8	25.3	17.5
	4	7.8	6.4	12.5	12.1	4.1	1.0	33.5	19.1	10.4	16.2
	5	4.6	5.5	10.1	11.2	-0.1	0.2	17.5	18.8	17.9	15.5
	6	4.6	4.7	7.8	10.2	1.4	-0.3	60.0	20.8	3.8	14.3
平均(合計)		8.1	7.0	13.2	12.9	3.3	1.6	331.5	118.6	93.9	104.8
12 月	1	4.3	3.8	9.1	9.2	-0.2	-1.0	1.0	21.9	9.8	14.0
	2	1.9	3.1	5.0	8.2	-0.6	-1.5	25.5	22.0	8.1	13.7
	3	1.4	2.4	4.6	7.2	-1.1	-1.9	37.5	22.0	10.0	12.8
	4	-0.3	1.8	2.9	6.4	-3.1	-2.4	27.0	21.4	6.7	12.5
	5	0.8	1.4	4.5	6.0	-1.9	-2.9	23.5	21.0	13.4	12.5
	6	0.6	1.0	3.2	5.4	-2.3	-3.4	18.5	25.3	4.5	14.7
平均(合計)		1.5	2.3	4.9	7.1	-1.5	-2.2	133.0	133.6	52.5	80.2